390
74

ОБЬ ИНТЕЛЛИГЕНЦІИ

Ибановь Разумникъ

ヤィツ ンゲリェィテンイ

大正
13. 7. 28
購求

390-74

卷頭に

ロシヤで云ふインテリゲンツィヤが、日本語に譯して云へば知識階級が、單なる有識階級のことでないことは、既に周知の事實である。ロシヤの歴史上、インテリゲンツィヤが社會の指導者乃至批判者として、最も重大な役割を演じて來たことも、又周知の事實であらう。

インテリゲンツィヤが本質上單なる有識階級のことでない爲めに、それに對する定義解釋の上に、昔から非常に相異した二つの意見が加へられ、それが現代に至る迄ロシヤの社會思想史上の中心的問題となつて來た。インテリゲンツィヤに對する社會的倫理的解釋に社會的經濟的解釋とがそれである。

ロシヤの凡ゆる社會思想は何等かの點でインテリゲンツィヤの問題に觸れざるを得ない。インテリゲンツィヤの問題を拔きにしては、ロシヤの社會思想は中心的問題を失ふかの觀がある。資本對勞働の問題と同じ程度に、インテリゲンツィヤの問題は、彼等社

會思想家の解かねばならない必死の問題である。そして筆者イワノーフ・ラズームニクの意見によれば、ロシヤの殆ど全部の雜多な社會思想家達は、實に此問題の爲めに倒れたと云つてもよい程である。

インティェリゲンツィヤは超階級的觀念家であるか、階級的觀念家であるか、インティェリゲンツィヤは倫理的に解釋さるべきか、經濟的に解釋さるべきか、支配階級か、被支配階級か、搾取階級か、被搾取階級か――實にこの問題を中心にして、ロシヤの社會思想家は相分裂して行つたかの觀がある。

インティェリゲンツィヤ排斥の聲は、現代のロシヤにもあるとの事である。ラズームニクが本書に論じたマハーエフシュチナは、その先驅者の一人であらう。

或は知識階級の一部の人士が、經濟的事象を無視して、所謂自己完成の核内に閉じこもらうとしてゐるのも、現在吾々が周圍に見る所の事實である。著者が本書の後篇で論じた『罪を悔ゆるラズノチーニェッツ』は、その先驅的現れの一つであらう。

インティェリゲンツィヤは確に論難考察に價する問題である。若しもインティェリゲンツィヤ

に就いての解釋が曖昧であるならば、それは確に明瞭ならしめねばならない丈の重大問題である。譯者は此點で著者に多大の敬意を拂ふものである。インティェリゲンツィヤに對する種々なる迷言を啓發した點で、著者に敬意を拂ふものである。現代の吾々は、少くとも此の程度の解釋上より來る論難考證の試驗には、通過合格して居なければならないと思ふ。そして社會的現象の純科學的研究と云ふ事が、此程度の倫理的水準の遙か前途に横たはつてゐるといふ點に、思ひ至らなければなるまい。

最近政治學上乃至社會學上非常に壓迫されてはゐるが、然し確固として立てられた學說批判を有する現日本の吾々に取つては、本書が一部の人々には無用の書であり、一部の人には必要の書であると思はれる。所謂理想主義から啓發された人には無用の、然し啓發されざる人には必要の書と思はれる。近き將來に於て本書が現日本人に取つて全く無用の書となり、餘りに明々白々の平凡の書物とならんことを、譯者は切に希望して止まない。問題は此書物の彼方にあるからだ。

現日本の學者の間に横はる溝渠間隔を橋渡す書物――本書譯出の使命がありとすれば、

そこにあらう。そして未だ未だ日本の大部分のインティェリゲンツィヤには、確にこの書物の程度の倫理的標準を通過し去る必要がある。インティェリゲンツィヤ排斥の聲が起るにせよ、然らざるにせよ、インティェリゲンツィヤの社會的任務乃至力は決して拒否さるべきではないだらう。誤れるインティェリゲンツィヤは、正しきインティェリゲンツィヤに代はられるであらう。世に科學的眞理に對する爭がある限り、そしてその眞理を主張徹底せしめる必要のある限り、インティェリゲンツィヤの存在も、その存在することの必要も、存續するであらう。新しきインティェリゲンツィヤは擡頭することであらう。世の一切の人がインティェリゲンツィヤに列せざる限り、社會上に一團をなすところのインティェリゲンツィヤが存在するであらう。

インティェリゲンツィヤは單にロシヤの社會的問題の研究者のみでなく、ロシヤ文學の研究者にも、同程度に意味のある問題である。それ程ロシヤの一般生活へインティェリゲンツィヤの投げかけた影は深い。インティェリゲンツィヤが單なる有識階級でないからでもあらう。決死的、冒險的、革命的、反抗的、現狀打破的——ロシヤ民族性そのものゝそうした一面の現れだからでもあらう。

此飜譯の原書は、千九百十年、ピェティテルブルグで出版された本書の第二版である。自分は非常に考へさせられながらこれを譯了した。

譯者は尙本書の原書を貸與された片上伸先生に對し、飜譯上教導を與へられた馬場哲哉先生に對し、深厚の感謝の念を捧げるものである。

大正十三年六月

譯者

例言

本書は一九〇八年に出版された露國イワノーフ・ラズームニク氏(Иванов Разумникъ)著『マハーエフシュチナとは何ぞや?——インティェリゲンツィヤの問題に關連して』と云ふ一論文に、更らに原著者の新らしい、亦意味深い一論文を加附せる"Объ Интеллигенціи"を譯出せるものである。著者の爲人に就いては知名なる人として定評ある以外遺憾ながらこれを知り得ない。

本書に冠せる『インティェリゲンツィヤ』なる言葉が、有識階級を內容とする單なる「知識階級」と言へ得ないことは已に明かである。十九世紀の六十年代に、ボボルイキンが始めて此の名稱を使つて以來、種々な變遷とそれが解釋とを伴つたが、露西亞の社會問題の一核心として、亦思想問題の潛勢力として常に樞要な地位を占め來たつた點に於ては、依然今日も差異を見ないのである。

謂はゞインティェリゲンツィヤは、露國の凡ゆる方面に細根を下した奇しき一存在で、こ

れを抜きにしてはその國の思想問題にせよ、社會問題にせよ殆んど意味ないものとなるかとさへも思はるゝ程である。從つて、原著者イワノーフ・ラズームニクの言葉通り、殆んど全部とも謂ふべき程の露西亞の社會思想家達が、此の問題に面當しては倒れてゐたにも係らず、これを中心として動き、將來にも斯る襲套を見るであらう如くに重大視されてゐる露國の巨大なる舞臺に、巨大なる役割を演ずべきインティェリゲンツィヤの本體が果して何であるか、此の團體が如何なる社會の部面に屬すべきであるか、此の構素が何であるかは、可なりの多くの批評家達に論研され來たものではあるが、此の研究が一の文獻となつて社會的に發表されたもの、極めて少なかつたのは却つて不思議にさへ思はれる。

本書は、此の問題を俎上に置き、その實體の眞髓を見極めようとせるもので、インティェリゲンツィヤの起原より現在に至るまでの史的變遷を明細に記述すると共に、これに明徹なる批判を與へ、此の團體を經濟的に解義すべきものであるか、倫理的に釋明すべきものであるか、此に反して、階級的觀念家に屬せしむべきか、超階級的觀念家であるか、支配搾取階級に入るべきか、被支配、被搾取階級に歸屬さるべきであるかに對して、古來の思

想家、批評家の解釋を一々是非論駁して其の蒙を啓き、これが將來に於て取るべき道を十分に示してゐる。博引旁證本書の如きは、インティェリゲンツィヤの研究上の有力なる一文獻として將に推賞さるべきものと思ふ。

日本の知識階級が、特種の社會的階級であつて、智力的生產の手段であるところの智識の獨占的及び繼承的所有を特徵とするものであり、それは、丁度中資本家の特質が物質的生產の手段を獨占的に又は繼承的に所有するに似たものとして、これを白手階級に入るべきであるか、又無產階級に入らしむべきかに關し、卽ち社會上の彼れ等の地位を知るべき上にも好個の暗示となるに相違ない。然かも日本の知識階級が自己の地位を知ることの、將來如何に重要なる關係あるかは論を俟たない。

近來國際的諸關係に見て、特に露國との國交の密なるを要する際、彼國の社會問題の根幹たるインティェリゲンツィヤの素成を十分に察知するは誠に意味深きを信ずるものである、敢て本書を刊行して讀者に推す所以である。

尙ほ本書の翻譯を擔當され且つ序を寄せられし早稻田大學露西亞文學科出身三宅賢君に

對し滿腔の謝意を表するものである。亦本書を協會のため推薦され、且つ序文を寄せらるる筈なりし片上伸氏が、急遽露國に去られて稿を得なかつたのは遺憾の極みである。

茲に遠く氏の御厚志を謝すると共に氏の健在を祈念する。

大正十三年七月

大日本文明協會識

目次

上篇 マハーエフシュチナとは何ぞ

インティェリゲンツィヤの問題に關連して……一

第一章 序論……一

第二章 インティェリゲンツィヤの歴史……八

第三章 マハーエフシュチナの歴史……三〇

第四章 マハーエフシュチナの要點……四一

第五章 マハーエフシュチナ批判……五三

第六章 マハーエフシュチナの社會主義批判……一三六

第七章　インティェリゲンツィヤに對する社會的經濟的解釋……二〇九
第八章　社會的經濟的解釋批判……二二七
第九章　インティェリゲンツィヤに對する社會的倫理的解釋……二五一

下篇『罪を悔ゆるラズノチーニェッツ』とは何ぞや

インティェリゲンツィヤの問題に關連して

第一章　序論……二七九
第二章　階級的觀念家と超階級的觀念家……二八三

第三章　社會的經濟的現象Pと社會的倫理的現象R……二九二
第四章　社會的倫理的現象のR……二〇七
第五章　罪を悔ゆるラズノチーニェッツ……三一七
第六章　社會的形式と個性の內面的生命……三二四
第七章　眞理と民衆幸福との對立……三三五
第八章　インティェリゲンツィヤと民衆……三四五
第九章　兩者間の不一致及び反感……三五四
第十章　インティェリゲンツィヤの商人的傾向に

對する非難……三五四
第十一章　結論—吾等の取るべき道……三六六

目次終

インテリゲンツィヤ

上篇　マハーエフシュチナとは何ぞ

インテリゲンツィヤの問題に關連して

第一章　序論

『マハーエフシュチナ』はロシヤのインテリゲンツィヤの間に現れた新しい傾向の社會的思想であるが、これは必ずや讀者の大多數に取つては未だ全く知られてゐないに相違あるまい。然しながらこの言葉は最近益々新聞雜誌の中に現れるやうになつた。例へば或新聞の『勞働運動記錄』欄には、これこれの勞働者會議に於いて、社會民主黨員及び社會革命黨員の演說が終ると、『勞働陰謀黨』の代表者が辯士として現れたと書いてあつて、

その『勞働陰謀黨』といふ文字の下には、括弧をして『マハーエフシュチナ』と添へ書きが附いてゐたこともあつた。又は社會主義的な週刊雜誌や論文集の中には、『著名なるマハーエフシュチナ』とか『有名なるマハーエフシュチナ』といふ言葉が出てゐて、それに就いて何事かゞ說かれてゐたのである。尙例を擧げるならば、無政府主義、マクシマリーズム、或ひは革命的シンディカリーズムに對する社會主義者の攻擊が起る場合には、同時に『マハーエフシュチナ』も當然に一擊を受けなければならなかつたのである……かういふ譯であるから、一般の讀者には『マハーエフシュチナ』が必ずや新しい傾向の思想であり、ロシヤ社會思想の極左翼に立つものに相違ないと察せられたのであつたが、然しこれ丈けでは單に推測に止まつてゐて、一體『マハーエフシュチナ』とは何ぞやといふ問題に關しては、餘り解き明かしては呉れなかつたのである。

ともかくロシヤのインティェリゲンツィヤの間のこの新傾向の思想を知るといふことは、多くの點に於いて全然無興味のことではない。追々說明するに從つて分るであらうが、『マハーエフシュチナ』の根柢には社會主義の批評があるのである。先づその點から解き初めることにしよう。マハーエフシュチナに取つては、社會主義とはニーチェの云ふところの征服さるべき（überwinden werden soll）ものである。社會主義とは『インティェリゲンツィヤの階級的觀念』に外ならないからといふのである。今日に至るまでのすべての『マハーエフシュチナ』とは、要するに、社會主義に對する激烈な批評に外ならないのである。從つてマハーエフシュチナの否定的部分の方が、夫の組織的方面を壓倒してゐる形になつてゐて、その組織的方面は今尙胚の狀態にあると言つてよいのである。今日に於いても、このマハーエフシュチナの『批評』に對して、社會主義の側から、殊にマルクス系統の社會主義の側から、何等の答辯も出てゐないのである。象ともいふべき社會主義は默々として己の道を步むといふ風で、狆のマハーエフシュチナの吠え聲をば全く知らないと云ふ譯である。或ひはよしそれに氣附いたとしても、鼻の先きであしらうといふ譯で、全く注意を向けてゐないのである。社會主義がかうした狀態を取つてゐるといふことは正しいとも云へるが、それは部分的にである。社會主義が正しいといふのは、マハーエフシュチナが社會主義を批評する場合に度々非常な無識、無智を示すことがあるからである。呆然として手もつけられないや

うなことを言ひ出すからである。社會主義的思想の代表者等がマハーエフシュチナを雀のやうに考へて、彼等の批評に答辯をしようと思はない心持は、全く理解し得られると言つてよい。雀に向つて大砲を打ち出すには及ばないからである。論旨の進むに從つて、自分はマハーエフシュチナの中に現れた眞珠とかダイヤモンドとかを一つ一つ列べて見て、すべてのマハーエフ的の批評がどのやうな眞珠に滿ち滿ちてゐるのであるかを見たいと思ふのである。（マハーエフシュチナとはマハーエフ主義とかマハーエフ的思想のこと。）然しこの屑のやうな、ガラクタと思はれる批評の中にも、時にはマハーエフシュチナの非常に注目すべき根柢的條件に出遇はす場合があるのである。

千八百六十年代の終り頃から七十年代にかけて、ロシヤの將來、主としてロシヤの經濟生活に關して二つの異つた意見が現れたことは多くの人の知るところである。その一つはナロードニキ卽ち國粹主張者であり、他の一つはマルクシストである。ナロードニキは產業制度を外來のものと見、ロシヤ固有の經濟生活とは根本に於いて相容れないものとするが、マルクシストの一派は、これに反して、ロシヤが產業制度を樹立するやうになつたこ

とは避くべからざること、見る。ナロードニキは農民の共同村落制度の中に未來の社會生活の根本要素を置かうとするのに、マルクシストは農民でない勞働者の中にそれを置かうとするのである。かうした二つの主張はその後現在に至るまで相爭つてゐるのであるが、このマルクシスト一派乃至ナロドーニキ等の何れもの確立されたドグマに凝り固まつて了はない人々にとつては、又は己の世界觀の批評的證明を求めようと徹底的に探索してゐる人々にとつては、マハーエフシュチナの根柢的個條は、そのやうな證明の試金石ともなり得るのである。それのみでなくマハーエフシュチナはロシヤのインティェリゲンツィヤの歷史にとつても、ロシヤの社會思想史にとつても、非常に興味のあるものである。從つてこの新しい思想的傾向の本質を深く探つて、他のいろいろな傾向とそれらの進化的關係乃至影響などを明かにする必要がある。それを明かにすることは、論理的發展乃至延長としてマハーエフシュチナを生むに至つた或社會主義的思想が、如何なる論理的歸結に到達し得るか、又到達しなければならないかを明かにする爲めにも、やつて見なければならないのである。又このことは、マハーエフシュチナが外ならぬ正統マルクシーズムの論理的延長とし

て現れて來るものであることや、又マハーエフシュチナの中心點として見るべきものが、インティェリゲンツィヤの社會的組織の中に占めてゐる位置に就いての、現代に至つて再び新しく論じ出された問題に對する一つの答へであるとなどを、はつきりさせる爲めにも、尙一層必要なことなのである。丁度今から二十年前に、このインティェリゲンツィヤの位置を如何に考ふるかといふ點から、正統派のマルクシーズムが發足し出したやうに、現代に於いてもこの問題を如何に考ふるかといふことから、マハーエフシュチナは出發してゐるのである。先づ第一に、この問題が今まで如何に考へられたかといふことを極く簡單に述べる必要がある。さうすれば初めて『何處から』マハーエフシュチナが出て來たかといふ事も明かになつて來るであらうし、マハーエフシュチナは現代に於て何を示そうとしてゐるかも明かになるであらう。インティェリゲンツィヤの位置が如何に考へられて來たかを短く述べてから後に、『マハーエフシュチナ』の名前の解釋とか、この新しい思想的傾向の文獻に就いてとか、又はそれの根本要素の解剖とか批評とかを論ずることにしよう。思想の內面的な系統を辿るといふことは、單にその思想が事實の中に外面的に現れたのを述るよりも、一

層興味あることでもあり、又重大でもあるからである。

第二章　インテリゲンツィヤの歴史

インテリゲンツィヤが或社會的現象であり、或社會的團體であることには疑ひがない。只問題となるのは、この團體が何によつて、又如何に特質附けられてゐるかといふことにある。この團體が究極に於て現してゐるところのものは、社會的經濟的性質の現象であるか、それとも社會的倫理的性質の現象であるかといふことに存する。この問題に對しては實にいろいろな解答が與へられたのであつたが、さうかうして居る間に既に半世紀は經過したのである。

『インテリゲンツィヤ』といふ名稱は、人々の知るやうに、十九世紀の六十年代に現れ出したのであつて、この名稱を初めて使用したのは、ベー・ボボルイキン（一八三六―一九二一）の文學的功績の一つであると言つてよい。然しすべて新らしい名稱といふものが現れだしたもの、眞に根を下すに至るには、豫め生活そのものがその名稱の根を下すべき土地に準備をして置かなければならないのである。丁度六十年代はその準備が出來上つた

時代であつた。ラズノチーニェッツが結合した一團體として頭を擡げて來たのもその頃であり、この新らしい社會的團體に對して單に身分的階級的の名稱のみではなく、經濟的及び倫理的の定義が附與されたのもその頃であつた。ラズノチーニェッツとは、當時のロシヤに於ける身分上の種々な區別、卽ち貴族、商人、職人、農民などの何れの階級にも屬してゐないところの、特別の身分上の立場に在る人々のことであるが、彼等は主として知識はあるけれども財產がなく、必ずしも僧侶でもなく、官吏でもなく、又商人でも職人でも農民でもないのである。彼等の多くは、貴族階級の出身であるが、その階級の身分上の特權に與ることの出來ないやうな人々である。ロシヤには一代貴族（リーチヌイ・ドゥヲリャニーン＝文字通りに譯せば、單身貴族である）といふものがあるが、彼等は國家に對する功績によつてその本人一人だけ一代限りの貴族に列せられ、貴族としての特權に與ることが出來たのである。然し父の受けたやうな特權に與ることの出來ない彼等の子女達も、教育は貴族階級の子女と同樣に可成り充分な敎育を受け、納稅の義務は免ぜられるのである。從つて彼等は、知識は有るけれども財產はなく、貴族のやうであるがさうでもなく、身分上

特殊な位置を占めてゐたといふべきである。このやうなラズノチーニェッツが結合した一團體として、頭を擡げて來たのが、十九世紀の六十年代であつた。そしてこのラズノチーニェッツの特質に早くも注意を拂つて、それを一つの言葉に言ひ表したのはピーサリェフ（一八四一―一八六八）であるが、彼の定義の中には社會的經濟的性質が非常によく含まれてゐた。ピーサリェフはこのラヅノチーニェッツから成り立つたインティェリゲンツィヤの一團を『思索するプロレタリアート』と名づけたのである。（一八六五年『ロシャの言葉』と言ふ雜誌に掲げられた彼の論文『思索するプロレタリアート』の中に於て。）この定義は、ロシヤの正統マルクシーズム、殊に謂ゆる『イスクリーズム』（雜誌『イスクラ』派の主義乃至傾向）の立場にあつた正統マルクスシーズムの發達した時代に於ては、一般の通用語となり、又殊に使用されるやうにもなつたのである。六十年代、七十年代に於てはピーサリェフの定義は餘り成功を博さなかつた。それといふのもこの當時には、この擡頭して來た社會的集團に對して附せられた『インティェリゲンツィヤ』といふ名稱の方が一般に廣く使用されたからである。『インティェリゲンツィヤと』いふ名稱は社會的經濟的のでも、また社會

的倫理的のでもないやうな、中立的な名稱であるが、却つてその漠然とした點や、廣い意味を含んでゐるやうなところなどから、一般に廣く用ひられるやうになつたのである。

ピーサリェフの社會的經濟的の定義が他の中立的のもの、爲めに餘り使用されなかつたといふのも、主として、ピーサリェフの直ぐ次に批評的なナロードニチェストヲ（國粹派）の全盛時代が來たからである。批評的國粹派の人々はインティェリゲンツィヤの本質を解剖するに當つて、インティェリゲンツィヤの社會的倫理的方面に主なる點を置いたからである。自分は此處で『主なる』といふ言葉を用ひて『絶對唯一の』といふ言葉を用ひないが、それは國粹派もやはり社會的經濟的の地盤の上に立つてゐたからである。然しさうではあつたが、そのことは國粹派の人々が社會に於けるその倫理的解釋の上に大きな意味を認めやうとしたことの邪魔にはならなかつたのである。倫理的標準を包含して居るべきところのいろいろの現象とても、社會的經濟的地盤の上に發生し得るからである。そして實際このやうな社會的倫理的標準を初めてインティェリゲンツィヤに持つて來たのはラウロフ（一八二三―一九〇〇）である。彼れはインティェリゲンツィヤを『批評的に思索する個性』の集團

と名づけたのである。この場合には中心點は、或社會的集團が思索するプロレタリアートとして現はれたといふことの上にではなく、その集團が批評的に思索する集團として現はれたといふことの上に置かれてゐる。卽ちラウロフの說によれば、その集團は一定の社會的倫理的理想の爲めに戰ひ、一定の目的に向つて進まんとしてゐるといふことになり、プロレタリアートといふことよりも批評的といふことが大切な點となつて來るのである。このやうにしてピーサリェフとラウロフとは、インティェリゲンツィヤに就いて二つの代表的に相違した解釋を試みたのであつたが、時の進むに從つて益々發達して來たこの社會的集團に對して、其後いろいろ試みられたところのすべての解釋は、この二つの解釋の何れかに分けられることが出來るのである。今日に於てさへもインティェリゲンツィヤに就いてこの問題は呈出されることが可能であり、又この二つの觀察點の何れからか決定されることが出來るのである。卽ち第一の場合には、インティェリゲンツィヤを社會的經濟的集團と見て、その集團の中のいろいろの等級に現はれたいろいろの倫理的現象に就ては、全然注意を拂はないか、若くは最少限度の注意をしか拂はない。第二の場合には、インティェリゲンツィヤを

社會的倫理的の集團と見て、その集團內のいろいろの等級の有してゐるいろいろの經濟的生活には全然注意を拂はないか、若くは最少限度の注意をしか拂はない。この觀察點を綜合統一することは不可能である。第一の觀察點より見ればインティェリゲンツィヤは社會階級であるが、第二の觀察點より見れば、それは超階級的の集團だからである。然しながらこの本質的に相違した觀察解釋の雙方に多少の餘裕を作つて見れば、何うにかかうにか一つの特殊の解釋が出來ない譯でもない。何故といふに、その二つの相違した解釋は、何れも餘り分裂し過ぎた觀察批評の兩極端を示してゐるからである。そこに多少の餘裕が作られないことがないからである。例へば、インティェリゲンツィヤに就いての社會的經濟的觀察點からすれば、結局インティェリゲンツィヤは特殊の經濟的社會階級であるといふ結論に到達すべきだからである。(又マハーエフシュチナの見るところもそうなのである。)然しこのやうなところまで行くには、マルクス派の思想も、いろいろな中間的な、媒介的な徑路の幾つかを通り、長い長いいろいろな廻り路をし、又種々な苦しい論辯考察を經なければならなかつたのである。

六十年來のロシヤの社會思想はピーサリェフの說によらず、ラウロフの說によつて、動いたのである。インティェリゲンツィヤは超階級的集團として考へられ、社會的倫理的意義を附させられたのである。そして殊に興味のあるとは、この當時はロシヤのブルジュアージャの發生成長した時代であり、コルバーエフとかラズワーエフとか（これらの名前は一種の渾名であつて、不正な手段によつて富を作つた人々を意味するのである―譯者―）その外搾取階級の雄なる人物が現れた時代である。そしてこの新らしい、非常な勢ひで成長して行く階級に對しては、ロシヤのナロードニチェストヲ（國粹派）といへども、初めからそれの社會的經濟的意義を重大視したのであつたが、この時に特色的な、又興味あるとして見るべきは、社會的經濟的概念がロシヤの土地に移されると、明瞭な倫理的の色彩を完全に帶びて來たとである。西ヨーロッパに於て倫理的には中立的な意味に用ひられた『ブルジュア』といふ言葉がロシヤの土地に移されると、明らかに倫理上否定的な性質を帶びるやうになつたのである。グリェーブ・ウスペンスキー（一八四三―一九〇二）が描いた人物によつて、『ブルジュア』といふロシヤ語は否定的なものとして、ロシヤ社會に受け取られるやうになつたのである。（もつと古い所を探せば、千八百六十年代の初めにドストイエーフスキーによつて書かれた『夏の印象に就いての冬の記錄』の中にも、その言葉に對して倫理上否定的の見解が現はれてゐる。）そして又注目すべきことには現代に於ては、このやうな倫理上否定的な意味を有するものがもはや階級的な意味の『ブルジュアージャ』といふ言葉ではなく、身分上の區別を示すメシュチャーンストヲ（町人階級）といふ言葉となつたことである。然しこのやうな事柄は餘談で、別に大切な點ではないが、然し七十年代にはインティェリゲンツィヤとブルジュアージャ（此場合この言葉は社會的經濟的の意味で用ひられてゐるのだが）との相互の關係が、主として社會的倫理的の見地から觀察されて居たといふことに意を留めて置かなければならないのである。この兩者の相互の關係を明かにしたのは、ミハイローフスキー（一八四二―一九〇四）の功績と言つてよい。一八八一年から一八八二年にかけて、雜誌『祖國雜纂』（一八八一年第十號及び十二號、一八八二年第一號）に於て、ミハイローフスキーはこの問題を取扱ひ、ブルジュアージャ及びインティェリゲンツィヤを勞働する多數の民衆に對する兩者の態度關係に從つて評價したのである。

ミハイローフスキーの說によれば、インテリゲンツィヤは一定した『集合名稱』であり、ブルジュアージャは階級である。然し場合によつては、例へば、十八世紀のフランスに於てのやうに、一國のブルジュアージャがその國のインテリゲンツィヤであつた場合もあるけれども、しかしそれだからといつて、インテリゲンツィヤが卽ちブルジュアージャといふことは到底出來ないのである。何故出來ないかといへば、何の身分何の階級に屬するかを定め難いところのインテリゲンツィヤや、全く『特殊の社會上の力』であつて、その力の進み行く先は、ブルジュアージャの進み行くところとは全く違ふからである。ブルジュアージャの根本的な特質は、生產の方法を占有し、剩餘價値を出來るだけ多く獨占しようとする點にあるので、從つてブルジュアージャは一般に所有の不平均を益々强めようと努力するのであるが、インテリゲンツィヤの倫理的及び社會的思想は、それとは全く反對に生產の手段を一般の共有物にしようとするのみでなく、一般の經濟的及び社會的の平等を要求する點に存するのである云々。ミハイローフスキーのすべての思想の中心觀念となつてゐるのが『平等』であることは、知れ渡つた事實である。――吾々がインテリゲンツィヤ

となり得たのは、實に民衆の『牛のやうな勞働と血のやうな汗』との御蔭であると考へて、この『民衆の前に刺されるやうな責任感』を痛感するものは、おのづからこの平等に向つて進まうとする要求を抱くやうになるのであるが、この要求乃至憧憬こそは、道德上の驚くべき美しい性格の人々、卽ち六十年代七十年代に於てラズノチーニェッツから成り立つたインテリゲンツィヤと共に現れたところの、謂ゆる『罪を悔ゆる貴族』を生むに至つた根本動力である。（ミハイローフスキーの論文集、第五卷、頁五〇八―五一二、五一四―五一五、五三七―五四六、五六六―及び其他を見よ。『罪を悔ゆる貴族』に就いては、ミハイローフスキーの有名な評論『斷絕の中へ』を見よ。）これらすべてに就いては尙一層詳しく說明する必要があり、到底このところで簡單に言ひ盡すことは出來ないが、然しこれ丈で自分が前に述た言葉を繰返して言つても略ぼ了解せられるであらう。卽ちナロードニェチストヲの全盛時代には、インテリゲンツィヤの問題は主として社會的倫理的の見地から考察されたといふことが分るであらう。

千八百八十年代はロシヤの思想發達史に於ける代表的な移り代りの時代であつて、イ

ンティェリゲンツィヤの問題は依然として論爭の中心點として注目を集めてゐたのであつたが、この問題に就いての新しい、見るに値ひするやうな解釋は一つも現れなかつたのである。この時代の新聞雜誌には、一體インティェリゲンツィヤとは何ぞやとか、社會に於けるそれの位置及び意義は如何とか、その他の問題に就いていろいろの解釋考察が可成り澤山出たのであつた。これ等の問題に就いて、時々は實に思ひ切つた、意想外の、驚くべき解答が現れたこともあつた。一八九〇年に發行されたウェ・エスといふ頭字の名で著された、或人の手になつた論文集などは、實に斬新奇拔の隨一のものであらう。其本の表題は『さまざまの題目に關する感想評論、並びに久しからぬ過去の生活の光景』といふのである。その中の論文の一つには、インティェリゲンツィヤとは官吏に外ならず、何故ならば官吏もインティェリゲンツィヤも同樣に智力的勞働を特色としてゐるからであると書いてある。この問題に就ては、マハーエフシュチナの中にも多少の相違があるにはあるが、今の場合はこうした觀察の中に、インティェリゲンツィヤに對する態度の社會的倫理的の見地から社會的經濟的見地への推移のあとが、認められるといふ丈けに止めて置かう。そしてこのやうな推移は單に

ウェ・エスといふ人の思想の中に見られる許りでなく、ユーゾフ・カブリーッとかウェ・ウェ・などのナロードニチェストヲの右翼に屬する人々の書いたもの、中にも見ることが出來るのである。もつともカブリーッはその著『インティェリゲンツィヤと民衆』といふ書物の中ではほんの通りがゝりに同樣な見解を示してゐるにすぎないけれども。然しウェ・ウェの場合に於いては、このやうな考へ方が彼の論文『歴史的インティェリゲンツィヤの身分上の特質』とか『ロシヤのインティェリゲンツィヤの特質』などの根抵に存在してゐるのである。ウェ・ウェの何れの論文も千八百九十二年に『ロシヤの富』といふ雜誌に掲げられたが、それらは後に『吾等の傾向』といふ一册の本になつて發行された。ウェ・ウェはいふ、――インティェリゲンツィヤはその學問上社會上の構造に於ては、一定の階級の代表者となつて現れてゐる。インティェリゲンツィヤは意識的には一般的な、理想的な問題を研究しようとするが、無意識的には、それらの問題の代りに、部分的な、階級的な問題を研究しようとする。インティェリゲンツィヤは人類の歴史的發達の結果である。人類を幾つかの階級に分割することを道程として行はれる發達の結果に外ならない云々。(『吾等の傾向』の頁二四―二五、四九及びその他の頁

を視よ。)もつとも、ウェ・ウェ・はこれ等すべてを西ヨーロッパ的の、即ちブルジュアージヤ的のインテリゲンツィヤに向つて言つたのであつて、彼の意見によれば、ロシヤのインテリゲンツィヤはそれほど階級的でもなく、身分上の差別が明かでもないのである。(同書頁八五及九〇を見よ。)然しながら何時でも、又どんな場合でも、インテリゲンツィヤは創造的な社會的動因として、インテリゲンツィヤ自身が附屬するところの階級が持つてゐる限りの力を支配所有するのであるとウェ・ウュ・は言つてゐる。この樣な譯で、ウェ・ウェ・は結局のところインテリゲンツィヤの社會的倫理的のではなく、社會的經濟的の解釋を呈出したのである。ウェ・ウェ・にとつては、前に述べた如く、インテリゲンツィヤは或特權即ち搾取階級の一部分であつて、インテリゲンツィヤはその階級に於いては智力的勤勞者の役目を演じてゐるといふことになる。……このやうな解釋の中には既にマハーエフシュチナに類似した多くの點が存在するのであるが、そのことは何れ後になつて論ずることにしよう。ともかく、このやうな解釋は既にインテリゲンツィヤに就いての國粹派の、社會的倫理的の考へ方から、インテリゲンツィヤに就いてのマルクス派の、社會的經濟的の定義への推移を示すも

のと言つてよいのである。ウェ・ウェ・と同時代にウェ・ザスーリッチ女史もインテリゲンツィヤに就ての全く同一な意見を述べて、インテリゲンツィヤをブルジュアージヤの階級の一部分と認めてゐるのである。(一八九〇年雜誌『社會民主黨』所載の『ブルジュアの間より出でた革命家』といふ女史の評論を見よ。)

マルクシーズムがインテリゲンツィヤに對する場合は、その性質上社會的經濟的見地に立つて見るのが至當であるのだが、ロシヤのマルクシーズムはさう手取早くはこの見地に立たなかつたのである。マルクシーズムの根本の思想から嚴格に論理的に考へて行くと、マルクシーズムのインテリゲンツィヤに對する態度は、眞實には下の二つの中の何れかでなければならないのである。即ちインテリゲンツィヤを純然たる單獨の階級として認むべきであるか、或ひはインテリゲンツィヤは全然に、若くは部分的に、他の階級に屬すべきものであるか、この二つとなつて來るのである。第一の解釋はマルクシーズムの決定的に受けつけないものであるから、從つて第二の解釋が殘る許りであるけれども、これは又非常に不明瞭であるといはなければならない、インテリゲンツィヤをいろいろの階級に分割し

て所屬せしめるといふことは、そもそも何を意味するものであるか？　このことは、各々の階級がめいめいのインティェリゲンツィヤを所有してゐることを意味するのであるか？　それとも、インティェリゲンツィヤは只ブルジュアージャの一部分に過ぎないといふのであるか？　或ひは又プロレタリアートの一部分であるといふのであるか？　或ひはこれ等の二つの階級の間に介在するとでもいふのであるか？　然るに若し最後の說を認めるとすれば、マルクシーズムは中間階級的とか超階級的とかの集團の存在を承認することになるので、マルクシーズムにとつては非常な危險でもあり、又非常な異端にも落ち入ることになりはしないか？　ロシヤのマルクシーズムはかうしたいろいろの解答を順次に經て來たのである。ピョートル・ストルーウェの『批評的觀察』(一八九四年版)は正統マルクシーズム文獻の端緒をなしたものだと言はれてゐるが、その本の中で、ストルーウェはインティェリゲンツィヤの問題に就いて、マルクシストとしては非常に獨創的な意見を述てゐる。彼の說によれば、インティェリゲンツィヤは社會的經濟的には全く無力であり、只だ社會的倫理的に多少の意義を持つてゐるに過ぎない。即ちインテリゲンツィヤは身分上の區別を持たず、何れの階

級にも屬してゐないので、從つてよいいかに智力的の力があり倫理的の意義を有するとしても、社會的經濟的に見ては全くの零であるといふのである。ピョートル・ストルーウェはインティェリゲンツィヤを以て、要するに理想家の一小群に過ぎないと輕蔑的に言つてはゐるが、マルクシストの立場として超階級的超身分的の集團の存在することを認めたといふことは、何ういふものであらう？　そこでロシヤのマルクシーズムもインティェリゲンツィヤに對するこのやうな異端的な見地に久しくは止まることが出來なくなつたのであつたが、數年の間といふものは、單にストルーウェの說を多少變更しながら維持するといふ有樣であつた。もつともこの變更に際して、マルクシーズムがインティェリゲンツィヤに對して益々否定的な態度を取つて來たことは、忘れてはならない點である。これは經濟主義と言はれた時代のことで、千八百九十年代の半ば頃である(一八九六年―一八九九年)。社會民主黨がプロレタリアートの階級鬪爭の代表機關となるべき勞働黨を組織しようとして、いろいろと骨を折つてゐたのもその頃であつた。從つて、九十年代の始めに當つて、『鬪爭聯盟』と名づけられたプロレタリアートの最初の組織を作る爲めに、多少大きな努力を拂つてゐたインティェ

リゲンツィヤに對して、――社會的に無力で、超身分的で超階級的であつたインテリゲンツィヤ（よし彼等が社會民主的であるにもせよ）に對して、挑戰するやうな態度に出でたといふことは、極く自然なことだと言つてよい。こゝに於いて經濟主義の人々はこのインテリゲンツィヤに反抗して立つに至り、『自己解放團』の宣告とか、勞働思想といふ經濟主義の機關に於いて、『勞働者の團體組織の中に入ることを最も許すことの出來ないのは、かの智力階級の闘爭聯盟がその利益を殊勝にも擁護しようとしてゐるところの、それ等の人々である』と言ひ、『勞働者は結局のところ自分自身の手の中に自分自身のことを把握して了はなければならない』と言つたのである。經濟主義の根柢的の考へ方とマハーエフシュチナとの密接な關係に就いては、後に說くことにして、こゝではこの經濟主義の考へ方を最も巧みに利用したのは、經濟主義の主張の下火になるや否や直ちに非常な勢ひを高めて來たところの、警察社會主義であつたことを言つて置かなければならないのである。ヅバートフシュチナ（警察社會主義を企んだのはモスクワの警察官ヅバートフであつたので、警察社會主義をヅバートフ主義卽ちヅバートフシュチナともいふ）やニヂウィーシメツ等やウ

シャコーウェッ等（兩者は共に社會民主黨に對して反抗してゐたのである。）などの根本的な目的は、勞働者の集團の意識の中に、プロレタリアートとインテリゲンツィヤとの利害は全く相反對であるといふ思想を吹き込むのにあつた。そこでこのヅバートフシュチナに對する闘爭の手段として、又經濟主義に對する反動として、インテリゲンツィヤの部分的復活運動が謂はゆる『イスクラ』（社會民主黨の機關雜誌）の時代のマルクシーズムの中に現れるに至つたのである。千九百十一年に雜誌『曙光』に於いてボトレソフは斷然としてインテリゲンツィヤに對する虐待に反抗して起つたのである。然しこの場合にボトレソフは、『批評的觀察』を書いたストルーウェの不明確な社會的倫理的解釋を拔け出でゝ、インテリゲンツィヤを社會的經濟的に考へようとするに至つたが、この態度こそマルクシーズムが初めから取るべきものであつたのである。もつとも以前のロシヤのマルクシーズムがインテリゲンツィヤに對して示したところの不明確な點を、ボトレソフが全く脫却し得たとは、いふことが出來ないのである。ボトレソフはインテリゲンツィヤに關して社會的經濟的の見方を下したところのピーサリェフに歸つて來た譯である。ボトレソフは丁度ピーサ

リェフが『思索するプロレタリアート』に就いて論じたやうに、到る處で『有識プロレタリアート』に就いて論じてゐる。然しながら一體この有識プロレタリアートとは何であるか、このラズノチーニェツ的インティェリゲンツィヤとは何であるか？　それは階級であるか、或ひは階級ではないのか？　若し階級でないとするなら、それはそもそも如何なる階級に附屬し、包含せられるのであるか？ボトレソフはかう答へるのである――インテェリゲンツィヤは一定した輪廓のない、特殊獨自の形式を有するもので、その一部分は一方からはブルジュアージャ的のインティェリゲンツィヤとなつて行き、また他の一方からはプロレタリアート的のインティェリゲンツィヤとなつて行くのである。この集團は常住不變の性質を有しないもので、絶えず混交錯雜する經過を通過して行くのであるが、然しそれが爲めに、倫理的のみならず、社會的の非常の重みを有する點に少しも支障を生ずることがないのである云々。此樣にしてインティェリゲンツィヤは再び階級と階級との間に存在する或集團といふやうな結論になつて來るのである。そしてマルクシームズが與へたインティェリゲンツィヤに就いての社會的經濟的解釋といふものも、やはり徹底する所まで徹底してゐない、

中途半端な、曖昧なものとなつて來る譯である。

勿論いろいろのマルクシースト達が一層徹底しようとし、一層論理を進めようとして、何とかして辻褄を合せて、インティェリゲンツィヤに社會的經濟的の解釋を與へようと努めたこともあつたのである。その中の第一の人々は、インティェリゲンツィヤはブルジュアージャの一つの附屬階級であると力說したが、しかしその主張者自身はその附屬階級の外にあるものと考へたのである。何れ吾々はこのやうなマルクスシスト的な解釋の一つを明細に說くつもりであるが、マルクシスト達の中の他の人々は、それとは反對に、インティェリゲンツィヤとプロレタリアートとが同一のものであると主張し、その理由として、インテェリゲンツィヤに屬する人々も、プロレタリアートに屬する人々も、共に自己の勞力を賣ることによつて生存するからであるといふのである。第三番目の人々は眞のインディェリゲンツィヤに屬する人人は取りも直さず彼等自身卽ちマルクシスト丈けである、卽ちプロレタリアートの觀念家で、眞實にプロレタリアートの利益の代表者であるマルクシスト達のことであるといふのである。更に第四番目の人々は、上の論者と全く同一の根據から、インティェリゲンツィ

ヤとブルジュアージャとが同一であることを主張し、マルクシーズムと社會民主主義とを眞のプロレタリアート的な思想と認め、それ等は何うしてもインティェリゲンツィヤ的な思想ではないといふのである。最後に第五番目の人々は、謂はゆる智力的勞働者の特別な一階級が存在する、そしてその一部分がインティェリゲンツィヤとなるのであるといふのである。然し、彼等のいふ處に從へば、突然にインティェリゲンツィヤの特質は社會的倫理的となつて來るのである。例へばインティェリゲンツィヤの特色的の點として敎導的な點を持つてゐることが擧げられ、尙一定の社會的倫理的理想に向つて進む精神がインティェリゲンツィヤになければならないことになつて來るのである。

これ等のさまざまの說を見ると、マルクシーズムは自ら問題として立てたところのものを解くことが出來ず、インティェリゲンツィヤに明確な社會的經濟的解釋を與へることが出來なかつたことが分るのである。その原因は、そのやうなインティェリゲンツィヤに就いての解釋なり斷定なりが、槪して不可能であつて、內面的に理論上の矛盾を含んでゐるが故であるか、又はマルクシーズムが最後の理論的終局點まで論理を徹底させず、その方法論

を徹底的に運用しないで、解剖すべきところまで解剖しなかつたが故であるか？　その何れかの理由によつて、マルクシストは自ら立てた問題を解決することが出來なかつたといふことになるのであるが、自分は第一の理由で解決し難かつたのであらうと思つてゐる。ところがマハーエフによつて主張せられた謂はゆるマハーエフシュチナは、第二の理由を主張してゐるのである。マルクシーズムのこの點に於けるギャップや誤謬を少しも假借するところなくマハーエフシュチナは暴露させて、絕對的眞理卽ちインティェリゲンツィヤに對する社會的經濟的の解釋はマハーエフシュチナに依て發見されたと唱へてゐるのである。そしてその眞理からいろいろの問題が流れ出て來るのであるが、その問題の組織されたものが卽ち我々が初めから研究しようと思つてゐたところのマハーエフシュチナである。そしてこのマハーエフシュチナを批評的に解剖して行くことによつて、最後に於いては自然とインティェリゲンツィヤの本質を解釋する鍵を見出すことが出來るやうになるのである。そもそもマハーエフシュチナとは何ぞやといふ問題を知ることによつて、そもそもインティェリゲンツィヤとは何ぞやの問題に對して解答を與へることが出來るのである。

第三章　マハーエフシュチナの歴史

マハーエフシュチナの内面的の發達經路を解釋する爲めに、その外面的に現はれた歴史に就いて先づ數言を費さなければなるまいが、何にしてもマハーエフシュチナの歴史は殆ど現在の歴史である以上、さう細かに語ることはなし難いのである。何うしても極く一般的な、大體の説明しか試みるとが出來ないことを、先づ了解して戴かなければならないのである。

千八百九十年代の半ば頃にヤクーツカヤ地方へ、その時分は未だマルクシーストであり、社會民主黨員であつた文名ア・チェ・ヲーリスキーといふ男が流刑に處せられたが、彼こそはマハーエフシュチナの創始者でもあり、頭領でもあつたのである。彼の本名のマハーエフからマハーエフシュチナといふ名稱の端緒が開かれた譯である。千八百九十八年から千九百年にかけて、流刑中の彼は社會民主黨的の運動についてとか、科學的社會主義に就いてとか、カール・マルクスの哲學の社會的經濟的根據に就いてとか、非常に澤山の評論文を

書いたのである。千九百年の初頭にはこのア・ヲーリスキーは外國に現れたが、そこでも彼は多くの新しい論文を書いた。例へばロシヤに於ける社會主義及び勞働運動に就いてとか、マルクシーズム及び科學的無政府主義の歴史的哲學的根據に就いてとかである。これ等のすべての論文は後に纒められ三部門に分かれた、一つのともかく思想の統一した本となつて、千九百四年から千九百五年にかけて、『智力的勞働者』といふ標題の下にジュニェーヴに於てア・ヲーリスキーの名によつて印刷されたのであつた。この標題を見れば、既にその本がインティェリゲンツィヤの問題を取扱つてゐることが分るであらう。最初の二部門はその後間もなくロシヤに於いて翻刻されたのである。（ア・チェ・ヲーリスキー著『智力的勞働者』第一部及び第二部。ウェ・ヤーコウェンコ書店出版『社會主義的叢書』第三―四號。千九百六年出版。サンクト・ペテルブルグ）。この書物こそマハーエフシュチナの福音書となつたものである。この本の内容は、第一部は社會民主主義の批評、第二部はマルクシーズムの批評から成り立つてゐて、主として批判的のものである。そこには全く明確に、美事に又決定的にマハーエフシュチナの根柢的な理論が述られてゐるのである。そしてこの本

に述られた思想を一層完全にし發達させる爲めに、ヲーリスキーは別に二册のパンフレットを書いたが、その一册は『十九世紀の社會主義の破産』といふのである。他の一册は『ブルジュアージャ的革命と勞働問題』といふのである。この二つのパンフレットは何れも無名で出版され、著者の本名もペン・ネームもその本には書かれてなかつたが、この二册はヲーリスキー卽ちマハーエフの手になつたと判斷しても差支へない點がある。夫はヲーリスキー自身がその後になつて、『十九世紀の社會主義の破産』は自分の著述であるといつたことがあり、他の『ブルジュアージャ的革命と勞働問題』に就いては、一九〇七年に『トワーリシュチ』新聞紙上の『勞働運動欄』に於いて、このパンフレットがヲースリキーのペンになつたものであると再三ながら書かれたとがあつたが、當のヲーリスキーは別にそれを否定もしないで默認してゐたからである。ロシヤに於いてはその中の第二番目のもの丈けが、千九百六年にサンクト・ペテルブルグの『勞働闘爭』出版所から翻刻せられたのである。從つてロシヤに於いて現在知られないまゝになつてゐるのは、『智力的勞働者』の第三部と、その思想の一層發展したものとして書かれたところのパンフレット『十九世紀の社會主義の破

産』とである。そしてこの後者の方はマハーエフシュチナの思想を理解するに最も興味もあり、又最も重大なア・ヲーリスキーの著述である。その上に、パンフレット『ブルジュアージャ的革命と勞働運動』によつて一般ロシヤの讀書界に傳へられた思想のすべての重要な點は、この『十九世紀の社會主義の破産』の中から持つてこられたものでもあり、そこから繰返して言はれたものでもあり、又そこから發展されたものでもある。そしてこの『ブルジュアージャ的革命と勞働問題』といふ本は、マハーエフシュチナのすべての根柢的思想を一般化し、平明化して、それを普及せしめる爲めに書かれたものであつて、實際初めから、廣い民衆の中にパンフレット式のマハーエフシュチナの爲めの宣傳的役目を演ずるやうに目論まれてゐたのであつた。然し又何と言つても、この『ブルジュアージャ的革命と勞働問題』といふパンフレットと、『智力勞働者』の第一部第二部の中には、マハーエフシュチナのすべての眞髓が集中せられてゐるのである。勿論自分は場合によつてはヲーリスキーの他の著述卽ち『智力的勞働者』の第三部及び『十九世紀の社會主義の破産』の中から引用することがあらうけれども、然しこれらの本によらずとも、ロシヤに於いて翻刻されたア・ヲーリ

スキーの著述丈けによつても、讀者諸君はマハーエフシュチナを徹底的に知ることが出來るのである。

以上のやうなものが、マハーエフシュチナの創立者ヲーリスキー卽ちマハーエフの著述である。彼の忠實なる弟子であり、又忠實なる繼承者であると同時に、今の所マハーエフシュチナの第二番目の觀念的代表者として現れて來たのは、エウゲーニー・ロジーンスキーである。ロジーンスキーがマハーエフシュチナの一人として論壇に打つて出たのは、千九百七年の初めのことに過ぎないが、彼の最初の『批判的社會的檢討』は『そも〳〵インティェリゲンツィヤとは何ぞや』といふ標題であつた。(千九百七年、サンクト・ペテルブルグ、『ノーウィ・ゴーロス』出版。)ヲーリスキーの著述の場合と同樣に、この書物に於いても既に標題の中にマハーエフシュチナの根柢的問題が暗示されてゐる。エウゲーニー・ロジーンスキーの著述は、一方からはインティェリゲンツィヤに反抗した挑戰的なパンフレットとも考へられ、他方からはア・ヲーリスキー卽ちマハーエフの根柢的思想を一層普及せしめた、又發展せしめたものであるとも考へられるのである。實際この書物に於いて、エウゲ

ーニー・ロジーンスキーはインティェリゲンツィヤに對する社會的經濟的の解釋を、論理の及ぶ限りの最後の所まで徹底せしめたからである。(然し殘念なことにはこの本の中でエウゲーニー・ロジーンスキーは、餘り無作法にもア・ヲーリスキー卽ちマハーエフの根本的思想を利用してゐながら、マハーエフのことに就いて一言も言つてゐないのである。ともかく、ア・ヲーリスキーの著述を讀んだすべての人々にとつては、ロジーンスキーが絕えずヲーリスキーの著述の影響の下に居て、屢々殆んど文字通りの全くの拜借をやつてゐることが一目にして分るのである。ロジーンスキー氏は彼の『批評的社會學的檢討』に對する或觀察——それは自分が彼の書物に對して初めて云ひ出した觀察と同じものであるが——その觀察に對して、餘り自信もないやうな調子で論戰を試みたこともあつた。自分はこの問題に就いてエウゲーニー・ロジーンスキーと論戰するのは、今でも無駄なこと、考へてゐるが、若しア・ヲーリスキーのすべての著述を明細に研究した現在に於いて自分がロジーンスキーの著述の批評をもう一度書くことがあるならば、以前の二倍にも三倍にも、エウゲーニー・ロジーンスキーが絕えずア・ヲーリスキーの思想に賴つてゐた證據を、いや賴つてゐ

た許りではない、全くの無斷借用の證據を、示すことが出來るであらう。私の批評が出た後で、當のロジーンスキーも最近の一文の中でア・ヲーリスキーが既にその思想を述べてゐたことを認めてゐるのであるが、これによつて彼は己の意識的にか、或は無意識的にか、やつたところの剽竊を辯解しようとしてゐるのである。)

エ・ロジーンスキーは千九百七年の初めに『代議制度の總決算』といふパンフレットを出した。これは代議制度の組織を鋭く批評したものであるが、吾々には餘り興味のあるものではないし、マハーエフシュチナを知る上に於いては殆ど關係する所がないと言つていゝのである。最後に、千九百七年の春からマハーエフ的の、不定期の、社會的諷刺的の、及び文學的批評的の『潮流に反して』といふ雜誌が出初めたが、その雜誌の輯編人であり、發行者であり、又唯一の執筆者であるのは、やはり例のエウゲーニー・ロジーンスキーであつた。此雜誌は千九百七年の秋までに三號を出したが、それ等にはマハーエフシュチナの本質を解釋する上になかなか興味のあるものが掲載されたと言つてもよいのである。

マハーエフシュチナに關する文獻といふのはこれで全部であるから、從つて何の苦もなく

上衣のポケットにその全部を押し込むことが出來る位である。もつとも、上に列擧したものゝ外に、尙勞働陰謀黨（卽ちマハーエフシュチナ）のいろいろの煽動的な極く短いものが存在するけれども、その中にはこれと言つて示すべき何等の新しいものもないのである。只その中で、千九百二年の四月に起こり出した五月のストライキに際して、勞働者に對してマハーエフシュチナの與へたところの宣言のみは見るに足るものと言つていゝ。讀者諸君も知る通り、勞働陰謀黨は、千九百十年迄のこの五年間以上といふものは、あらゆる場合に於て活動をやつてゐたのであつたが、千九百八年にはア・ヲーリスキー卽ちマハーエフはマハーエフシュチナの十年紀念祭を催してもい、譯であつた。といふのも、彼が『智力的勞働者』を書き出したのが千八百九十八年だからである。この時分からマハーエフシュチナはねばり强く又倦まずたゆまず口により文字によつて、プロパガンダをし初めたのであつた。當のア・ヲーリスキーの言葉によれば、『智力的勞働者』の第一部第二部は千九百年から千九百一年にかけて、シベリヤに於いても、謄寫版や復寫によつて、法律の眼から匿れ乍ら、印刷されたのであつた。かやうにして漸次にマハーエフシュチナは追從

者を得る樣になつて行き、吾々皆が非常によく承知してゐるやうに、三年以前には、ロシヤにマハーエフシュチナのいろいろのグループが存在した程になつたのである。然らばそのグループは果して澤山あつたか何うかと言へば、マハーエフシュチナの全部の文獻を一つのポケットに入れて了ふことが出來るやうに、すべてのマハーエフ主義者を易々と一つの腰掛に坐らせることが出來るといつてい、程である。ともかくかやうな譯で、マハーエフシュチナの戰法は典型的に虛無主義的であり、又かやうにしてマハーエフシュチナは、讀者が見られる通りに、原則的に『秘密結社的』の性質を持つてゐるのであるが、マハーエフシュチナのいろいろのグループの實際運動などは、この場合吾々の究研範圍に屬さないものである。『勞働陰謀黨』と『マハーエフシュチナ』との區別は、丁度吾々が『社會民主主義』と『マルクシーズム』との區別をつけてゐるやうに、又外面的な形式と內面的な觀念との區別をつけてゐるやうに、明かにして置かなければならないのである。そこで吾々は『勞働陰謀黨』の問題には觸れないことにしようとも思つてゐるし、已むなくんば、ほんの一寸行きがゝり位の程度で觸れようかとも思つてゐるのである。吾々にとつて興味のあるのは文獻

の上に現はれたマハーエフシュチナにあることを、明言して置きたいのである。

この文獻に現れた現象に就いては、吾々は上に於いて既に述べたのである。ア・ヲーリスキー卽ちマハーエフとエウゲーニー・ロジーンスキーの二人、師である人と弟子に當る人、創始者と繼承者——此二人が卽ちマハーエフシュチナの全體である。二册の書物と二册のパンフレット及びやつと創刊した許りの小雜誌——これが卽ちマハーエフシュチナの全部の文獻であつて、少いと言へば少いものだが、吾々はこれを批判する場合に謂はゆる量的の見地からでなく質的の見地から見、厚さによらずに內容によらうといふ譯である。諺の通り、量より質といふことも、多分本當であることだらうから。マハーエフシュチナの文獻は極端に少さいものであるけれども、然しその少い文獻の中に一定の形を取つた社會的政治的思潮に特有な三つの特徵を存することを、發見することが出來るのである。そこには隅の土臺となるべき石や、すべての理論の福音や、その理論の根柢となるべきものがあるのである。同時にそこにはあらゆる敵方の世界觀の足元を崩す爲めの雷抗があるのである。卽ちア・ヲーリキスーの書物がそれ等の役目に當つてゐる。その次にそこには、一般

の廣い諸團體に對する煽動的のパンフレット及びいろいろの極く薄い小册子がある。それから叱咤鞭韃するやうなパンフレットがある。それらの役目を果さんとするものは、エ・ロジーンスキーの書物である。一番最後にこの三つの根柢的の特質に添ふべき景品としては、尙不定期の、社會的諷刺的の、文學的批評的の、マハーエフシュチナの雜誌があるのである。我愛する讀者よ、この外に何の添ふべきものがあり得よう？　何はともあれ、これ丈の文獻があれば、マハーエフシュチナの根柢的思想を解剖する爲にも、そもそもマハーエフシュチナは何ぞやといふ問題に對して解答を與へる爲めにも、蓋し全く十分であると言つてよいであらう。

第四章　マハーエフシュチナの要點

マハーエフシュチナの中心點がインティェリゲンツィヤと名づけられた、社會的集團の組織及び本質に就いての問題を解釋する點にあることは、既に前に述べたのである。從つてマハーエフシュチナの文獻の上の代表者である師と弟子の二人が、めいめいの著述の標題に於てこの問題を取扱つてゐることを暗示してゐることが決して無意味ではなかつたことも前述の通りである。尙、マルクシスト達自身がインティェリゲンツィヤに對して根本的なマルクシーズム的な社會的經濟的な批判を明確に適用しやうとして、その意見に分裂を來たしたが、最近に於ては、彼等が相敵對することを止めようと試みてゐることも、前述の通りである。そしてその結果マルクシスト達はインティェリゲンツィヤに對する第三種のいろいろな解釋を試みるやうになつたことも前に述べた通りである。即ち彼等の中の或人々はいふ。――インティェリゲンツィヤはプロレタリアートの階級に屬すべきである。何故なら筋肉上の勞働者

も、智力上の勞働者も同樣に自己の勞働力を資本家に賣ることによつて生活してゐるからである。第二番目の人々は、インティェリゲンツィヤは特別な社會的經濟的階級に屬するが、社會的倫理的の見地から特色づけられてゐると主張するのである。第三番目の人々は、インティェリゲンツィヤはブルジュアージャ的の社會に、又謂はゆるブルジュアージャの階級に於ける無用の生物であるといふのである。然しながらこれ等の解釋さへも、インティェリゲンツィヤに對する階級的觀察を論理の終極點まで徹底させたものとは、言はれないのである。初めてこれを徹底せしめたのはマハーエフシュチナである。

インティェリゲンツィヤはプロレタリアートの階級に屬する。何故といへばやはり自己の勞働力を賣ることを特色としてゐるからである。――かうマルクシーストの或者はいふ。マハーエフシュチナには、このやうな解釋に止まることが出來ないのである。このやうな解釋は最も重大な中心的な問題を全く度外視してゐるからである、果して眞にインティェリゲンツィヤは、知識の中に包含されたる自己の勞働力を賣つてゐるであらうかと、マハーエフシュチナは疑ふのである。そもそも知識とは何ぞや、――それは勞働力であるか、或は生產の資力であるか？　この疑問に對してマハーエフシュチナは、知識は眞に生產の特殊獨自の資力である。そしてインティェリゲンツィヤは特殊の『階級』であると答へるのである。このことは、マルクシスト達の中の或人々も主張したのであつたが、その人々はその考へを徹底させなかつたのであつた。マハーエフシュチナは、そのやうなマルクシスト達の前に、インティェリゲンツィヤの階級が生產及び分配の經過の間に於て、そもそも如何なる役目を演ずるかといふ、第二の決定的の問題を呈出したのであつた。この二つの問題に對する解答は、決定的にインティェリゲンツィヤに就いての疑問を解決するのである。知識は生產の資力であり、從つて生產及び分配の經過の間に於いてインティェリゲンツィヤは餘剩價値の獨占者の役目を演じてゐるのである。卽ちインティェリゲンツィヤは『階級』である丈ではない。それ以上である。卽ちこのことはインティェリゲンツィヤが搾取階級であることを意味する。かうした結論こそすべてのマハーエフシュチナの中心の軸となつてゐるのである。

かやうな譯でマハーエフシュチナは遂に行く所まで行き着いて、今迄正統派のマルクシーズムが言はずに殘して置いた所を、到頭勇敢にも言ひ切つて了つたのである。吾々はマハ

ーエフシュチナの觀察の中に初めて、インティェリゲンツィヤに就いての純粹な社會的經濟的解釋を見ることが出來たのである。今迄のあらゆる社會的倫理的な概念から完全に解放された解釋を見ることが出來たのである。正統派のマルクシーズムが望んでゐながら得ることが出來なかつたものが、實際にマハーエフシュチナの中に於て得られたのである。然しその場合マハーエフシュチナは文字通りに生みの親に刃を振り上げて、マルクシーズムや社會民主々義に對して、少しも假借する所のない戰ひを宣したのであつた。然しツァイスの神の頭からアテナが生れて來たやうに、マハーエフシュチナが當のマルクシーズムの中から全身武裝をして生れて來たことを、否定することは出來ないのである。マハーエフシュチナの中には『勞働問題』（ラボーチエエ・ヴイエーロ）（新聞の名）派や『勞働思想』（ラボーチヤヤ・ムイスリ）（新聞の名）派などに對する舊くからの同感が餘りに明かに漲り出てゐるし、イスクラ派の人々に向つて、又經濟主義に對するイスクラ派の戰ひに向つて、マハーエフシュチナの憤激が餘りに明瞭に沸騰してゐるのであるが、それを見れば上述のことがよく分るのである。（ア・ヲールスキー著『知力的勞働者』頁五九—六〇を見よ。）マハーエフシュチナがマルクシーズムの正統派を脫して、結局革命的サンジカリーズム及び無政府主義に近づいて行つたことは眞實である。それのみでなく、マハーエフシュチナは尙書のナロードニチェストヲから何かしらを取り入てゐることもよく分るが、然しながら依然としてマハーエフシュチナの父に當るものは、疑ひなくマルクシーズムである。ロシヤ式に鑄造されたマルクシーズムであり、謂はゆる經濟主義の立場のマルクシーズムである。經濟主義者のモットーは『インティェリゲンツィヤを追ひ拂へ！』といふこと、『勞働者は自己の解放の事柄を自己の手中に把握しなければならぬ』といふことであつたが、この二つはマハーエフシュチナの中へも繼承されて行つたのである。只この場合マハーエフシュチナは直ちに自己を養つて呉れた親木の根本を掘り返して了つたのである。何の苦もなくマハーエフシュチナは經濟主義者の弱點を上に述べたモットーの中に見付出したのである。社會民主主義の經濟主義的立場に於いて、『インティェリゲンツィヤを追ひ拂へ！』と叫んだのは、そもそも何人であつたか？——實にインティェリゲンツィヤの人々自身ではなかつたか！　そしてこのことにその後氣づいたのは、前に述べた通りスタロウェール（即ちボトレソフの事）の如き正統派のマルクシーストだつたのである。そしてマハーエフシュチナはこ

のやうなことを、勞働者の集團を欺かうとするインティェリゲンツィヤの惡だくみから出たものであると解釋したのであつた。マハーエフシュチナの人々は經濟主義者の立場を『經濟主義的の假面舞踏會の一つの相』と名づけたのである。(ア・ヲーリスキーの『智力的勞働者』の第一部貞一九參照)。勞働者の集團の信用を得んが爲めに、社會民主々義のインティェリゲンツィヤが自ら嫌つてゐるところの經濟主義者の衣服を着込んだのである。――かうマハーエフシュチナはいふのである。(同書二十頁參照)斯樣にして、當のマハーエフシュチナの人々のいふ處に依れば、經濟主義とマハーエフシュチナとの間の相違は、何よりも先づ主觀的性質を帶びてゐるのである。卽ちマハーエフシュチナの考へによれば、經濟主義の人々は、マハーエフシュチナの特殊獨自の本質をなしてゐるところのものを、恰も自己の衣服のやうな顏をして着込んでゐるのである。マハーエフシュチナにとつては、勞働問題は、あらゆる民主主義的な、又社會主義的な理論に反對して、各々の集團自身が行ふところの經濟的鬪爭の中に包含されてゐるのである。(同書三十四頁參照)經濟主義者のいふところの『インティェリゲンツィヤを追ひ拂へ!』といふモットーに就いてマハーエフシュチナの考へに從つていふならば、

それは單に假面に過ぎないのである。社會民主々義者の最初の經濟主義的立場の宣傳者は勞働者の前に於いては、インティェリゲンツィヤの政策の激烈な反抗家といふやうな風をし初めたのであり、社會民主々義者達は、勞働者の信用を充分な程度に博し得たときにのみ、勞働者の前で自己の假面を取去ることも出來るであらうことを、よく承知してゐるのである。(ア・ヲーリスキーの『プルブュアージャ的の革命と勞働問題』六十三頁參照。)『インティェリゲンツィヤを追ひ拂へ!』といふ叫び聲は、マハーエフシュチナによつてこのやうに解釋されたのであつた。マハーエフシュチナによつて、この標語はインティェリゲンツィヤの人人の意識的の僞善として解釋されたのであつた。この解釋は非常に簡單明瞭であり、マハーエフシュチナによつて非常に喧傳されたものであつたが、然し後に述べるまでもなく、若しも當のマハーエフシュチナが無遠慮にも同樣な非難の矛先きをさし向けられたなら、如何にマハーエフシュチナが危險であるかはたやすく想像のつくことである。その場合には、マハーエフシュチナには全く辯護の言葉がないからである。然し今こゝではマハーエフシュチナと經濟主義及び一般の社會民主主義との相違に就いて、詳細に說くことは出來ないが、

マハーエフシュチナがマルクシーズムの中から生れて來たといふ事實は、どうしても否定することが出來ない。若しも吾々が尙一層深くマハーエフシュチナの歷史的社會的の成立を知るならば、又吾々が今迄に說いて來たやうな、マハーエフシュチナの根柢的思想から導き出されたいろいろの重大な結論を尙一層深く知るならば、マハーエフシュチナがマルクシーズムの中から生れて來たといふ事實は、一層明確になつて來るのである。

つまりマハーエフシュチナの歷史的社會的觀察は、マハーエフシュチナがマルクシーズムから賃借りしたものだつたのである。然しこの點に於いて、師となつたマルクシーズムと弟子となつたマハーエフシュチナとの間には、意見の不一致があつたことを注目しなければならないのである。ア・ヲーリスキー卽ちマハーエフはすべての學問の社會的な成立とそれの一般化とを斷然として否定してゐるのである。彼はいふ。——學問は特權階級、白手階級、敎育ある社會などの人々の財產であつて、そのやうな階級が存在することは寄生蟲の存在することである。それは、終身懲役に處せられたやうな勞働者の集團の、長い永い破滅の上に建てられた存在である。從つて社會的學問は、民衆の意志や思想の上に置かれた壓迫の組織となる譯である云々。(『智力的勞働者』第三部、四〇—四一頁參照)然しこう言ひながらも、ア・ヲーリスキーは、何の支障を感ずることもなく、マルクシーズムから階級鬪爭の原理を借用してゐるのである。又それのみでなく、歷史的唯物論の名稱は、階級鬪爭の原理を徹底的に押し進めたマハーエフシュチナに屬するものであるといふやうな、明々白々な空々しい云ひがかりさへしてゐるのである。エウゲーニー・ロジーンスキーは、このやうな社會的學問に對する矛盾のある否定說には同意することが出來なかつたが、そこに既にマハーエフシュチナの師と弟子との間の意見の相違が始まつた譯である。エ・ロジーンスキーはマルクシーズムから出發して、今度は階級鬪爭の理論を徹底的に考へようとしたのであつた。その結果が卽ち彼れの『批判的社會學的檢討』である『そもそもインティェリゲンツィヤとは何ぞや』といふ著述である。この二人が如何にして階級鬪爭の原理を徹底せしめたか——そのことは何れ後に說くことにする。こゝでは只マハーエフシュチナの根柢には、マルクシーズムの中から持つて來たところの原理が存在してゐるといふこと丈を言つて置く。そしてこの原理の上にマハーエフシュチナのすべての理論が建てら

れてゐるのであり、前に述たマハーエフシュチナの二つの中心點も、この上に建てられてゐるのである。引用文を惜まずに、自分はマハーエフシュチナを說くことにする。

マハーエフシュチナの創立者はかう書いてゐる。――『あらゆる國、あらゆる國家には、少しも工場や商品を所有しないのに拘らず、恰もそれの眞の所有者であるかのやうに生活してゐるところの人々から成立つた非常に大きな階級が存在してゐる。それは教育ある人人の階級である。卽ちインティェリゲンツィヤの階級である。彼等は土地も持たず、工場をも、仕事場をも持つてゐないのである。然し彼等は普通の又は大きな資本家に劣らざる不相當な收入を得てゐるのである。彼等は自己所有の事業は何ものをもやつてゐないのであつて、中資本家或ひは大資本家と同じやうに白手の人間であり、一生涯筋肉的の仕事といふものを少しも知らないのである。そしてよし生產にたづさはることがあらうとも、それは何時でも支配人、監督、技師とかの位置に於いてゞあつて、勞働者卽ち筋肉的勞働をする奴隸に對する關係に於いては、彼等は何時でも事業家、資本家と同じやうに支配者であり、御主人樣である。』（ア・ヲーリスキーの『ブルジュアージャ的革命及び勞働問題』八六

頁參照。）そしてこのインティェリゲンツィヤの階級は特殊の社會的階級であつて、智力的生產の手段であるところの知智の獨占的及び繼承的所有を特徵としてゐるのである。それは丁度中資本家或ひは大資本家の特色が物質的生產の手段を獨占的に、又は繼承的に所有することにあるのに似てゐる。ア・ヲーリスキーは『智力的勞働者』の第一部の一一八頁でがう言つてゐる。――時代から時代へとインティェリゲンツィヤが一つの階級として、自己の殊特の知識とその特殊な能力とを實現し得るといふことが、階級としてのインティェリゲンツィヤに特殊の階級的な繼承的な所有を豫想することになる。そしてこの特殊な繼承的な所有とは知識の所有のことであり、この所有あるが故に、インティェリゲンツィヤは支配階級、主人階級となることが出來るのである。それが又インティェリゲンツィヤをあらゆる搾取的なブルジュアージャ階級と同列に置かしめるのである。何故なら廣い意味に於いての支配を行ふ爲めに必要欠くべからざる知識學問は、ブルジュアージャ的諸階級の獨占的所有であつて、それ等の階級は資本によつて集めた、すべての『國家的の收入』、國家的の餘剩價値を全く自由にすることが出來るからである。そしてこの餘剩價値が又特權少數階級にのみ

知識學問の所有の可能性を附與するのである。そしてこの知識の程度が高ければ高い丈け、それ丈け現代の社會に於いてはその價値は高いのである。丁度高尚といはれてゐる性質の仕事のやうに。そして又こうして仕事が高い價値を持つことが出來るので、インティェリゲンツィヤは初めて比較的大きな資本をも、自己の子孫の教育の上に消費することが出來、從つて今度はその子孫が再び高等なる性質の勞働力の所有者となり、かうして繰返し繰返して際限なく續くのである。然しインティェリゲンツィヤはそもそも何處から通常非常に多額な費用を教育教化の上に支拂ふことが出來るのであるか？　それは只國民的の總收入である一般的の金額からである。かの國家的な餘剩價値からである。そしてこの餘剩價値は一年の間に、强大なブルジュアージヤがプロレタリアートから奪ひ取つたものである。（マルクスの價値論がマハーエフシュチナの理論の中にそのまゝ這入つてゐることに、注意して欲しい。）資本家はプロレタリアートの手からぢかに餘剩價値を奪ひ取るのであるが、インティェリゲンツィヤは資本家の手を經てこれを取るのである。（經濟主義者は富の分配を第一種と第二種とに分けて、このことを論じてゐる。）インティェリゲンツィヤが資本家の手を經て餘

剩價値を取ることが勞働階級にとつて格別新しい重荷となる譯は少しもない。さうだからといつて、インティェリゲンツィヤが階級として搾取的性質を持つてゐることは少しでも薄らがないのである。やはりインティェリゲンツィヤの手中にも國家的な餘剩價値が落ち込むからである云々。ア・ヨーリスキーは尙かう言つてゐる。――『資本家が收得したところの利益は、「ほんの少數の資本家及び大地主」の存在のみでなく、この寄生蟲的な生物の存在をも保護するのである。その利益は、總ての教育ある社會の人々に對して、ブルジュアージヤ的の生活樣式を得る可能性を與へるのである。この教育ある社會、この智力的勞働者の一團は、「純國家的の利益」の消費者である。』そして若し資本家に依つて行はれる富の第一番目の所得が、勞働者に對して假面をかけないで行はれた掠奪であるとするなら、インティェリゲンツィヤ即ち智力的勞働者によつて行はれた、富の第二番目の所得は同じく掠奪ではあるが、この方のは假面をかけて行はれた掠奪である云々。マハーエフシュチナによれば、この方の掠奪は、高い價値を有すると考へられた、高い性質の智力的な仕事といふ口實の下に行はれるのである。

ヲーリスキーは尙續けていふ。――『特權的雇人であるところのインティェリゲンツィヤが、各時代に於いて、自己の教育の爲めに消費した國家的の餘剩價値の金額は、非常に莫大なものと言はなければならない。かうして彼等は高い性質の勞働力となり謂ゆる高尙なる力、高き交換價値を有する力となるのである。このことの意味するところは何であるか。即ち彼等は莫大なる餘剩價値を私消したことによつて、掠奪の組織の論理に從つて、教育費を支拂といふ口實の下に、益々多くの他人の勞働の生産物を、即ちプロレターリーの勞働の生産を、只奪ひ取る權利を得るのである。』（同書一部、頁一二六參照。）（同樣な觀察はロジーンスキーの『そもそもインティェリゲンツィヤとは何ぞや』といふ本の中にも述られてある。）この點から、高い性質の勞働に對する高い報酬は、マハーエフシュチナにとつては非常な不正でなければならないのであつて、これがマハーエフシュチナを收入の均一論へと導いた根柢的な、屢々引用される思想である。（或ひは、多分收入の均一論から導き出された思想でもあらう。）謂はゆる高い性質の勞働に對する高い報酬といふものがあればこそ、インティェリゲンツィヤは世々代々に己の子孫に教育を授け、その子孫を生産の偉大

なる手段である知識の所有主に作り上げることが出來るのである。『すべての物質的富を所有する上流社會は、かやうにして又すべての人間的知識を所有するのであるが、彼等上流社會の人々は一般勞働者の民衆に對しては、その知識を達し得られないところの秘密にして了ふのである。掠奪者の法律に從つて、勞働者階級には只國民教育しか授けられてゐない。即ち支配的な上流階級の知識の世界に比較して見るならば、國民教育しか授けられてゐないといふことは、單に無知しか授けられてゐないといふことになるのである。掠奪の法則に從つて、人類の大多數は生れる時から奴隷として運命づけられ、少時から懲役的の肉體的勞働に運命づけられてゐる。そして又時代より時代へと最も低級に教育された種類の人間として成長し、支配者の命令を機械的に行ふやうに、單に肉體的勞働のみしか出來ないやうに、運命づけられてゐるのである。一方すべての生産手段を掠奪した支配者達は、自己の子供等に高等の教育を授けて、よしその子供等が非常に頭腦の惡いものであらうとも、彼等を高い種族に、支配する方の階段に仕上げるのである。』―千九百二年のマハーエフシュチナの勞働者に對する最初のメーディの召集宣言書には、かう書かれてゐるのであ

る。こゝに書かゝれてあることは、インティェリゲンツィヤによつて行はれた知識の獨占的繼承的所有の問題の方へ、再び吾々の注意を持つて行くのである。何故ならば『支配といふことは、立派に教育された社會、支配的なブルジュアージャ的の階段の獨占物、單に生産的或ひは商品的の資本の所有者のみでなく、資本的國家の特權的雇人であるインティェリゲンツィヤ即ち政治家、記者、學者及びあらゆる高尚なる職業に從事するもの、獨占物だからである。この獨占は現代の社會組織の基礎と、個人的世襲財産の原則の上に横はつてゐる基礎とに密接に結びついてゐるからである。』（ヲーリスキーの『智力的勞働者』第一部、頁二八參照）この點から、マハーエフシュチナに取ては世襲財産といふものが、第二番目の最も根本的な不正となつて來るのは明かなことである。この點に就いては何れ後に說くことにする。斯樣にして吾々は、マハーエフシュチナの二つの根本的觀念に到達したのである。即ち收入の均一といふことゝ、世襲財産の廢止といふことゝである。この二つがマハーエフシュチナの社會論及び將來のマハーエフシュチナの組織の二つの土臺石となるものである。

今迄に吾々は、マハーエフシュチナによるとインティェリゲンチィヤがブルジュアージャと同列に立つことになり、何うしてもプロレタリアートと相反するやうになつたことを、見たのである。ア・ヲーリスキーはインティェリゲンツィヤを特殊の『階級』と名づけて、それをすべてのブルジュアージャ的の階級と同列に置いたのである。ブルジュアージャとインティェリゲンツィヤとの間の密接に結びつけられた絲は、『富の第二種の所得』といふことの中に在るのであるが、そのことに就いては既に前に述べた通りである。勿論兩者の間には違つた所もある。それは生産の手段の性質が違つてゐることにある。しかし資本家によつての富の第一種の所得も、インティェリゲンツィヤによつての富の第二の所得も、搾取的性質に於いては同一と言はなければならない。そしてインティェリゲンツィヤは高い性質の勞働に對する報酬といふ口實の下に餘剩價値を自己のものとして、それを養育費及び教育費として自己の子孫に與へるのである。かやうにして人類の偉大なる富ともいふべき知識學問は、特權階級の少數者の世襲的獨占物となつてゐるのである。そしてこの世襲的な特權階級の少數者に屬するもののみが高い性質の生産力を得、他の何百萬の人々は奴隷的な筋肉勞働

の世襲的獨占しか所有しないのである。』（『智力的勞働者』第一部、一二六頁參照。）これによつて見るに、インティェリゲンツィヤが搾取階級であり、純然たる反プロレタリアート的の階級であることが明かになつて來る。然しこれは一方面から見たに過ぎない。他面より見れば、今迄述べて來たことから丈けでは、尙インティェリゲンツィヤの利益がブルジュアージャの利益と一致することには決してならないのであると、マハーエフシュチナはいふのである。巨大なるブルジュアージャは餘剰價値の大部分を自己のものとして了ひ、その中からお話しにもならない程の一小部分を、インティェリゲンツィヤに分與するのである。從つて資本家達の社會によつてインティェリゲンツィヤの利益は壟斷されてゐるやうに見え、一見プロレタリアートの利益の壟斷されてゐるのと同樣に思はれるのである。從つてこの二つの階級、卽ちインティェリゲンツィヤとプロレタリアートとは、同樣にブルジュアージャによつて搾取される階級となつて來るので、もろ共に同一の目的、卽ちブルジュアージャの手から國家的餘剰價値を奪ひ取ると、生產の方法及び資力とを共有することに努力するのである。しかしマハーエフシュチナの意見によれば、インティェリゲンツィヤの階級とプロ

レタリアートの階級との利益のこのやうな共通點は、單にさう見える丈けのものに過ぎない。何故ならインティェリゲンツィヤはブルジュアージャによつて搾取される階級であるばかりでなく、プロレタリアートに對する關係に於いては、搾り取る方の階級だからである。從つて實際に於いては、インティェリゲンツィヤとプロレタリアートとの利益は決して同一でない許りでなく、正反對である。物質的生產の資力と手段との共有といふことは、マハーエフシュチナの意見によれば、すべての現代の社會主義的思想の特色をなすものであるが、それはインティェリゲンツィヤの根柢的の要求である。しかし、一方智力的生產の手段の共有、卽ち知識の共有といふことは、マハーエフシュチナの特色をなすものであるが、マハーエフシュチナの云ふ所によれば、この要求こそはプロレタリアートの根柢的な要求であつて、インティェリゲンツィヤの利益に相反するものである。こゝから二つの興味ある結論が出て來る譯である。卽ち第一には、社會主義は階級的思想であり、インティェリゲンツィヤの觀念である。第二には、マハーエフシュチナは階級的理想であつて、プロレタリアートの觀念である。

社會主義はインティェリゲンツィヤの觀念である。これはマハーエフシュチナの根柢的主張の一つである。『あらゆる他の、神聖なる所有權を廢止することなしに、生產の方法を社會の手に移さうといふのが、智力的勞働者卽ち敎育ある社會の抱いた社會主義的理想である。』(『智力的勞働者』第二部、七四頁參照。) このやうな理想はインティェリゲンツィヤによつて作り出されたものであつて、當のインティェリゲンツィヤ自身の利益になる許りである。ア・ヲーリスキーは云ふ。――『前世紀の社會主義は資本主義的社會の中流階級によつて作られたものであるが、彼等は自己の解放を望むと同時に、勞働者の奴隷制度を廢止せずして、ブルジュアージャ階級の支配的位置へ自己を置きたいものだと願つてゐたのである。彼等はブルジュアージャの敎育ある部分であり、その多くは、卽ち職業的なインティェリゲンツィヤである。』(『ブルジュアージャ的の革命と勞働問題』三六頁參照。) ア・ヲーリスキーは他の場所でかうも言つてゐる。――『前世紀の社會主義は智力的勞働者の儲けた所得を、卽ち白い手を有するものゝあらゆる收入を、少しも考察に入れなかつたのである。』(『智力的勞働者』第三部、三頁參照。) 『インティェリゲンツィヤは生產の資力及び手段

の共有を實現しようとして努力するが、それは當の己自身が腕づくの力づくの雇人となることを嫌つてゐるからで、彼等自身は寧ろ、少數の金權階級が享有してゐるやうな富の恩惠に一時も早く與り度いと渴望してゐるのである。』(ア・ヲーリスキーの『十九世紀の社會主義の破產』二八頁參照。) このやうな譯で要するに社會主義とは、第二番目の方の富の所得から第一番目の方の富の所得へ移り代らんと努めてゐるインティェリゲンツィヤの渴望の現れたものに外ならないのである。インティェリゲンツィヤはかくして資本家を絕滅せんとし、利益を獨り沒收してゐる資本家を撲滅して、自ら國家の總歲入の唯一の消費者にならんと願つてゐるのである。何故なら資本家の階級を撲滅して了ふことはすべてのブルジュアージャ的の社會を撲滅して了ふことを少しも意味しないからであると。尙ヲーリスキーは續けていふのである。――『部分的な企業家を廢止した丈けでは、現代の奴隷的階級は絕滅されず、現代の奴隷は奴隷たることを止めるやうにはならないのである。やはり彼等は一生涯筋肉勞働をしなければならないのである。從つて彼等によつて作られた國家的な利得は、決してなくなることはないであらう。そしてその利得は民主的な國家乃至社會の手中に落

ちて行つて、しかもあらゆる掠奪者、あらゆるブルジュアージャ的の社會の寄生蟲的存在の爲めに基金となつて行くのであらう。このやうな譯で資本家を絶滅した後にも、掠奪者、ブルジュアージャ的社會といふものは、以前のやうに支配者階級、有識支配階級、白手階級として存續するであらうし、又國家的利益の占有者として存續するであらう。そしてその時にはその國家的利益は、今日に於いてのやうに、智力的勞働に對する名譽の謝禮金として分配せられるであらう。』マハーエフシュチナは、マルクシーズムの經濟的理論から出發して又かういふのである。――現代に於いては、社會の總歲入である國家的の全體の利益の三分の二は教育ある社會によつて消費され、六分の一は勞働者により、殘りの六分の一は資本家によつて消費されるのである。そして最後の六分の一のものがインティェリゲンツィヤの見地からは、資本家によつて私され、搾取された餘剩價値となるのである。この部分の爲めにのみ社會主義は資本家に對して鬪爭をやつてゐるのであるが、然しインティェリゲンツィヤは自己の消費する總歲入の三分の二のものを、勞働者の手に渡さうとは決してしないのである。（『智力的勞働者』第二部、第一、第二章參照。）プロレタリアートに對する關係に於いて『社會主義は、この立憲的な民主的な天國の爲めの鬪爭に、勞働者の集團を誘ふところの單純なる手段となつてインティェリゲンツィヤに奉仕してゐるのであるが、その立憲的な民主的な天國に於いて依然として全勢力を持つ支配者となるものは、實にインティェリゲンツィヤ自身である。』（『社會主義の破產』二八頁參照。）その上に尙インティェリゲンツィヤは黃金の山を約束するやうにして、プロレタリアートを社會主義の道の方へと誘惑して行くのであるが、その實は、勞働者の集團の階級的理想であるところの、物質的生產のみでなく、一般の有識階級の資力及び手段卽ち知識の沒收といふことを、單にインティェリゲンツィヤの階級的理想に、卽ち一部分のみの共有といふことに取り代へて了ふのである。マハーエフシュチナは又かういふ。――現代のマルクシーズムは、他のすべての社會主義がさうである樣に、勞働階級の解放の問題を、卽ち現在の支配階級の財產を勞働階級自身のものとして了ふといふことを、單に生產に共同に參與するといふ丈けの目論見に取り代へて了つたのである。社會主義は平等所有といふユートピヤを宣傳してゐるが、それを實現するのに、勞働者が所有階級を突擊して、あらゆる文化、あらゆる時代

の遺産に平等の所有權を獲得するといふ直線的の道程によらずに、ある特別な協働的原則に從つて生産の方法を變更するといふやうな、曲りくねつた特殊の道程によらうとするのである云々。（『智力的勞働者』第三部、第一分冊、一七及び三三頁參照。）從つて社會主義は、自己自身を縛つてゐる奴隷制度と闘爭しようとしてゐる勞働者の集團の要求とは、全くかけ離れたものゝ言はなければならないのである。（『ブルジュアージャ的革命と勞働問題。』三六頁）何故なら社會主義は、インティェリゲンツィヤの觀念である以上、餘剰價値の第一種の掠奪者である資本家のみに對する闘爭を行はんとするからである。そしてそのインティェリゲンツィヤは己自身のことに關しては、自分は現代の文化文明の擁護者であるといつてゐるのである。このやうな譯であるから、インティェリゲンツィヤはマハーエフシュチナの說によれば、單に一方面のみの社會的經濟的不正を摘發してゐるのである。單にインティェリゲンツィヤにとつてのみの搾取となる方面のみを摘發してゐるのである。然し他のすべての寄生蟲的な存在のことや、他のすべての新しく發達しつゝある掠奪の形式に就いては、社會主義は厚い覆ひをかけて匿さうとしてゐるのである。かうしてブルジュアージ

ヤ的の階級の大部分は、インティェリゲンツィヤとして、智力的勞働者の一團體として、自己の寄生蟲的な存在の爲めの基金を受け取るのである。彼等は自分自身の生産の資本といふものを少しも持たないが、然し絶えず收入を增加して行くのである。然も彼等の收入となるものは、彼等があらゆる知識、文化、文明の世襲的所有者なるが故に支拂はれるのである。現代の有識社會のこの寄生蟲的存在は、永い間の掠奪の結果は、或ひはあらゆる時代の遺産を獨占した少數者のこの特別な、最新の形式は、或ひは人類の大多數を低級な無學文盲の種族の奴隷の位置に沈ませたところのこの掠奪は――即ちこの掠奪は、見あらはされないようにと社會主義の學說の楯によつて一生懸命に守られてゐるのである。即ち社會主義は、唯一の搾取階級は工場や土地の所有主であつて、インティェリゲンツィヤは自己の勞働によつて生きてゐるのであるといふ。かうして社會主義の學說の楯に覆はれて、掠奪のこの新しい形式は少しも邪魔をされることもなく成長して行くのである。（『社會主義の破產』二八―二九頁參照。）

然らばそもそも何處に社會主義の過誤が存在するのであるか、社會主義がそれの觀念と

して現れるに至つたインティェリゲンツィヤにあるのか？　明かにその誤りは、社會主義が收入の均一といふことを認めないことにある。高い性質の仕事とか、單に質的な仕事とかに支拂はれる高い金額に就いて、社會主義が少しも不正を認めないことにある。有名なる『何人にも、彼の勞働に從つて』及び『何人にも、彼の必要に從つて』といふ言葉の中に言ひ表された分配の社會主義的原則に對して、マハーエフシュチナは全く否定的の態度を取り、それの代りにマハーエフシュチナは別の原則を建てゝゐるのである。即ち『勞働の性質如何に拘はらず、すべてのものに同一に』といふのである。從つてこの中にマハーエフシュチナの收入の均一論が成立して來るべき筈である。この原則を否定したといふことが——元來社會學的な學問はこの原則を否定せざるを得ないのであるのに——抑々社會主義の致命的な、根本的な誤謬と言はなければならないとマハーエフシュチナは云ふのである。相異つた仕事に對する均等の支拂説を否定したことをマハーエフシュチナはインティェリゲンツィヤの搾取的傾向であると言ひ、インティェリゲンツィヤが生產の資力及び手段を共有しようと要求してゐることを、マハーエフシュチナは、智力的生產の手段を前からの獨占的

所有主即ち當のインティェリゲンツィヤの爲めに保證しようとするのであると言つてゐる。マハーエフシュチナの云ふところによれば、社會主義はインティェリゲンツィヤの手中にある生產の手段の搾取的性質を、即ち知識の搾取的性質を認めることを好まないのである。マルクシーズムの根本的な定義（知識は勞働力である）によれば、インティェリゲンツィヤは搾取には關係しないことになる。（『智力的勞働者』第二部八四頁參照。）マハーエフシュチナは知識を生產の手段と考へるのであるから、少しも躊躇することなく、インティェリゲンツィヤは搾取階級であると言ひ、從つてインティェリゲンツィヤとプロレタリアートは敵對關係のものであつて、決して兩者は協働者ではなく、相互に相反した敵對階級であるといふのである。インティェリゲンツィヤが搾取階級であり、プロレタリアートの敵對階級であるといふことから、社會主義がインティェリゲンツィヤの觀念である以上、同樣の程度に於いて社會主義はやはりプロレタリアートの敵であるといふことになつて來るのである。マハーエフシュチナによれば、『社會主義はプロレタリアートの觀念である』とか、『インティェリゲンツィヤは民衆の利益の爲めに闘ふ』とかいふことは、すべて欺瞞の言葉に過ぎな

いのである。インティェリゲンツィヤが持つてゐる民衆愛などゝいふものは、單なる假面に過ぎない。その假面をインティェリゲンツィヤは勞働者の集團の前でかぶるのである。歴史とは物質的な利益に對する階級的闘爭である。物質的な自己の利益の爲めにインティェリゲンツィヤは闘爭してゐるのであつて、インティェリゲンツィヤは自己の利益に相反する民衆の利益の爲めには、闘爭することは出來ないのである。『人類の大多數の生れながらにして一生涯懲役的な勞役に運命づけられた奴隷達は、この有識階級にとつては必要缺くべからざるものである。この奴隷達は單に少數の金權階級の人々や、資本家にとつて許りでなく、すべての特權階級に取つても必要である。單に土地、工場、仕事場の所有者のみに許りでなく、文化文明の所有主、有識階級、智力的勞働者の集團にとつても必要である。』（『社會主義の破産』二七頁參照。）然らばそもそも何處に民衆の利益の爲めのインティェリゲンツィヤの闘爭など、いふことがあり得よう！　當のインティェリゲンツィヤの利益が勞働者階級の利益と全く相反するものであるといふことは、インティェリゲンツィヤが搾取する側であり、プロレタリアートが搾取される側であるからである。働蜂に當るプロレタリア

ートと雄蜂に當るインティェリゲンツィヤとの間には、共通の利益などゝいふものは在り得ない。只假借なき闘爭が在り得るのみである。インティェリゲンツィヤは眞實に雄蜂である。或ひはマハーエフシュチナのいふ言葉によれば、資本主義的文化によつて作られた寄生蟲である。何故ならば、『有識階級は特權階級以外の姿に於いては現れないからであり、又それの第一の社會的「任務」といふものは、國家的の利益を消費することにあるからである。』（『智力的勞働者』第二部、九八頁參照。）そしてインティェリゲンツィヤは益々多くの利益を得、この社會的歳入の增加によつて益々利益を得てゐるのである。國家的の收益が大きくなればなる程、特權有識階級の消費する金額は大きくなるのである。ブロレタリアートを搾取して利益を得るものは、單に資本家許りではない。すべての有識階級者がさうである。勞働者は少數の資本家の安逸なる生活の爲めのみの故で搾取されるのではなく、謂はゆる「非物質的の幸福の創造者」であるすべての有識階級の寄生蟲的存在の維持の爲めにも、搾取されるのである。ア・ヲーリスキーは、インティェリゲンツィヤの搾取的性質に就いて、このやうな言葉を幾度も幾度も言つてゐるが、これこそマハーエフシュチナの基調

となるものである。彼は繰返して又かういふ。――『一生涯勞役に處せられた勞働者階級の上に支配權を有してゐるものは、單に少數の大官こか、富豪こかのみでなく、すべての有識階級もさうである。勞働者の集團の奴隷制度は、過去の文明の何時の時代にもあつたやうな程度に於いて、現代にも存在してゐるのである。掠奪者として生活してゐるのは、單に土地や工場の所有主許りではなく、すべての有識階級がさうである。寄生蟲的生活を保證するものは、單に資本の所有のみではなく、知識の所有もさうである。學校の證書は資本的の證書に劣らざる收入を所有者に與へるのである。この掠奪的の收入によつて、有識家庭の家長は、自己の子供を彼自身の如き白い手のものに教育し上げるのである。かやうにして時代より時代へとこの寄生蟲の子孫は、生れない前から既に聰明な人、學識ある人、支配人、紳士となるやうに運命づけられ、一方勞働者の子孫は、その父が背負つてゐたのと同樣な無學及び一生涯の奴隷的狀態に處せられてゐるのである。』(『ブルジュアージャ的の革命及び勞働問題』一一四頁參照)このやうなのがインティェリゲンツィヤが演じてゐる社會的役目であつて、マハーエフシュチナはこの役目をプロレタリアートの前に暴露せんこし、インティェリゲンツィヤの眞相をプロレタリアートに知らしめようとして、非常な努力をしてゐるのである。ア・ヲーリスキーはいふ。――『知識の程度に從つて、プロレタリアートの眼前に益々智力的勞働者の社會的力が暴露されて來るであらうが、智力的勞働者は今迄非常な努力注意を拂つて、プロレタリアートの眼から自分の本性を匿してゐたのであつて、自己を同じくプロレタリアートと同列に置いてゐたのである。プロレターリヤは、この力を餘りに信じ過ぎてゐたことを知つたのである。この力が自分と一緒に資本を攻擊してゐたこ思つたのは、單に想像に過ぎなかつたこ知るやうになつたのである』(『智力的勞働者』第二部、五七頁參照。)インティェリゲンツィヤは資本丈けを攻擊してゐたのであつて、すべての特權といふこを攻擊してはゐなかつたのである。從つてプロレタリアートの問題は、インティェリゲンツィヤの中にプロレタリアートの新しい敵を見出したこと、及びあらゆる特權を絕滅させる爲めにその敵に戰ひを宣したことにあるのである。(同書第一部、一二二頁參照。)これがプロレタリアートの社會主義と自らを呼んでゐるところの、マハーエフシュチナの中心問題である。マハーエフシュチナの中心問題は、プロ

レターリヤの敵がインティェリゲンツィヤの利益であり、インティェリゲンツィヤがプロレタリアートを搾取してゐることを、プロレタリアートに説明することにある。『プロレタリアートを搾取するといふことを抜きにしては、階級としてのインティェリゲンツィヤを考へることが出來ないのである。』(同書、第一部、一一九頁參照。)マハーエフシュチナの中心目的は、社會主義がインティェリゲンツィヤの階級的理想であること、從つて社會主義がプロレタリアートの觀念となり得ない許りでなく、プロレタリアートの利益の敵であることを、説明することにあるのである。

然し若しも社會主義がインティェリゲンツィヤの觀念であり、階級的理想であるとするならば、その場合には益々マハーエフシュチナがプロレタリアートの階級的理想であり觀念であることが、明瞭になつて來るのである。從つてマハーエフシュチナが自らのことをプロレタリアートの社會主義と言つてゐるのは、理由のないことではない。かやうな譯であるから、マハーエフシュチナの中には眞のプロレタリアート的の觀念が見出だされるのである。そしてそれの根本的な特徴は今迄述べたことで明瞭になつたこと、思ふ。社會主義

はインティェリゲンツィヤの觀念として、生産の資力及び手段の共有化といふことを要求してゐるが、それ以上を要求し、それ以上の所まで行くといふことは、マハーエフシュチナのいふ所によれば、社會主義の利益にはならないのである。マハーエフシュチナはプロレタリアートの觀念として、實にそれ以上に行つたのである。プロレタリアートの利益となるのは、單に物質的生産の手段の共有化といふことに止まらず、個人的な、家庭的世襲的な所有を廢止して智力的生産の手段を共有にすることにも、卽ち知識の共有化にもあるのである。これはプロレタリアートに取つては重大な問題であると言つていゝのである。『プロレタリアートの要求して已まないところのものは、家庭的な、世襲的な財産やあらゆる一部的な基金や教育の資金などを廢止し、沒收して、その沒收したものによつて、萬人共有の教育機關、卽ち知識の共有化の資金となすことにある。』(同書、第二部、七四頁參照。)何故なら『知識が萬人の共有物にならない限り、萬人が同一の程度に教育されてゐない限り、又は單に筋肉勞働しか知らない被掠奪者の集團が存在する限り、何うしても主人と召使、主人と奴隷とが存在することになるからである。』(『ブルジュアージャ的の革命と勞働

問題』三四頁參照。)『知識を共有にするといふことは、階級的の區別を結局破壞して行くことを意味するのである。現代の社會に於いては知識を得るといふことは、只益々階級的の區別を廣め深めるに過ぎないのである。階級的區別の存する社會に於いて知識を擴め、知識を得るといふことは、決して一般の人々の間の知識の普及といふことにはならないのである。文化は支配者階級の獨占的所有物になつてゐるのであるが、支配者階級はそれの御蔭で支配することが出來るのである。資本主義的な學問である場合には、知識を獲得し、それを擴めるといふことは、現代の支配の根柢に横はつてゐる國民の階級的分裂を極度の點まで發達せしめるに過ぎないのである。卽ち國民を一方からは有識支配者階級に、他方からは肉體勞働の奴隷の多數者に分裂させて了うのである。』(『智力的勞働者』第二部、九七頁參照。)『そして生產の手段の如何なる共有化といふことも、この奴隷の多數者が己れの身體から軛を振り落す爲めの助けには、少しもならないのである。勞働者が知識の共有化を獲得しない限り、有識階級の手からそれを奪ひ取らない限り、勞働者が依然として今のまゝの有樣で、單に腕仕事しか知らず、奴隷として敎育されたまゝでゐる限り、支配者卽

ちインティェリゲンツィヤの人々、白い手の人間達は何時の時代にならうとも、よし社會民主的な國家が實現されようとも、無政府主義的な共同村落が實現されようとも、彼等勞働者を支配するに相違ないのである。從つて上述のやうなことが存在する限り、物質的生產の手段の共有化といふインティェリゲンツィヤの社會主義的理想の爲めに鬪爭しようなど、考へる餘地は、勞働者にはあり得ない筈なのである。かやうにして勞働者は永い間の掠奪によつて生產の手段許りでなく、現代のあらゆる完成された產業を支配する力をも失つてゐるのである。といふのも彼等勞働者は、生れぬ前から無學文盲であるやうに定められて了ふ、あらゆる人間的知識、あらゆる現代の學問をば少しも知らないからである。產業を自己の手中に取つて了ふ前に、勞働者は自己及自己の子供の爲めに、白い手の支配者が獲得したやうな方法によつて、知識を獲得する權利を得なければならないのである。この權利を得るとは、勞働者の無智を絕滅せしめることは、云ひ換へればインティェリゲンツィヤによつて持ち來たされた掠奪のこのやうな結果を根絕せしめることは、只この掠奪といふ事それ自身を絕滅することによつてのみ、只支配者階級の所有財產を奪ひ取つて了ふこと

によつてのみ、可能となるのである。さうすればプロレタリアートの人々は自己の子供に對して、今迄ブルジュアージャの子供のみが享受してゐたやうな教育を授けることが出來るのである。』『勞働者が知識の共有化を獲得し、教化の上に權利を把握する方法が、マハーエフシュチナによつて次に示されてゐる。即ち『勞働者が教化に對する權利を得ることが出來るのは、勞働者が自己の勞働に對する價ひを、白い手のインティリゲンツィヤが受けてゐるところの金の高さにまで高めたときである。白い手の人々が自己の子供に對して、永い教育期限の間、その教育費、生活費を附與することが出來るのも、高い俸給を得てゐるによるから。』（『ブルジュアージャ的の革命及び勞働問題』一一一及び一一三頁參照。）

かやうにしてマハーエフシュチナは知識の共有化といふことをプログラムの最初に置いて、資本の共有化よりも先きに勞働者によつて獲得されなければならないものとしたのである。インティリゲンツィヤを沒收することを、資本家を沒收することよりも一層重大なものと考へたのである。收入均等といふこと、知識の共有化といふこと、は、マハーエフシュチナの二つの根柢的な中心點である。この二つは因果的關係に於いてゞはないとしても、ともかく有機的な關係に於いて、如何なる場合にも相互に密接に結ばれてゐるのである。先づ第一に收入均等があつて、その次に來るものは收入均等によつて初めて可能なる知識の共有化といふことである。然しこの二つは何れも、マハーエフシュチナの第三の根本的原則なしには實現せられないものである。第三の根本的原則といふのは前に述べたところの、世襲財產制度の廢止といふことである。何故ならこの制度がある限り、永遠に掠奪があるからである。この制度は少數の所有階級のみを保護し、その少數者の子孫にあらゆる富、長い時代の產物、即ち人類の遺產であるあらゆる文化文明を獨占せしむるものだからである。實にこの制度こそ人類の大多數者を一生涯の筋肉勞働に運命づけさせて、無一文の奴隷として了ふのである。（『智力的勞働者』第三部、第二分冊、三頁參照。）この制度が撤廢されたときにのみ、このマハーエフシュチナ的の制度の中に、初めて社會の各員が土地及び文明の富源の所有に於いてお互に同等な人間として生れることが出來、そして生れると同時に各人同一の少年及び青年時代を送るべき權利と物質的保證、同一の教育に對する權利と物質的保證等を得るのである。（同書、第一部、一〇頁參照。）かやうにしてマ

ハーエフシュチナの三つの根本的條件は一つに結びつけられてゐる。卽ち世襲財產の撤廢といふことが收入の均等に導き、又知識の共有化に導くことになるのである。この密接に結びつけられた三つこそは、マハーエフシュチナの社會主義の鎖の輪となつてゐる譯である。

こゝに於いて殘るところは、そもそもマハーエフシュチナが如何なる方法によつてこの目的を實現しようとするか、如何なる戰術を用ひてこのプログラムを實現しようと考へてゐるかといふ問題である。然しこの方法とか、戰術とかいふものはマハーエフシュチナそのものよりも、寧ろ勞働陰謀黨に關係し、內面的な本質よりも外面的な形式に關係してゐるのであるから、極く簡單に說明することにしよう。今迄述べたところに、マハーエフシュチナ的の制度を實現しようとして、マハーエフシュチナ自身が目論んでゐたところの方法がちよいちよい出てゐる。卽ち勞働者が自己の勞働に對する價値を、白い手の人間が受けてゐる俸給と同等の高さまで擧げるときにのみ、勞働者は知識の共有といふことを實現することが出來る。――かうマハーエフシュチナの創始者は云ふのである。或はその反對に、白い手の人間の受けてゐる高い俸給を、マハーエフシュチナの革命の日に於いては、勞働

者が受け取る程度の勞働賃銀まで下げて了ふときに、初めて勞働者は知識の共有を得ることが出來るとも、言つてゐる。（『ブルジュアージャ的の革命及び勞働問題』一一六頁參照。）或ひは勞働者が知識の共有を獲得する時は、資本家及びインティェリゲンツィヤがやつてゐる搾り取りを、彼等支配者階級の財產を奪ひ取ることによつて根絕したときであるとも言つてゐる。然し如何にしてこの支配者階級の財產を奪ひ取ることが出來るか？　如何にして勞働の賃銀を白い手の人間の俸給の程度まで高めることが出來るか？

この問題に對して、マハーエフシュチナは先づ第一にあらゆる政治的の鬪爭、あらゆる政治的な考へ方を根本から否定してゐるのである。この點に於いては、マハーエフシュチナは千八百七十年代の初めのナロードニチェストヲ（國粹派）の『反政治的傾向』に立ち歸つてゐる，『政治的自由の實現された制度は單にブルジュアージャの支配を一層强固にせしめる組織に過ぎない。それは勞働者階級にとつては、より一層嚴丈な獄屋に過ぎないのである。』――フーリスキーは斷然とかう言つてゐる。（『智力的勞働者』第一部、一八頁參照。）そして特にその著述なるパンフレット『ブルジュアージャ的革命と勞働問題』の中には、こ

の思想を發展せしめる爲めに、少からざる頁を費してゐるのである。このことは、そのパンフレットの表題からも察せられるのである。この反政治的傾向を歴史的に基礎づける爲に、エ・ロジーンスキーはそのパンフレット『代議制度の總決算』を書いたのである。マハーエフシュチナはかういふ。――政治的自由の爲めの闘爭は、インティェリゲンツィヤの階級的問題である。何故ならブルジュアージャと密接に結びついてゐるインティェリゲンツィヤのみがこの自由の結果を享受することが出來るからである。從つてあらゆる政治的革命は、廣い意味に於けるブルジュアージャ的革命であつて、勞働階級には何ものをも齎らさないのである。もし齎らすものがありとすれば、それは新しい束縛であり、新しい奴隷制度に過ぎないのである云々。同時に、あらゆる形式に於ける政治的闘爭は、よし代議制度にせよ又は革命にせよ、單に釣針に過ぎないのであつて、インティェリゲンツィヤはプロレタリアートに政治的自由によつて最も大きな利益が得られると欺いて、その針でプロレタリアートを釣らうとするのである。然し勿論このやうなことは天上の鶴のやうなもので、何時手に入るか全く當てにはならないのである。ヲーリスキーはいふ。――『民主々義的の理想家達は萬人

の自由を獲得する爲めにと言つて、社會民主主義や、無政府主義の主張の下に、全智全能的な、何んな要求でも實現せしめるとでもいふやうな種々な計畫を作つてゐる。然しながら彼等がよし民主的な國家や、或ひは理想的な、自立的な、共同村落を實現しようとも、結局すべては昔のまゝと同一であらう。民主的な國家が實現された場合であつても、理想的な、自立的な、共同村落が現實された場合であつても、貧乏人として生れて筋肉勞働に運命づけられた人間、子供の時から習ひ覺えた奴隷的な筋肉勞働の外に何ものをも知らない人間にとつては、未だ如何なる自由も到來しないのである。然るに一方には、他の幸福な人間がゐて、彼等は文明の所有者として生れ、教育あるもの卽ち支配者となるやうに教育されるものである。そして民主的な理想家達のいふやうな理想的な社會に於いては、生産の手段は社會の手の中に收められるのであらうが（このことは社會主義者が政治的闘爭によつて最とも先きに得ようとする目的である。）依然として何世紀の昔から傳つた掠奪は存續するのである。何故なら産業の支配權も、あらゆる文化も、及びその結果も、相變らず白手階級の手の中に殘つてゐて、勞働者は昔のやうにこの有識支配者の奴隷として、被命令者

として働けることを幸福としなければならないからである。民主的な自由は、よしそれが社會民主的な國家の形をとつて現れようとも、或ひは無政府主義的な共產國の形を取つて現れようとも、その自由を受けるものは、依然として有識階級、即ち文化と知識との所有者のみである。勞働者にとつての自由は全く違つた他の道によらなければ得られないのである。』（『社會主義の破產』三〇頁參照。）その道が如何なるものであるかは、自ら明瞭である。ブルジュアージャ的インティェリゲンツィヤ的の政治的闘爭の齎らすといふ幸福が、プロレタリアートに取つては、天上の鶴で少しも當てにはならないとすれば、プロレタリアートの手中にあるものがよし鶴ではなく、つまらないやまがらであるにもせよ、それはマハーエフシュチナによつて主張された、眞のプロレタリアート的な、純粹の經濟的の闘爭でなければならないのである。（從つて、マハーエフシュチナの父が經濟主義的な立場のロシヤのマルクシーズムであつたことは、理由のあることである。）政治的の自由は勞働階級を益々ブルジュアージャの軛の下に壓迫して行くのである。――かういふマハーエフシュチナは六十年代の反政治的なナロードニチェストヲの思想を強く主張してゐる譯である。勞働

階級の武器は只經濟的闘爭のみでなければならない。全世界的の經濟的のストライキこそ、あらゆる政治的の權力をプロレタリアートの手中に把握する爲めの道である。（これを見れば又この反政治主義が結局の所『政治的な考へ』を持たない譯ではないことが分る。）この全世界的のストライキこそ、マハーエフシュチナが求めてやまない理想である。これこそ『勞働陰謀黨』の道である。マハーエフシュチナは力說してかういふ。――『今日に於いては、勞働階級に闘爭の新しい時代が到來してゐるのである。全世界的の勞働ストライキの手段によつて、國家の權力である法律を支配せんとする全世界的勞働陰謀黨の時代が、到來してゐるのである。筋肉勞働者の要求（純經濟的の要求）のみの爲めに行はれるこの闘爭の新しい時代に於いては、勞働者は單に資本家のみの全滅でなく、あらゆる有識階級の、即ち勞働者の收入よりも高い收入によつて生活してゐるあらゆる人間の全滅を、實現することが出來るのである。』（ジェニェーヴ版『智力的勞働者』第一部、八頁參照。）即ち單なる物質的生產の手段のみの共有でなく、智力的生產の手段の共有、機械のみでなく、知識の共有をも實現することが出來るのである。資本家のみでなく、インティェリゲンツィヤを

も、プロレタリアートは撲滅することが出來るのである。そして部分的の經濟的革命であつては、よしそれが如何程廣い强いものであらうとも、この目的を何うしても實現することは出來ないのである。從つて勞働階級の反抗の部分的の憤激を、一つの偉大な力强い全體に結び合はすところの機關が、是非とも必要なのである。そのやうな機關として現れ得るのは、結局、マハーエフシュチナの觀念を宣傳してゐるところの、眞のプロレタリアート的な勞働陰謀黨のみである。この勞働陰謀黨こそ眞のプロレタリアート的のものである。それが反インティェリゲンツィヤ的のものだからである。マハーエフシュチナの建設者は既に早くからこのことを言つてゐる。――『勞働者の眞の利益に仕へる機關は、勞働運動からその運動を拘束する力即ち智力的勞働者の利益を全く除去したときにのみ、初めて創立されるのである。プロレタリアートの運動が少數の資本家に對する社會民主的な鬪爭としてではなく、ブルジュアージヤ的の階級、支配的有識階級に對する鬪爭として宣戰されるときに、初めて創立されるのである。又マハーエフシュチナの創立者は早くからかうも言つてゐる。――『分裂してゐる憤慨を一つに纏める機關、勞働條件に對する勞働者達の益々大きくなつて行く現實的な要求や主張の爲めに、結合された强大な諸團體の步調の整つた一大集團運動を創造し得る機關、――このやうな機關を作ることは是非共必要なことである。』（『智力的勞働者』第二部、一一〇頁參照。）この勞働陰謀黨の中に、今や吾々はこのやうな眞のプロレタリアート的の團體を見出さなければならないのである。そしてマハーエフシュチナの中に、吾々はこの黨派の觀念を見出すのである。その黨派の目的は、即ち筋肉勞働者の全世界的の經濟的ストライキといふことである。從つて、勞働陰謀黨は根本的に全世界のものであり、超國家的のものでなければならないのである。從つて『又プロレタリアートの革命は、全文明世界の革命である。プロレタリアートによれる權力の把握は、全世界的の行爲である。然し又プロレタリアートの權力把握の意識的な準備は、如何にしても國家的の範圍の中には入れ得ないところの、各國の民衆の間の仕事として、恐らくは表現されることであらう、一全體としての、プロレタリアートの全世界的の組織機關、プロレタリアートの各國の民衆の間に結ばれた陰謀及び同一精神の行動――これこそプロレタリアートが支配に到達する唯一の道であり、プロレタリアートの革命的獨裁政治を將來す

る唯一の道であり、これこそ政治的權力を把握し得る組織である。』(同書、第一部、四五頁參照。)この新しく生れた國體の世界的の計畫はこのやうなものであるが、讀者も見られる通り、これは明かに虛無主義の色彩を帶びてゐるのである。プロレタリアートの革命的獨裁、政治的權力を把握する爲めの機關、各國の民衆の間の陰謀及び同一精神の行動――これ等すべては、もし百年も早く現れたなら、新しいものであつたに相違ない。マハーエフシュチナはそのやうな虛無主義を自說の戰術の中心的な、最も重大な點として、其處に力を入れてゐるのである。といふのもその點に於いてマハーエフシュチナは、自己が全世界のあらゆる他の社會主義的及び無政府主義的な黨派と異つてゐることを認めてゐるからである。文明諸國に於けるこれらすべての黨派は公然白晝にいろいろと活動をしてゐるのであり、ブルジュアージャに反對する集團を組織するのに、當のブルジュアージャの目前に於いて、それをやつてゐるのである。マハーエフシュチナはかう言つてゐる。――『他のあらゆる社會主義的、無政府主義的黨派は、警察の眼前で公然と勞働者の反逆や全勞働者のストライキを語る程に、それ程に眞に考へなしの若者であるのだらうか? そもそも勞働

者の反逆とはブルジュアージャの所有を襲ひ、それを奪ひ取らんとするものであり、全勞働者のストライキとは、ブルジュアージャの頭上に、雷のやうに落下すべきものではないか! 苟も反逆を準備せんとするならば、極く內密に、秘密結社的に、陰謀の力によつて準備しなければならないことを、眞に彼等一同は知らないのであらうか?』(『ブルジュアージャ的革命と勞働問題』三三頁參照。)『前世紀の社會主義の中には、ブルジュアージャ的の制度と相調和し得ないやうな道といふものを、見出すことが出來ないのであらう。皆相妥協し得るやうなもの許りである。そしてこのやうな道は專ら現代のブルジュアージャ的の制度の秘密結社の中に橫つてゐるのである。それ故に現在存在するところの奴隸制度を顚覆し得る唯一の道は、卽ちブルジュアージャ的の法律と少しも妥協してゐない唯一の道は、眞の秘密結社的の陰謀にあるのである。それこそ、非常に屢々又非常に下手に行はれた勞働者のストライキを、堅實な一揆に、全世界的の勞働革命に、改め得る唯一の道である。』――かうヲーリスキーは他の所で言つてゐる。(『智力的勞働者』第三部第二分冊、五―六頁參照)そしてヲーリスキーは此道は現代の社會主義の範圍を超えた彼方にある。

卽ち現代のマハーエフシュチナの中心點に横つてゐると言つてゐる。マハーエフシュチナはこの戰術の根本的個條を幾度となく繰返し力說してゐるのである。ア・ヲーリスキーは次のやうに繰返して言つてゐる。――『あらゆる勞働者の蜂起、全世界的の勞働ストライキは必要缺くべからざるものである。長い間の掠奪者を擁護してゐるあらゆる軍人を無力にし得る樣な蜂起が必要である。全世界的の陰謀が、全世界的のストライキが、必要である。（『ブルジュアージャ的革命と勞働問題』一九頁參照。）そしてマハーエフシュチナは、このやうな旗色の下にあらゆる下層民――勞働者、及び準勞働者卽ち工場的及び村落的プロレタリアートを自己の後に率ゐることが出來ると確信してゐるのである。このやうな經濟的な勞働運動は、勞働階級のあらゆる種類のものを一人殘らず惹きつけることが出來るであらうと、マハーエフシュチナは考へてゐるのである。このやうな經濟的な勞働運動は、社會主義者達が拒絕するところの總ての無職業者、失業者を自己の方へ引きつけることであらう。何故なら勞働者の獲得し得たものを確立し維持する爲めには、餓えたるもの、爲めのパンとか失業の場合の保護とかが必要だからである。然しこのやうな勞働運動

のみが地方的及び都會的の官憲をして、失業者の爲めに社會的勞働を作らしめ得るのである。又その時にはこのやうな勞働運動に村落の何百萬の餓えたる人々は味方するであらう。そしてその餓えたる人々は結局生存する方法を與へられて、徒らに想像的土地分配を夢み乍ら死ぬることがなくなるであらう。（同書、七七―七八頁。）プロレタリアートの各國の民衆の間の陰謀及び世界的機關によつて計畫された全世界的經濟的ストライキこそ、マハーエフシュチナ若しくは勞動陰謀黨がブルジュアージャ的インティリゲンツィヤ的の世界を征服する處の道である。然しこのプロレタリアートのマハーエフシュチナ的世界的機關に就いては、餘り詳しく述べまい。といふのはそれは秘密結社の事柄であつて、吾々にも秘密的な聯盟だからである。然しマハーエフシュチナの機關雜誌『潮流に反して』の紙上には、多少ともそれらしいものを窺知することが出來るのである。この雜誌の一つにロジーンスキーはプロレタリアートの新しい樣式の社會的機關のことを書いてゐる。その機關は次のやうである。あらゆる大小の工場、あらゆる多少とも纏つた人員のある團員の中から委員を選出して、それによつて委員會を組織する。その目的は、或る工場、或る職業、

又は或る地方に於ける經濟的鬪爭を指揮するにある。又一層重要な機關(卽ち數多の地方的のと一つの全ロシヤ的のと)に於いて統合された委員會の代表者達は、尙一層廣い、重大な運動を指揮する。只このやうな道によつてのみ、組織的な永續的な經濟的鬪爭の爲めの强大なる眞の階級的機關を作ることが出來るのである。勞働團體の意志の代表者として、自己の階級全部にその要求する所を命令することの出來る機關を、作ることが出來るのである。勞働階級の意志のこのやうな新しい團體乃至聯盟は、終局の目的をプロレタリアートの階級的奴隷制度の道からの解放といふ點に置いてゐるのである。勞働者の自由を終局の目的としてゐるのである云々。(『潮流に反して』一九〇七年、第三號、一一頁參照。)このやうな眞のプロレタリアート的な黨派の觀念としてマハーエフシュチナが現れてゐるとは、言はずと知れたことである。そして又このやうな眞のプロレタリアート的な黨派が勞働陰謀黨であることは、言はずと知れたことである。(ロジーンスキーはこの團體を勞働自由黨と改名しようと欲してゐるのである。)眞のプロレタリアート的な觀念としてマハーエフシュチナが現はれて來たといふことに就いては、旣に前に詳しく說明してある。又當のマ

ハーエフシュチナが自己をプロレタリアート的の社會主義と呼んでゐることも前に述べた通りであるが、同樣の程度の確信を以つて、マハーエフシュチナは勞働陰謀黨のことを眞のプロレタリアート的の黨派と名附けてゐるのである。然しマハーエフシュチナは、勞働陰謀黨のみでは勞働者のいろいろの集團を勞働運動の道へ導く指揮者として力の足りないといふことを、明かに示してゐるのである。然しマハーエフシュチナが一つの團體として今より數年前から存在してゐるのであつたなら、ロシヤに於ける事情は必ずや全く異つた方向に赴くことが出來たであらうと、當のマハーエフシュチナは信じてゐるのである。例へば、南ロシヤ全體に擴まつた千九百三年の經濟的大ストライキの場合に、若しも蜂起した勞働者達が、正しく勞働者達の騷擾を發露せしめ、尙彼等勞働者を一つの全體的な經濟的な要求の中に結合せしめ得るやうな機關を持つてゐたならば、その時の勞働者の騷擾は全ロシヤに擴大したに相違ないからである。——かうマハーエフシュチナは言つてゐる。(『プルジュアージャ的革命と勞働問題』七八頁參照。)問題はまだその當時にはマハーエフシュチナ的の機關といふものがなかつたことにある譯である。ア・ヨーリスキーはそのパンフレッ

トの他の場所でかう言つてゐる。――『勞働者の群集が、支配階級の問題に關係しないやうな自己の團體機關が成立するまで待つてゐるとすれば、その時には奴隷制度に於ける自由とか、白手階級の政治的自由とかの爲めの、當の勞働者に取つては全く無意味なる鬪爭は、消えてなくなつて了ふに相違ないのである。勞働革命の團體機關は、勞働者の鬪爭の爲めの機關は、決して政治的自由を要求しないであらう。その機關は君主專政治下に於いても、或ひは民主的政治の下に於いても、やはり秘密結社の中に存在するであらう。そしてその機關の唯一の要求は、筋肉勞働に關した經濟的の要求である。その機關の唯一の仕事は、一つの全世界的蜂起の中に勞働諸團體のストライキを結合せんとする目的の下に行はれる陰謀である。』(同書一一五頁參照。)勞働者の群衆は遂にそのやうな自己の眞の勞働機關が現れて來るのを、待ち通したのである。マハーエフシュチナは遂に現れたのであつた。

第五章　マハーエフシュチナ批判

讀者は今はマハーエフシュチナの何たるかを知つた譯である。今迄の章で、自分は出來る限り明細に又公平にそれの眞髓を與へて來たのである。然し今迄の所では、讀者にマハーエフシュチナのことを告げたとはいふもの、、當面の問題であるところの『そもそもマハーエフシュチナとは何ぞや?』といふ點には、尙答へてゐない譯である。自分は今初めてその問題に觸れようと思つてゐる。他の種々な社會的思想の間に於いて、マハーエフシュチナは如何なる位置を占めてゐるかを說明しようと思つてゐる。然しこの問題に對する解答は、單なる解剖を與へるといふのみではなく、解剖した組織學說に對する批評的解釋を試みなければならないのである。話しのついでには今迄も二三ヶ所そのやうな解釋を試みても來たが、この章では是非ともそのことを主眼として、充分な批評をして見なければならないのである。

マハーエフシュチナを充分な光の下に批判するといふこと、それを一歩一歩と詳細に解剖して行くといふことは、非常に有難からぬ仕事である。何故と言つて、餘りに簡單な、明々白々な問題だからである。マハーエフシュチナの理論的代表者は特別な知識の光を見せてゐる譯でもないし、それに三歩に一歩は意識的にか無意識的にか非常な誤謬に落ち入つてゐるので、たやすく反駁することが出來るからである。そこで自分は餘り明細なことをば說かずに、單にマハーエフシュチナノ根本的條件を選び取つて見る丈けに、範圍を限らうと思つてゐる。先づ第一にマハーエフシュチナが非常に澤山包含してゐるといふ種々な『眞珠とダイヤモンド』を示す爲めに、暫くの時間を費すことにしよう。さうすれば、一體マハーエフ主義者等が如何に輕々しい學問的及び事實的の用意の下に、大膽にも出發してゐるかといふことも分るであらう。又彼等が一足一足毎に如何なるアメリカ發見をやつたかといふことも、如何なる矛盾撞着に屢々落ち入つたかといふことも、又如何に彼等が自己に取つて不利な事實を小さく見せてゐるか、又はそれをごまかしてゐるかといふことも、分るであらう。このことを示すことは、マハーエフシュチナの學問的倫理的の水準

を批判するには、是非とも必要である。

先づマハーエフシュチナが、全くヘーゲルそのまゝの不注意を以つて、事實に對してゐるといふことから初めることにする。正確に打ち建てられた學問的事實がヘーゲルの自然哲學と矛盾したときに、ヘーゲルが非常な侮蔑を以つて『さうなら、一層事實に取つては惡いのだ。』と言つたのは、人の知るところである。マハーエフシュチナはこのヘーゲルの足跡を踏んで行つた譯で、自說と撞着してゐるやうな事實に對しては、全く何の注意を拂はうとさへもしないのである。千八百九十年代の後半紀の勞働者の群集と關係してゐたすべての勞働團體の人々は、經濟主義の領域から政治的鬪爭の方へ社會民主黨を突進せしめた最初の人々が勞働者自身であるといふ根本的事實をよく、知つてゐるのである。又マハーエフシュチナのつゝ當にいふのではないけれども、現在に於いて再びインティェリゲンツィヤを政治的鬪爭から經濟主義の方へ押しやつたのも、やはり勞働者が最初であつたのである。このことも知れ渡つた事實である。然るにマハーエフシュチナは、インティェリゲンツィヤが勞働者をして政治の道の方へと方面を取り誤らしたのであると力說するのである。よし如

何に多くのインティェリゲンツィヤの人々がその當時の勞働者の政治的傾向に反對して爭つたかを示したとしても、よし又その事實の記錄的な證據を擧げようとも、それは結局無效となるであらう。何故なら、『さうとすれば事實に取つては一層惡いのだ。』――やはりマハーエフシュチナは何の注意をも拂はうとしないで、きつとかう答へるであらうし、又インティェリゲンツィヤの人々のいふことなどは信ずるに足らないものだと、頭からきめつけるであらうから。そしてその理由として、勞働者を政治方面へ引つ張り込むことによつて、インティェリゲンツィヤは利益を得る側に立つからであるといふであらう。

他の方面から一例を取つて見よう。マハーエフシュチナがいふところの千八百四十八年の西ヨーロッパの革命の事實を調べて見よう。如何にマハーエフシュチナはこの革命を說明してゐるか。千八百四十八年の二月までに、ブルジュアージャとインティェリゲンツィヤとに取つてルイ・フィリップの全權政府を顚覆することが必要であつたのだと、マハーエフシュチナはいふ。ブルジュアージャ及びインティェリゲンツィヤとは、結局のところプロレタリアートの助けを呼び求めたのであつたといふ。プロレタリアートは起ち上つた。共和政治は得

られた。そしてブルジュアージャとインティェリゲンツィヤとは時代の支配者となつたのであるといふ。『その時の政府に參與した二人の社會主義的代表者が、小兒に類する如き計畫を立て、仕事に取りかゝり初めると、ブルジュアージャは勞働者を社會主義者達から引き離し自分達の側に立たせようとして、滑稽にもパリーに多くの國家的の工場を集中せしめたのである。』――かうマハーエフシュチナはいふのであるが、千八百四十八年の革命に於ける社會的勞働組織の事實に就いてのこの樣な愛嬌のある說明は、諸君には一體何と見えるであらう？、然しヲーリスキーは尙續けていふのである。直ちにこの工場は國民的代表者のブルジュアージャ的の官權によつて閉鎖されたのである。六月の勞働革命が燃え上つた。この時ブルジュアージャとインティェリゲンツィヤとは勞働者に反對して結束したのであつた。『勞働者は、自分達に對して、恰も兇惡な敵に對する如くにして、單に軍人に止まらず、單にあらゆる人々の自由の擁護者であるべき國民近衞兵のみに止まらず、實に昨日までは勞働者の協働者であつた學生、インティェリゲンツィヤまでが突擊して來たのを見たのである。』(『ブルジュアージャ的の革命と勞働問題、』四二―四四頁參照。)これはそもそも何んと

いふ言葉であらう？　言ひ間違ひであるか？　又は餘り彼が喋り過ぎたので、誤つて飛び出した文句であるか？　或ひは全く無智なるが故であるか？　或ひは含む所あつての惡口であるか？　否、それは事實に對する單なる不注意から出たに過ぎない。ありのまゝの歴史の組み立てではなくて、マハーエフシュチナに適合するやうにして作られた歴史の解釋である。ヲーリスキーがその全部の著述の中で幾度も繰返したところの明々白々な虚僞である。『バリーに於ける千八百四十八年の六月革命は、共和政府に對して起されたものであつたが、その時共和政府によつて、勞働者達は餓死の宣告を受けたのであつた。その時の革命運動と同樣に、その後他の失業者達によつて起された騷擾の時にも、彼等勞働者の中に一人として學問のある社會主義者、學問のある革命家といふものは現れて來なかつたのである。』――ア・ヲーリスキーは他の所に於いてかう言つてゐる。（同書九七頁參照。）またかうも言つゐる。――『六月革命の時に、ついその時まで『勞働團體』とか『勞働聯盟』とかいふ歌をプロレタリアートに歌つて聞かせた人々迄が、プロレタリアートを恩知らずの反逆者とし見捨てたのである。』（『智力的勞働者』第一部、三二頁參照。）又、プロレ

タリアートは六月革命の大殺戮の時に、民主黨から確然たる返答を受け取ることが出來なかつたのであるとも、言つてゐる。金權階級者が返答を與へなかつたのではない。粗野な都市の小店商人が返答を與へなかつたのではない。卽ち有識階級が、フランス國家の花たるべき人間が、精神的の貴族者達が答へなかつたのであるとも言つてゐる。調停者として現れて來たのは、つい其時まで自由の勝利の爲めの鬪爭に勞働者を召集した陰謀發起者達であつたのだとも言つてゐるのである。『呪はしき六月よ！』――フランスのカウェニャークと共に革命的な社會主義的なインティェリゲンツィヤや青年はかう叫んだのである。（『社會主義の破產』二七參頁照。）かやうにして千八百四十八年の六月騷擾にプロレタリアートの調停者として現れて來たのは、單にブルジュアージャに止まらず、革命的社會主義的インティェリゲンツィヤ、學生、及び教育ある青年などである。――マハーエフシュチナはこのやうにいふのである。然るに實際の事實は全然別なことを示してゐるのである。それでもやはり、さうとするなら事實に取つて尙更に惡いといふのであらうか！　例へばかういふ事實がある。この恐ろしい當時にバリーに滯在して、傍觀者として周圍の騷擾を眺めてゐた

ゲルツェンは、その回想錄の中に彼が眼前に視たところのいろいろの事實に就いて語つてゐる。千八百四十八年の六月に、社會主義的インティェリゲンツィヤ、青年學生などは、勞働者と共に市街戰の防禦所を守り、そこに死んだのであつたと、ゲルツェンは言つてゐる。その他の多くの實見者達は、皆このやうな數々の事實に就いて語つてゐるのである。しかしこれ等のことはマハーエフシュチナに取つてはどうであるのか？　マハーエフシュチナに取つて必要なのは、何が何でもい、から、インティェリゲンツィヤとプロレタリアートとの分裂を示すものである。そしてそれに反した事實は、よしどれ程有力な證明であらうとも、マハーエフシュチナに取つては要するに、『さうならば一層事實に取つては惡い』のである！　その上に彼等マハーエフ主義者達はこのやうな場合には、何時でもいろいろに言ひ拔けようとするのである。例へば前にも述べたやうに、當のゲルツェン自身はインティェリゲンツィヤの一人ではないか、從つてゲルツェンのいふことなどは信ずるに足りないと、言ひ拔けやうとするのである。若しこれが通るとするなら、非常に便利な方法であるといふ外はない。歷史的事實の眞實性の問題に於いては、インティェリゲンツィヤは利益を得る

方の側であるとせられて、インティェリゲンツィヤのいふことは取り上げられないのである。然しながらこれといふべき他の證據がないので、（何故ならあらゆる書物といふものは皆インティェリゲンツィヤによつて書かれたのであるから、）そこでマハーエフシュチナは自己流の觀察のまゝに事實を取り扱はうとするのである。卽ち自己に取つて望ましき事實だけを取り上げ、望ましからざるものはこれを拋棄して了ふか、乃至は勝手に變更して了ふかするのである。實に簡單であり又便利ではないか！　吾々は、二つの例に於いて、このやうな解釋法がマハーエフシュチナの中に採用されてゐたのを、既に知つたのである。

然しこのやうな例は二つに限つた譯ではない、幾つでもあるのである。それをすべて一つ一つ擧げることは、自分としても讀者としても面倒なことであるからやめることにして、もう二つ三つに止めることにしよう。例へばア・ヲーリスキーはかう言つてゐる。――『ヨーロッパの何處の國よりも一層早くロシヤにはベルンシュタイン學派（修正家ベルンシュタインより以前に）が勃興して來たが、又何處に於いてよりもロシヤに於いては一層早くそれは全く消えてなくなり、工合よく直ぐ次の純然たる正統派の中に變化して行つたのであ

る。』(『社會主義の破產』一六頁參照。)この說の前半は全く疑ふことの出來ない確かなことではあるが、同時にその後半は全く事實とかけ離れてゐると言はなければならない。ロシヤのマルクシーズムの中の批判的思潮は消えてなくなつたどころではなく、恐らくヨーロッパの何處に於けるよりも廣く擴まつたのである。それならば、そもそもヨーリスキーは何の必要があつてこのような明かな捧へごと、このやうな明かな事實の變作をやつたのであるか？ その理由は簡單である。卽ちマハーエフシュチナは在りのまゝの事實を見ないで、かうならばいゝと願つてゐるやうに見てゐるからである。ア・ヨーリスキーは、正統派のマルクシーズム及び社會民主主義がブルジュアージャ的インティェリゲンツィヤ階級に取つての利益ある世界觀であることを示し、從つて徐々にあらゆる正統派やベルンシュタイン主義者及びナロードニキ（國粹主義者）までがその方へ接近して來たことを示したかつたのである。然しこれ等すべては全くの嘘であるので、吾々は當のヨーリスキー自身の書いた言葉を引用して、それを指摘しなければならないと思ふ。マハーエフシュチナの創立者のヨーリスキーはかう言つてゐる。――『西ヨーロッパの社會民主黨は、きつぱりと自分が法律

上の支配者側の擁護者であると宣明するや否や、社會的革命の準備の計畫を全然振り棄てて了つたのである。そして直ぐその時にロシヤのブルジュアージャの社會は社會民主的な階級鬪爭のプロパガンダをやらせる爲めに、インティェリゲンツィヤの人々に勞働者の仲間入りをさせたのである。又青年が引き着けられて行かないやうにする爲めに、彼等青年の周圍には、ロシヤ全體に雷鳴の如く轟き渡つたロシヤ國粹主義派の叫び聲や『粗剛な唯物論者』に對する罵言などが、絕えずついて廻つたのである。ロシヤの社會民主主義者達は、かうした叫び聲に對して冷笑を漏らしてゐながらも、結局それを取り入れたのであつた。一方ブルジュアージャの社會は、社會民主主義者達が何の位の程度までこの火を弄ぶつもりなのかに就いて、彼等社會民主主義者達から返答を要求してゐるのである。又一定の境以上に社會民主主義者達の運動が發展しないことの保證を、ブルジュアージャの社會は要求してゐたのである。そのことを當の社會民主主義者達は、よく承知してゐるのである。』ロシヤのマルクシースト達はこの保證を、ロシヤ社會民主的勞働黨の宣言書の中に於いて與へたのである。その宣言書の出た後には、ブルジュアージャ社會の前衛者達の間に於け

る反マルクシーズムの抗議も消えて了つたのである。『このやうなマルクシーズムに對し、又このやうな階級闘爭に對して、一體何の爲めに爭ふのであるか？　激烈だつた論爭もなくなつて來た。相爭ふ感情も冷めて來初めた。ミハイローフスキーも鳴りを靜め初め、粗剛な唯物論に反抗する點に於いては、反マルクシストと相似てゐるといふ己の秘密を全く正直に告白したのである。』（『智力的勞働者』第一部、八六―八七頁參照）歴史はマハーエフシュチナによつてこのやうに書かれたのである。千八百九十年代に於けるインティリゲンツィヤの分裂は、このやうに解釋されたのである。又その後の和解がこのやうに造り變へられ、マルクシーズムの中でロシヤの革命主義的傾向とその反對傾向とが殆ど全く融合したかのやうに言はれてゐるのである。『あらゆる革命的なインティリゲンツィヤは忽ちにして社會民主的になつて了つたのである。』――他の所でヨーリスキーはかうも書いてゐるのである。（『宣言』―一九〇二年。）然し五頁の後にはア・ヨーリスキーは、それ等すべてが言ひがかりの無駄言であることを理解してゐるのである。理解したのではないとしても、少くとも彼は自分がロシヤの反對派をマルクス派として了つたことを、多少事實に對する

亂暴な見方であると言つてゐるのである。八十七頁に於いては、前述の通り、反マルクス派的思想は全く消失したとあり、九十一頁には、革命的及び反マルクス的の思想傾向は依然として成長し、マルクシスト達の存在するといふ事實が革命家、反マルクシスト達の違法的な行動を益々强盛ならしめてゐるとヨーリスキーは言つて、ロシヤのマルクシスト達の違を契驚させてゐるのである。この最後の方のことは眞實であるが、それならば一體何の爲めに、ロシヤに於いては純然たる正統派のみが存在し、反マルクシーズムが消失したなどと事實の揑造をしたのであつたか？　又そもそも何の爲めに、この根據の上にロシヤ國粹擁護派とマルクシーズムとの睨み合ひなどといふ眞に滑稽な解釋を打ち建てたのであるか？

ア・ヨーリスキーはこの解釋だけでやめようともせずに、ナロードニチェストヲの世界觀がマルクシーズムの世界觀に取つて代られた原因に就いての、尙一層學問めかした說明に移つてゐるのである。この場合に於いては、ア・ヨーリスキーはマルクシーズム的の古臭い診斷書、處方書に從つて、論を進めようと欲してゐるのである。卽ちヨーリスキーは觀

念が純經濟的な原因によつて取り代はられたことを説明しようとしてゐるのである。(マハーエフシュチナがマルクシーズムの中から生れたといふのも宜べなるかなである!)その説明は次のやうである。『七十年代のロシヤ國粹派時代のロシヤのインティリゲンツィヤは、如何なることがあらうともロシヤの國内には資本家の支配を許すまい、自己の偉大な思想の力によつてロシヤに於ける歴史の歩道を變らせて、インティリゲンツィヤ自身が讃美するところのロシヤの共同村落制を眞直ぐに眞の社會主義的な共存へと作り變へようと、宣誓したのであつた。』マハーエフシュチナがいふところの、ロシヤ國粹派に就いての當てにならない解釋のことは一先づ言はないことにする。何故ならロシヤ國粹派は決してヲーリスキーが述べ立てゝゐるやうな樂天的なものではなかつたのである。反對に、それは益々大きくなり行く悲觀的な性質を非常に持つてゐたのである。然しそのやうなことも言はないで置くことにする。吾々の面前には尙一層驚くべきマハーエフシュチナ的の眞珠があるからである。『ロシヤの國粹派が資本家に反對する鬪爭に於いて舍利となる迄飽く迄も戰はと誓言してゐた間に、一方當の資本家達は非常に多くの富を貯へ、非常の金額を有識階

級に提供したのであつた。ところがこの富といふものは非常にいゝ味のもので、幻を追つてゐたロシヤのインティリゲンツィヤも、間もなく青年時代の計畫をつまらないものと考へるやうになつたのである。』(『ブルジュアージャ的革命と勞働問題』三八—三九頁參照。)この時にロシヤ國粹派はマルクシーズムに己の位置を讓つたのであると。かうして、觀念學の變遷が純經濟的な原因によつて精密に學術的に説明されたと、マハーエフシュチナはいふのである。若しも第一の解釋が滑稽な感じを起すものとすれば、第二番目のものは、かやうな眞實にマハーエフシュチナ的な道德的不純さに對して輕い不愉快さを呼び起すのみである。かうした點に於いてエ・ロジーンスキーがレコードを作つてゐること、彼が滿かに師のヲーリスキーを追ひ越してゐることを、尙後に説くことにする。

然したつた今擧げた二つの例證によつて、いろいろの社會的及び歴史的事實に關するマハーエフシュチナの解釋なるものがそもそも如何なる價値を持つてゐるかを、判斷することが出來るであらう。そしてこのやうな典型的な解釋を、マハーエフシュチナは實に一歩毎に提供してゐるのである。もう二三例を引いて見る。マハーエフシュチナは質問してい

ふ。――『ロシヤの國粹派は、ロシヤの農民の社會主義的性質に就いての自己の根本的論據を、そもそも如何なる事實から導き出したのであるか？』マハーエフシェチナはそれに對してかう答へる。――『それは何世紀の間ロシヤの農奴所有者に取つては、自己の所有してゐる農奴に對して共有制度の原則に從つて奴隷手當を給することが便利であつたからであり、かやうな方法によつて彼等が原則的な共產制度を維持する方が便宜であつたからである』と。（『智力的勞働者』第三部、第一分册一八頁參照。）實にこの理由の下にロシヤに共同村落制が實在したといふのである！　共同村落制が農奴所有者の情により意志によつて實現したといふのである。共同村落制が農奴所有者に取つて利益であるから、そこで實現されたのだといふのである。マハーエフシュチナのかういふ說明は、仲々理由がはつきりしてゐるやうで、仲々鋭く見え樣が、惜しいかな、ロシヤの共同村落制はモスクワの大公階級の組織された時代に、卽ち農奴所有者といふものが現れるずつと以前に、創造されたものである。ア・ヨーリスキーはこのことを知らないのである。然しこの點に就いても結局は、さうならば事實に取つて一層惡いとでも、マハーエフシュチナはいふであらう。然しゲ

ルツェン及びチェルヌイシェーフスキーから始まつたところの、ロシヤの國粹派は、農奴所有者に取つてこのやうに利益があるとせられた共同村落制の爲めに、そもそも何の理由で立つたのであらうか？　ア・ヨーリスキーはこの場合にも彼獨特の解釋を持つてゐるのである。彼は云ふ。――ゲルツェンもチェルヌイシェーフスキーも、千八百四十八年のフランス革命に於ける勞働者の六月の蜂起に全く度膽を抜かれ、驚かされ、恐れさせられたのであらしいと。そして彼等兩人はこのことをつくづく考へた揚句、ロシヤをかやうな騷擾から救ひ得るものは、只共同村落制あるのみといふ結論に到達したのであると。そして『ロシヤに來かゝてゐる社會的革變の氣運が益々深く益々大きくなればなる程、その救助の安全纏は益々確實な有効なものとなるのである。この社會的革命の時代に燃え上つた何百萬といふロシヤのあらゆる奴隷の情熱を、その方角へ流し込むことが出來るであらうから。』（同書、同部、一一頁參照。）このやうな理由でゲルツェン及びチェルヌイシェーフスキーが共同村落制の爲めに、プロレタリアート階級の起す禍患に反對して爭つたのであると、ヨーリスキーはいふのである！　ゲルツェン及びチェルヌイシェーフスキーの二人が、共同村落制

の中に勞働革命除けの安全瓣を見出したのであるといふのである！　彼等兩人を驚愕せしめたものが、工場の溶爐の中で煮え上げらるべき何百萬の農民の運命ではなく、「溶爐の沸騰」の後に何うしても起らずにはゐられない勞働者蜂起の場合のブルジュアージャ的な有識階級の運命であといふのである！　こゝに彼等兩人の本質が、否國粹主義者達全部の民衆愛及び眞理に對する愛の本質が存在するのである、即ち彼等の憂慮するところは、自己所有の毛皮にあつたのである！――かうマハーエフシェチナはいふのである。そして現代の社會主義者革命家は皆ゲルツェン及びチェルヌイシェーフスキーの弟子であつて、社會革命黨は『如何にしたらロシャに於ける饑えたる何百萬の勞働者の激情を、ブルジュアージャの社會に取つて危險なきものとすることが出來るかを、幻に描いてゐるのである。社會革命黨は只に村落の無職業者達を社會主義的寶庫たる共同村落制から追ひ出して了うと、尙その上に社會革命黨は都會の失業者を田舍へ送るのであるが、それは都會に於けるブルジュアージャの所有物が、現代の制度に取つては最も恐るべき要素である。プロレタリアートの方面から襲撃せられ奪略せられないやうにする爲めである。』（同書、同部、一八頁參照。）

他の所ではかうも言つてゐる。――『社會主義者―革命黨員の助けによつて行はれる土地の社會化といふことは、全部の土地を政府の手に渡して了ふことである。さうしてから、其土地は農民に對して賃貸せられるのである。そして土地から入つて來た多額な掠奪的な收入は、富有な借地人と國家的收入を所有してゐる支配者階級のブルジュアージャ的社會との間に分配せられるであらう。』（ブルジュアージャ的革命と勞働問題』五〇頁參照。）これを讀んだ者は、全くあつけに取られて了ふであらう。即ち、實にかやうな譯であるから今迄ブルジュアージャが社會主義者革命黨員の黨派の中に這入らうとしないのであると！　かうして、今迄人々は自分の幸福といふものを自分でも知らなかつたのであらうと！

このやうに、或る時は事實に對する不注意、或る時は事實の揑造又は餘りに獨自的な（時には滑稽な、時には不愉快な）解釋の仕方――この二つがマハーエフシュチナの何時でも示してゐる內面的な特徵であると言つてい、。そして何等かの理由によつて、事實を無視することが出來ない場合や、事實を勝手に解釋することが出來ない場合などに出遇ふことがあると、マハーエフシュチナは不利なる事實に就いては默して了ふか、危險な反駁に

對しては默して了ふかするのである。默するといふことには二種類ある。その一つの默するといふのは、もつと正しく言へば別に深い意味もない、簡單な沈默で、注意を拂はないといふことから來たものである。丁度クルイロフ（一七六八―一八四四。有名なる寓話作者）の描いた象が、狆の猛烈な吠え聲には何等の注意をも拂はないで、默々として己の道を歩いて行つたやうに、象の社會主義はの狆のマハーエフシュチナの吠え聲などには少しも意を拂はないで、默々として己の道を歩いて行つたが、その沈默には立派な理由があつたのである。沈默の中の一つはこのやうなものである。他の種類の沈默は、答へることが出來ないので、已むなく默するといふのであるが、マハーエフシュチナはその論敵たるあらゆる社會主義を責めるのに、好んでこの種類の沈默の責めを負はせようとするのである。この點に於いてはエ・ロジーンスキーは特別に際立つてゐる。彼は彼に對するあらゆる批評家反對家を生學問をした人間、良心のない人間、明かな無學文盲な人間と呼んで、反對者皆に對して、『それではもう一度學校へ戻るがいゝ！』(Zurrück also in die schule!) と尊大な樣子で叫んでゐるのである。(彼の雜誌『潮流に反して』を見よ。)マハーエフシュチナ

の觀念的代表者であるア・ヲーリスキー及びエ・ロジーンスキーの知識の程度を知つたときには、この言葉は特別におつに見ゆるであらう。ロジーンスキーはマハーエフシュチナに對する社會主義者側の沈默を非常に怒つてゐる。彼は社會主義者の沈默は『智能的の無力』から、マハーエフシュチナに對して何かしらでも重要な返答をすることの出來ないところから、來てゐると力說してゐるのである。彼は勝利者のやうに、今迄何人も彼に對して本質的な點に關する反駁をしたものがないと力を入れて言つてゐる。然し反駁の例は澤山ある。例へばエ・ロジーンスキーの『そもそもインテリゲンツィヤとは何ぞや？』といふ書物に對して、イズゴーエフの用意周到な批評が出た。そしてその批評は本質的な問題に就いて觸れたものである。(『ロシヤの思想』一九〇四年、第四號を見よ。)そしてロジーンスキーは直ぐさまこの批評に對して答へたのである。(『潮流に反して』第三號を見よ。)然し種種な點に關して不必要な程の綿密さでイズゴーエフに答へてゐながら、エ・ロジーンスキーはイズゴーエフの最も中心的な反駁に對しては全く默してゐるのである。ロジーンスキーの答への中にはごまかしの點さへある。このことは、イズゴーエフの反駁ニロジーンス

キーの答へとを注意して比較したすべての人々には、よく知られてゐるのである。即ちイズゴーエフは、社會的資本に就いてのマルクスの理論に對するヲーリスキーの後繼者ロジーンスキーの批判が全く無智の結晶したものであること、又エ・ロジーンスキーが、彼の師の後を繼いで取扱つたところの問題に就いては、イロハのイの字も知らないことを明瞭に示したのであつた。これ等すべてに對して、ロジーンスキーはぐっともすっとも返答しないのである。これはそもそも思想貧弱の證據に非ずして、何であらうか？インティェリゲンツィヤが支配するといふ理論を全世界に大聲に叫んだ思想の流れが、當のインティェリゲンツィヤの中に存在したことに就いては、エ・ロジーンスキーは頑强にも全く默してゐるのである。インティェリゲンツィヤが支配するといふことに就いて叫んだ人を擧げて見れば、大小いろいろの社會學者に就いては言はずとしても、つい眼の先きにレナンがあり、ニイチェがある。然らばエ・ロジーンスキーはそもそも如何なる理由の下に、これ等の思潮に就いては一言も語らうとしないのであるか？或ひは彼の『批評的社會學的檢討』である『そもそもインティェリゲンツィヤとは何ぞや』といふ著書の題材に最も近い、最も直接的な關係を持つてゐるところの、尙又インティェリゲンツィヤが支配するといふことを大聲に叫んでゐるところの、いろいろの『潮流に反對する』ことは、彼のすべきことではなかつたのでもあらうか？　こもかくこの場合に於いては、エ・ロジーンスキーの沈默は無學文盲なるが故ではなく、他の理由から出たのである。即ちエ・ロジーンスキーは自己の『檢討』の全部に於いて英雄的な非常な努力を拂つて、インティェリゲンツィヤが何時でも惡魔的狡猾を以て惡魔的僞善を以つて、支配を得んとする自己の眞實なる計畫を匿してゐること、又あらゆる人々を騙そうとしてゐること、そこへ彼エウゲーニー・ロジーンスキーが現れ來て、到頭巨人ともいふべきインティェリゲンツィヤの顏から假面を剝いだのであることを、示さうとしてゐるが故である。（ロジーンスキーのこのやうな誇大妄想に就いては何れ尙後に說くことにする。）ところがインティェリゲンツィヤの間にはとうの昔から（プラトーン時代から、）インティェリゲンツィヤが支配者階級に運命づけられてゐると明かに主張した多くの思想が存在してゐたのである。既に千八百七十年代にミハイローフスキーがこの點に就いて可成り長い論文を『祖國雜纂』の中に書いたことがある。若しこれらすべてのこと

がエ・ロジーンスキーに知られてゐるとするなら、彼はそもそも何の爲めにこれ等のことを默つてゐたのであらうか？　若し彼がこのことを知らなかつたといふのなら、その時にはエ・ロジーンスキー自身が『もう一度學校へ歸つたら何うだ！』といふことになるのである。今だつて決して遲いといふこはないからである。（『潮流に反して』第三號、一三頁參照。）

然るに或る場合には或る事に就いて默するといふことが、何うしても不可能なことがある。それは事實が餘りに世間一般に知れ渡つてゐる場合である。そのやうな場合にはア・ヲーリスキーもエ・ロジーンスキーも同じやうに、實にマハーエフシュチナ的な、獨特な、仲々意味深い問題の取扱ひ方、事實の解釋の仕方をやるのである。例を擧げてそれを說明することにする。社會主義がマハーエフシュチナよりも半世紀も前に、現在マハーエフシュチナが繰返して云つてゐることを言つたとすれば（例へば、個人的世襲財產の沒收とか、社會的平等とかに就いて、）マハーエフシュチナは、これは社會主義が勞働者の群衆を騙さうとして、惡魔的狡猾の目的の下に宣傳したものであるといふのである。或ひは若しも社

會主義がブルジュアージヤに接近したやうな說（ベルンシュタイン主義の如き）を吐けば、これは社會主義が何かの拍子まぎれに全然假面を剝いで頭を出したとか、又は社會主義が自己の本然性を喋り出したとかといふ風に、マハーエフシュチナによつて解釋されるのであつた。キーフ・モーキエキッチ（ゴーゴリの大作『死せる魂』の中に出て來る哲學者―譯者）も及ばざる深謀遠慮な說明ではないか！　ア・ヲーリスキーは實に眞面目腐つた顏をしてかういふのである。――『臨機應變的のベルンシュタイン主義者は、社會民主的な空想談をば信じてゐるやうな社會民主主義者は一人もゐないといふ偉大なる眞理を、全世界に暴露しようとしてゐるのである。然しその黨派の中の一層先見の明ある人々は、卽ち正統派の人人は、斷然としてこのやうな思慮の足りない暴露に反對したのである。そこで多くの社會民主主義者が心の中では嘲笑してゐるところのマルクスの空想的な物語りや豫言などは、以前の通り誤りのない、プロレタリアート的の學說として、扱はれるといふことに決定されたのであつた。』（『ブルジュアージヤ的革命と勞働問題』八三頁及び『社會主義の破產』一四頁參照。）又エ・ロジーンスキーはヲーリスキーの言葉を繰返して、臨機應變家達は、彼

等及び彼等よりも一層注意深い仲間達が共に要求してゐるこゝのみ喋つてゐるのであるこ言ひ、又『臨機應變主義者及び修正派達は、その性質の深い爲めか、又遠大な爲めか、或ひは小黨分立的の爭ひに引き着けられてか、或ひは或る特別な原因によつてか（人間の魂は非常に複雜なものであるから！）不注意にも自分のカルタの札を見せたのである。喋り出したのである。前方へ走り出したのである。』（『そもそもインティェリゲンツィヤとは何ぞや』六三頁。）このやうな解釋の學術性及び思想の深さなどを評價して見られることを、自分は讀者諸君にお勸めしたい。

事實に對する無視、事實の揑造及びそれに就いての沈默――これがマハーエフシュチナの持つてゐる最も强固な武器である。その上に、その武器の辯護となつたり、又は或種の解釋となつたりして役立つのは、謂はゆるマハーエフシュチナ的の無智である。根柢的な歷史の事實に對する無識、（六月の騷擾に就いての如き）無學文盲なる解釋、ロシヤの共同村落制の如き根本的事實に對する無識、又は根柢的な反駁に對して返答することが出來ないこと――これ等のマハーエフシュチナのすべての點に就いては、既に上に說いた通

りである。そこでこゝではロシヤの國粹派に就いてマハーエフシュチナが言つた所から、特別に驚くべき一つの例を引くことだけに止るめことにしよう。『ロシヤの國粹派は共同村落制を社會主義的な組織に改造しようとしてゐるが、その理論はインティェリゲンツィヤの主張から來たものである。革命的マルクシスト達から來たものである。』（『智力的勞働者』第二部、七八頁。）――ア・ヲーリスキーは實際かう信じてゐるのであるが、このことに就いてはもう語らないことにする。エ・ロジーンスキーの場合はこれよりひどい。彼はヲーリスキーと同樣に、ロシヤの今迄のあらゆるインティェリゲンツェヤが何時も又何所でも（但しマハーエフ主義者のみは例外）國民的の幸福よりも國家的な富を一層重要なものと考へようと望んでゐたこと、そしてインティェリゲンツィヤが謂はゆる國家的收益の增大するのを頻りに求めてゐたことなどを示さうと懸命に努めてゐるのである。これも一つの無智の結晶したものと言つていゝ。何故ならロシヤの國粹派の最も特色的なところは、國家的の富よりも國民的の幸福といふことを第一義的だと主張した點であつて、この主張は特にチェルヌイシェーフスキーの場合に非常にはきつりとしてゐるのである。又それが後に

なつて『罪を悔ゆる貴族』の傾向に發達したのである。この點は國粹派に取つてのみ意味あるもので、後になつてマルクシーズムから攻撃された場合、これがその主要な點となつたのである。そして又この點こそ當のマハーエフシュチナが國粹派から借用したものである。それに就いては後に說くことにする。自分がエ・ロジーンスキーに向つて彼の智識の中に於けるこのやうな不思議な透間を指摘したとき、エ・ロジーンスキーは文字通りに次のやうに答へたのである。――チェルヌイシェーフスキー及び國粹主義者達は無學文盲の徒を欺かうとして、單に言葉の上で國家的收入の低減の爲めに爭つたのであつた。何故ならば言葉といふものは、單に思想を言ひ繕ふ爲めにのみ存在するからであると。(『潮流に反して』第一、一三頁。)信ぜられないかも知れぬが、これが事實である！　實にこのやうなのがエ・ロジーンスキーの答へであつたのだ！　然し彼一人がかういふのではない。彼よりずつと以前にア・ヨーリスキーは、ロシヤの國粹派が言葉の上では、民衆の爲めの要求を高めよと言つてゐるが、その眞實は『單に自己丈けの俸給の增加』を目的としてゐることが分つたと力說したのであつた。(『智力的勞働者』第一部、一二四頁。)ヨーリスキーに從つて、このやうな眞にマハーエフ的の方法によつたロジーンスキーは、ロシヤ國粹派が國民的の幸福を國家的の富よりも大切だと主張した事實を斥けて了ひ、尙も言葉を續けて、『イワノーフ・ラズームク氏が何故ロシヤ國粹派に丈論及するに止まつて、何故すべてのマルクシーズムの文獻を取り入れようとしないのか、自分にはどうしても分らない』と言つてゐる。これこそ實に全くの無智の眞珠である。全くあきれて了ふより外に仕樣がない程だ。然しエ・ロジーンスキー自身は全く明かにこの點に於いて自己の無學無識を承認してゐると言つていゝのである。マルクシスト派の文獻をロシヤ國粹派に結びつけることは到底出來ないのである。何故といふに、何時でもあらゆるマルクス派の文獻は、分配を生產よりも大切とし、國民的の幸福が國家的の富よりも重大であるとしたロシヤ國粹派の原則に對して、何時でも鬪爭してゐたからである。

これらすべてのことは要するにイロハに過ぎないのであるが、それさへもマハーエフシュチナは知らないのである。これ等のことを考へて見るならば、このやうな學術的に無學であるマハーエフシュチナが到るところで自家撞着を演じ、突然に火藥を發明した樣な風を

したり、既にずつと以前に發見されてゐたアメリカを今自分が新しく發見したやうな態度をしたりすのが、別に怪しいことであらうか。このやうな次第であるから例へばヲーリスキーは、社會主義を以てインティェリゲンツィヤの觀念なりとするマハーエフシュチナ的の獨斷を根本的主張として建てたのである。そして直ぐにロシヤの君主專制政治の存在はあらゆる有識階級の利益の爲めには缺くべからざるものであり、その利益の爲めにはよく役立つものであつて、この專制政治は有識階級の收入を確實に保證してゐるのであるといふやうな、自家撞着を言ひ出すのである。(『智力的勞働者』第二部七四及び一〇八頁。)創始者の主張としてこのやうな說を持つたマハーエフシュチナから、そもそも何が殘り得よう? さうかと思ふと、ア・ヲーリスキーは何の支障も感ずるとなしに、他のところで同じやうな斷然たる語調で次のやうに言つてゐるのである。――有識階級は專制政治組織に對しては敵であると。(『ブルジュアージヤ的革命と勞働問題』四頁。)多分彼は自分の新しい何かの著書の中で、尙も矛盾撞着した觀察を見せるに相違ない。ア・ヲーリスキーに取つては、『社會主義はインティェリゲンツィヤの觀念である』といふ原則と、他のいろいろの問題と

は重大に關係してゐないのである。彼はどうしても論理の極點と極點とを結びつけることが出來ないのである。マハーエフシュチナの考へによれば、社會主義は智力的勞働者の階級的思想であることになり、智力的勞働者の階級的理想は社會主義たといふことになるのである。ところがアメリカには滿百年間といふものは社會主義がなかつた。そもそもこのことから、マハーエフシュチナはその根本的な原則によつて如何なる結論を導き出すべきであらうか? 結論は次の二つの中の何れかでなければならない筈である。卽ち其百年間といふものはアメリカには全然智力的勞働者、インティェリゲンツィヤが存在しなかつた。又はそれは存在しはしたものの、未だ自己の階級的理想を意識しはしなかつた。この二つの何れかである。ところがア・ヲーリスキーには別な論理があつたのである。彼は云ふ。――アメリカに滿百年間といふもの社會主義が現れなかつたのは、アメリカには一度も專制政治が存在しなかつたからであると。(『ブルジュアージヤ的革命と勞働問題』三七頁。)このやうな解釋はマハーエフシュチナに矛盾するものである。何故なら專制政治はアメリカにはなかつたが資本主義は何處よりもそこで一番榮えたからである。そして『智力的勞働者』

及び有識階級者達は、資本主義的な掠奪に反對して社會主義の階級理想を立てたからである。それのみでなく、つい今しがたマハーエフシュチナが有識階級者達は非常に仲よく專制政治と暮してゐると言つたのを、吾々は聞いたのである。然らば何ういふ譯で、この專制政治が存在しなかつたといふことから、社會主義が存在しなかつたといふことになり得るのであらうか？　實にア・ヲーリスキーの論理は兩足とも跛といふ譯である。實際「僕は君に先づ第一に論理學を講義したい」といふ譯である。

吾々は未だマハーエフシュチナの持つてゐるといふ眞珠やダイヤモンドを十分の一も數へ擧げはしないけれども、既に今迄調べて來たところ丈けで充分であるから、これ以上數へ擧げるのは止めることにしよう。今まで擧げたもの丈けによつても、讀者はどの位深い學術性の蓄積を、時には滑稽な程になつてゐる學術性の蓄積を、このマハーエフシュチナが自己の中から提出してゐるのかを知ることが出來るであらう。學術上の無識、沈默、事實の揑造――これがマハーエフシュチナの外面に暴露した特徴である。從つて心ある讀者は、それを見て直ちにマハーエフシュチナから離れて了ふのである。そして又今日まで多

くの批評家がマハーエフシュチナに對して嫌忌を抱きつゝ、それに觸れようとしないのも、或ひはよしマハーエフシュチナに對して攻擊をしなければならない場合があつても、出來る丈け通り一遍に、別に鋭くも刳らないで濟ましてゐるのであらう。

第六章　マハーエフシュチナの社會主義批判

よし如何に退屈であつたとしても、批評家をしてマハーエフシュチナに觸れようとせしめないところの、マハーエフシュチナのいろいろな側面に注意することは、何うしても必要であつたのである。マハーエフシュチナの倫理的及び學術的水準を說明することが、どうしても必要であつたのである。又マハーエフシュチナの事實の解釋がどの位の信用に價ひするか、どの位の程度までマハーエフシュチナが歷史的事象を眞實に描いてゐるかを示すことが、必要であつたのである。吾々は今迄いろいろな例によつて、歷史的事象の揑造がマハーエフシュチナの不斷の態度であつたことを、可成り詳しく說いたのである。そしてこのやうなマハーエフシュチナに對して、眞面目に鋭く、こまかに批評解剖する必要がないといふ一つの結論を得たのである。又『解釋』や『組織』やの點に於いては、大部分最も深いギャップがマハーエフシュチナを待ち受けてゐることが分り、またこのやうなマハー

エフ的の態度やこのやうな社會的科學の方面の準備知識などでは、マハーエフシュチナが組織的な構造とか一貫した論旨などゝいふ名に價ひしないことも知つたのである。(ア・ヲーリスキー自身が社會的科學そのものを否定してゐるのも道理である。彼は丁度地理を信じようとしなかつた疑ひ深い女學生に似てゐる。)

然しながらマハーエフシュチナに對してこのやうな一寸した勝利を博したからと言つて、こゝでやめるつもりは吾々には少しもない。吾々の目的はそれではないのである。マハーエフシュチナの根本的思想、卽ち社會主義に對するマハーエフシュチナの批評を、批評的に論ずることが必要である。これを次に始めることにしよう。それを始めるに當り、吾吾は、既に獲得したあらゆる結論を心に留めて置かなければならないのである。このやうな泥路を歩かうとするのであるから、オバーシューを穿いてかゝらなければならないのである。ともかくいろいろな點に於いて興味あること、思ふので、吾々は今マハーエフシュチナ橫斷を始めることにしよう。實際マハーエフシュチナの中には、マハーエフシュチナが自身を指して呼んでゐるところの、『眞のプロレタリアート的な社會主義』の見地から見た社

會主義の批評が存在するのである。從つてマハーエフシュチナは吾々に取つては砥石の意味を持つてゐるので、それによつて吾々は社會主義的世界觀の刃を研ぐことも出來れば、社會主義的識見はそれによつて充分な切れ味や鋭さを得ることが出來るのである。從つてマハーエフシュチナは、吾々の方から見れば、一つの獨特な『教導的な意味』を持つてゐる譯である。それは社會主義のすべての新參者に取つては、仲々有益な道程であると言つていゝものである。然し結局のところは「克服さるべき」(überwinden werden soll) ものである。これは一方面からの見方である。他の方面から見れば、マハーエフシュチナはインテリゲンツィヤに就いての社會的經濟的解釋に於けるマルクシーズムの最後の極點である。このことは尙一層興味もあり重大でもある。吾々の見るところでは、インテリゲンツィヤといふこの社會的團體の本質と構造とに就いての問題を、決定的に解決しようとしたのは、マハーエフシュチナの斷案である。マハーエフシュチナの最後の問題、中心的問題――これは吾々に取つては特別に興味のあるものであるから、吾々はその點を特別に、出來る丈け明細に論じて見たいと思つてゐる。然し、先づ第一にマハーエフシュチナの教

導的な意味、即ち社會主義に對するマハーエフシュチナの批評に就いて論ずることにしよう。勿論吾々がマハーエフシュチナに對して答へようとする場合に、社會主義の立場から論じようとしてゐないのは明白なことである。吾々は只黨派的な社會主義的の觀察點を離れて、マハーエフシュチナの反社會主義的な理論に對して、マハーエフシュチナの一般的概念及び部分的定義に對して、考へを述べようとするまでゞある。

先づ小さいことから、然し當のマハーエフシュチナに取つては非常に特色的な點から、即ち社會科學に對するア・ヲーリスキーの決定的否定から、始めることにしよう。既に述べた通りに、マハーエフシュチナの創始者は、社會科學を階級的有識者の欺瞞の現れたものだと言つてゐる。彼の弟子なるロジーンスキーの言葉に依れば、『社會學に於ける如何なる理論をも、如何なる方法論的態度をも、ヲーリスキーは認めなかつたのである。彼の意見によれば、あらゆる社會科學は、群衆の意志及び思惟の上に位する支配の嘘僞なる組織に外ならないのである。』(『潮流に反して』第一號、一二及び二八頁。) この點に就いてア・ヲーリスキーは、彼の後繼者の『批評的社會的檢討』そのものさへが僞りの組織に屬

してゐると確信してゐるのである。何と云ふ公平な態度であらう！　して見るとエ・ロジースキーも苦痛を覺えながら、實に已むなく僞りの組織を作つた譯である。マハーエフシチナの創始者の抱いたかうした考へ方は、歴史に於ける個性の役目に就いての彼の考へ方から流れて出て來たものである。ア・ヲーリスキーはマルクシーズムの宿命論に激しく反對して、共産主義的制度が『自然的必然性』を以つて、『人間の意志に關係なく』やつて來るといふ說を覆へさうと力めてゐる。(『社會主義の破産』一〇頁。)然しヲーリスキーはマルクス的の宿命論を否定してゐながら、それを決定論の方へ持ち來たすことを知らないのである。そして下り阪を轉々して純非決定論の方へ、全くの社會學の否定の方へ、下つて行つたのである。マルクシーズムは社會の運行へ正義の範疇の適應することを否定したが、社會の運行への因果律の範疇の適應を宿命論に迄持つて行つたのである。是に對する答の中に、ア・ヲーリスキーはマルクシーズムを裏返しにして示したのである。彼は社會の運行へ正義の範疇のみを適應させ、それに因果律の範疇を持つて來ることを全く拒絶し、社會の運行とその運行の形式との合法性といふことを全く否定したのである。彼は、

現代の社會主義が科學になつて了つて、單に奴隷制度の組織化されたものに過ぎないところの共同生活の形式の合法性を認めてゐることを、非常に怒つてゐる。ア・ヲーリスキーは、社會の運行といふものが奴隷制度の一時に又漸進的に成長しつゝある組織(このことを暫く吾々は認める)であり、又合法的な進行であるといふことを見もしないし、理解さへもしないのである。それのみでなく社會の運行といふものがさうならざるを得ないことを、認めようともしないのである。又そもそも合法性とは何であるか、因果律とは何であるかといふ問題をマハーエフ主義者達へ持つて行くことは、全くとんでもないことである。彼等の意見によれば、これ等はブルジュアージヤ的インティェリゲンツィヤ的の科學の範圍のことである。群衆を支配する爲めの僞りの組織の事柄であるといふのである。從つて社會科學の根本的問題に對して答へることも出來ず、答へようともしないで、ア・ヲーリスキーが、それを全く否定しよう、『地理を信じまい』としたことは別にあやしむにたりないのである。こゝからア・ヲーリスキーの完全な非決定論が出て來るのである。彼はいろいろの言葉で絶へず次のやうに繰返してゐるのである。――『一般人間的な生產及び事實の

不斷なる歴史的運行の法則の中で、人間の意志に關係してゐない法則といふものは一つもない、またあり得ない。』又『如何な社會的な豫言もない。社會の發達の法則の中で、人間の意志に關係しない法則などは、一つもない。』ア・ヲーリスキーは決定論的宿命説に反して、昔のナロードニチェストヲそのまゝの言葉を繰り返してゐるのであるが、そのナロードニチェストヲは、何百萬の被搾取階級の人々の死滅に對して『事物の自然的なる運行』（ミハイローフスキーの言葉）といふ文字を當て嵌めることに、極力反對したのである。ア・ヲーリスキーは次のやうに言つてゐるのである。――『歴史の運行に對しては、人類の大多數者の壓迫された生命が反抗してゐるのである。』又彼は人類の大多數を奴隷にして了ふ歴史の運行に對して怒つてゐるのである。（『智力的勞働者』第三部、第二分册、八、一六、一七頁及び其他。）然し昔のナロードニチェストヲとても、後になつてマルクシーズムが攻擊した程に、非決定論を擔ぎ出した譯でもなく、又社會の運行に因果律を適應することを一度でも否定したことがなく、又（後になつてベ・ストルーウェがミハイローフスキーを非難してゐるやうに、）一度でも『個性はすべてをなし得る』とも主張したことがないのである。ア・

ヲーリスキーはその極端まで行つたのである。彼は、如何なるものであらうとも、人間的社會の發達の法則を否定したのである。それらを輕蔑的に『哲學』と名づけたのである。彼は又反族を翻した勞働者の群がこの不可思議なる經濟的な力に就いての學識ある社會主義者達の哲學を支配者階級の拵へごと、宣明するやうな時が來ると、豫言的に言つたのである。（『ブルジュアージャ的の革命と勞働問題』八一、八二頁參照）彼は歴史を人間の手丈けで作られたもの、人間の意志のみの結果であると考へたのである。彼は歴史に因果律を適應することを拒絶し、さうして『個性はすべてを爲し得る』と叫んだのである。然し若しも個性がすべてを爲し得、社會の運行に因果律が適應されないとしたなら、そもそも如何なる社會科學があり得よう！　又若しもその社會科學が欺瞞であり、譫言であるとするなら、その時には社會とは要するに作り話しに過ぎないのである。その時には統合された社會も、綜合された人間團體もなく、只奴隷と主人、只二種族の人間が存在するのみである。掠奪の法則の結果として少しも統合されてゐないところの、然し相似た顔を持つた二匹の動物が、即ちあらゆる人間史上に、あらゆる人間社會に、不可避的に成長して來ると

ころの二種族が存在するのみである。（『社會主義の破産』一〇頁。）マハーエフシュチナがこゝに突然に、『法則』とか、『不可避的』とかいふことを認めてゐるのを見て、讀者はさぞ驚くことであらう。社會的の形式と社會の運行との適合を否定したことはそもそも何處へ行つて了つたのであらうか？　それとも又もや吾々の面前に、マハーエフ的の自家撞着の眞珠が一つ飛び出した譯なのであらうか？

ヨーリスキーが如何なる誤謬に陷ち入つたかを想像して見ることは、別に困難なことではない。それはトゥルゲーニュフが描いたビガーソフの陷ち入つた、既に陳腐となつた誤謬である。ルーヂィンもこれに陷ち込つたのである。ビガーソフの心からの主張はあらゆる主張の否定といふことであつた。ピーサリェフの後間もなくピーサリェフ主義者等は、あらゆる理論を否定した理論を執念深く宣傳したのであつた。同樣な自殺的自家撞着の中へ、あらゆる體系組織を否定することによつて、ア・ヨーリスキーも陷ち込んだのであつた。あらゆる社會的政治的の主張、觀察、思想といふものは、不可避的に一つの組織體系に成長しながら、その體系の中へ流れ込み、さうしてその組織體系はヨーリスキーの非常に嫌つた社會科學となつて、不可避的の現象として順々に現れて行くのであるが、ヨーリスキーはこのことを知らないのである。それは實に運命的なものである。このやうな組織體系を逃れんとして、ア・ヨーリスキーは全くの無秩序な、無組織的なもの、方へ走つた譯であらうが、然し、勿論さうした思ひ切つた遣方も何の爲にもならなかつたのである。ヨーリスキーが望んでか、望まなくつてか、ともかく彼が八方に投げ散らした組織のないきれぎれな思想は、遂に一つの所に纏つてマハーエフシュチナとなつて行つたのである。（その證據は本書の第四章である。）言葉の上ではア・ヨーリスキーも好き自由に社會科學を否定することも出來ようが、實際に於ては、ヨーリスキーの耳でさへも額より高く成長しよう筈がなかつたのである。從つて彼は忠方の手ではあらゆる因果律の法則や理論を破壞しながら、他の手でもつて『法則の結果として』とか『不可避的に』とかいふ言葉を導き出して來たのである。マハーエフシュチナに取つても因果律が役に立つた譯である。其處で、前述の通りにア・ヨーリスキーが社會科學に於ける如何なる學術的理論をも、如何なる方法論をも承認しなかつたとしても、そのやうな不承認は、彼によつてあれ程に批評されたマ

ルクシーズムや社會主義などの方法論を當の彼が利用する場合には、少しも彼の邪魔物にはならないのである。ア・ヲーリスキーは憤慨して槲の木ともいふべき社會主義の根を掘り出して了つたが、彼は、ドングリともいふべき當のマハーエフシュチナがその木の上に成つたことを少しも知らないのである。マハーエフシュチナはマルクシーズムの所から階級闘爭の原理全部を借用したのであつた。マハーエフシュチナのいふところの階級闘爭の理論が、マハーエフシュチナによつて初めて終局の所まで持つて行かれたといふことは眞實であらうが、然しそれだからといつて、マハーエフシュチナが理論であり方法論であることを止めたことにでもなつたであらうか？

階級闘爭論――これがマハーエフシュチナの土臺石である。ア・ヲーリスキーもエ・ロジーンスキーも各々の特色に從つて、それを極點まで發展させたのであつた。ア・ヲーリスキーは社會科學の否定者として、幾分簡單に、粗雜に、ロジーンスキーは社會科學を認めるものとして、幾分明細に又學問めかして、めいめいそれを發展さしたのである。ア・ヲーリスキーがそれを極點まで發展さした仕方はかうである。――社會は虚構のものであり、

社會の進歩は僞りのものである。何故ならば其處には二種族、二種の階級の人間しか居ないからである。奴隷と主人、筋肉勞働者と智力的勞働者としか居ないからである。そしてその兩者の間には何れかが倒れるまでは階級闘爭が行はれたからであり、又行はれてゐるからであり、行はれるであらうからである。支配者階級は選ばれたる、世續的な少數者から成り立つてゐて、彼等は人間の機能卽ち頭腦を利用するように定められてゐるのである。他の階級卽ち奴隷階級には殘りのあらゆる何百萬の人間が所屬する。そして彼等は自己の頭腦を活用する能力を奪はれてゐて、人間社會に對して只己の筋肉的機能を活動させることによつて仕へるように定められてゐるのである云々。（『智力的勞働者』第二部、一〇五、一〇六頁。）その他の階級といふものがあるとすれば、それは皆譫言であり、欺瞞である。貝相互に相敵對してゐる二つの階級があるのみである。搾取するものと搾取されるものとの階級だけである。從つて搾取階級の中へ工場主も、大學教授も、資本家も又は小學教師などもはいるのは明かなことである。彼等すべてを總稱して、ヲーリスキーは『有識階級』とか『有識支配者』とかよんでゐる。一方の被搾取階級乃至筋肉勞働階級中へは工場とか

村落とかのプロレタリアート、又は筋肉勞働者的のあらゆる百姓などがはいるのである。（『ブルジュアージャ的革命と勞働問題』一二頁參照。）ア・ヨーリスキーは階級闘爭の理論をこのやうに終局點まで考へたのである。然しながらその終局點に於いて、彼は自家撞着に陥ち入つて、行きつまつてゐるのである。即ち彼は最初には、全ロシヤの何千萬の奴隷即ち勞働者の搾り取られることに就いて語り、あらゆる筋肉勞働は奴隷的なものであり、己の土地を耕して生活してゐる農夫は筋肉勞働者と同樣に被搾取階級に屬するのであると言つてゐる。然るに數頁を過ぎると、ア・ヨーリスキーはその言葉を飜して、土地の所有といふこともやはり掠奪的所業である、分割された土地を有する百姓も、やはり土地所有者ではないか、大きな農夫の家庭も、或は共同村落制もやはり土地所有者ではないかと言つてゐるのである。そして彼は被搾取者階級として單に工場及び村落のプロレタリアートしか認めてゐないのである。彼の意見によれば、田舍の貧乏人は、思い切つて相像的土地分配に對する己の希望を投げ捨てゝ了つたときにのみ、即ち耕作地所有といふことを益々強め擴大しようと願つてゐる周圍の百姓から自己自身を全く切り離して了つたときにのみ、眞實の

道に立つことが出來るのである。（同書、四九—五〇頁と、五三、七七、七八頁とを比較して見よ。）このことはまあよいとしても、問題となるのは、ア・ヨーリスキーがこの場合如何なる階級にこの百姓の筋肉勞働者を屬さしめたのかといふことである。彼は被搾取者階級の中からそれを投げ捨てたのであつたが、まさかそれを被搾取者階級に入れる譯にも行かなかつたのである。その理由は、ア・ヨーリスキーによれば搾取者階級は智力的勞働を特色としてゐるからである。かやうな次第で、ア・ヨーリスキーによつて終局點まで發展されたといはれた階級闘爭の理論は、四方八方に綻びだらけの有樣である。然し、やはりこのやうな理論上の不成功も、ア・ヨーリスキーに取つては、マハーエフシュチナの哲學の中の最重要點として方法論即ち階級闘爭論を取り入れる場合に、少しも彼の障害物とはならないらしいのである。

然し其處へ己れの先生を助けようとして、エ・ロジーンスキーが駈けつけて來たのである。そして彼もこの階級闘爭論を徹底させようとしたのであつた。彼もいろいろに考案をめぐらした。或る程度の制限をつけないではなかつたが、彼は先づ第一に社會科學を認め

たのであつた。（『そもそもインティエリゲンツィヤとは何ぞや』三九―四〇頁。）然しその場合に社會主義的な科學（卽ちマルクシーズムの理論）が全く非科學的であると言つたのである。それから彼は己れの先生の說に反對した。全人類を二つの階級に、搾取者と非搾取者とに分割した自己の先生の說に反對したのである。このやうに二つの階級に分裂することは單にいろいろな貧嬰な社會團體に適するのみであると、エ・ロジーンスキーはいふのである。（同書、一五九頁。）この理由によつてエ・ロジーンスキーは、社會的階級論の發達、その理論の終局までの思想的推論が必然避くべからざるものと考へたのである。そして彼はこの思想的發達を、彼自身が全く非科學的と認めたところの當の社會主義的科學の範圍內で行つてゐるのである。彼はこれといふべき程の推論考察もなさず、マルクシーズムの根本的論理を取入れてゐるのである。そしてまたもやマハーエフシュチナのドングリはマルクシーズムの槲の木の上に成つたといふことが、吾々に明かに見られるのである。ここで注意すべきことは、新入者といふ者は何時でも『王樣よりももつと忠節である』といふ點に特色を示すものであるが、そのやうに新しく現れたマルクス派的なマハーエフ主義

者達は、昨日はマルクシーズムの反對者であつたのに、今日は旣にマルクシーズムの根本的思想を採り入れ、特別に一生懸命になつて階級鬪爭論を終局まで發展させようとして、究局のところ彼等自身がマルクシーズムを不合理にまで導いて了ふのを少しも苦にしてゐないのである。次の章に於いて、自分はエ・ロジーンスキーの結論を說かうと思つてゐる。こゝでは只マハーエフシュチナといふドングリがマルクシーズムといふ槲の木に成つたことを丈けを示して置きたかつたのである。そして當のエ・ロジーンスキーもこのことを覆ひ匿すことが出來なかつたのである。彼はいふ。――社會を階級に分裂する爲めの尺度は、經濟的關係の範圍から持ち來たされなければならない。何故ならこの範圍の事柄は社會生活に於いて最も重大な決定的な役目をしてゐるからであると、（同書、一五九―一六〇頁。）彼はいふ。――マルクシスト達は、あらゆる社會現象の解剖の場合に『唯物論的』の方法を適用することを吾々に敎へたと。そして彼の著述の次のやうなところにのみ、この方法が用ひられてゐるのである。――『歷史は社會的の團體及び階級の經濟的利害の鬪爭によつて働くのである。』（『代議制度の總決算』九五―九六頁。）又彼は繰返していふ。――『歷

史は階級闘爭である。いろいろの集團的な利己的な組織の相互の身分階級の間に起された戰爭である。階級的利害は、歴史を動かし歴史を作るところの梃である。』（『そもそもインティェリゲンツィヤとは何ぞや』一五九頁）かうも云ふのである。――『全世界の歴史といふものは階級的闘爭である。よし如何に立派な理想的な形式によつてその闘爭が覆はれてあらうとも、その闘爭は何時でも或る階級の經濟的利益の爲め、搾取權の爲め或ひはそれよりの解放の爲めに、行はれるのである。』（『潮流に反して』第一號、四頁。）然しこの樣にしてマルクシーズム的のドングリとして充分に成熟して了ふと、エ・ロジーンスキーは今迄養つて呉れた親木の根本を掘り返して了つて、マルクシーズムはインティェリゲンツィヤの階級的觀念である、非常に巧みに考案された欺瞞であると言つたのである。一口に言へば、社會主義的な學問が拵へごとであり欺瞞であると云ひながらも、それの根本的論據をエ・ロジーンスキーは宣信してゐたのである。

マハーエフシュチナの根本的論據の獨斷――これが今迄のところから吾々が導き出した第一の斷案である。マルクシーズムから歴史的社會學的論據を借りて來たといふことは、未だ自己獨特の觀察の根據を礎いたことを意味してゐないのである。マルクシーズムから借り出した原則の上に全マハーエフシュチナが建てられてゐるのを意味する。そしてこの原則が單なる信仰の下にマハーエフシュチナによつて採用されてゐる以上、マハーエフシュチナ全體は宗教的獨斷的の教理に過ぎない譯である。ア・ヨーリスキは再三社會主義の宗教的要素、信仰としての社會主義の意味を說いてゐる。『智力的勞働者』の第三部はこのことを主題としてゐるのである。（第二分册、『新しき宗教としての社會主義的學說』。）又『十九世紀の社會主義の破產』もこれを主題としたものである。これ等の中には新しいものは少いが、しかしその代りに實際何かしら信ずるに足るものがある。實際社會主義の成長發達の程度に從つて、社會主義に對する社會主義者の人々の態度の中には、廣い意味に於ける宗教的な調子が感づかれるのである。群衆は社會主義を謂はゆる『信仰』せん許りであり、それはア・ヨーリスキーが地理を信じまいとしてゐるのよりも一層明かである。然しア・ヨースリキーの意見によれば、當の社會主義もやはり代表的な宗教的說教である。それは『幸福、正しき生活、將來あらゆる人間の平等に就いて』の說教である『社會主義

は、昔のいろいろな宗教が奴隷に與へた說教と同一な說教である。社會主義はブルジュアージャ制度の下の奴隷に對する宗教である。』（『ブルジュアージャ的革命と勞働問題』七九―八〇頁）。吾々は前にマハーエフシュチナの根本的思想の獨斷と言つたが、今度は當のア・ヲーリスキーが社會主義に對して言つた例に從つて、マハーエフシュチナに就いての全體的名稱を新しき宗教と名づけることも出來るであらう。かういふ名前を與へることは非常に興味あることだと思ふ。然しそれは吾々を遙か側道の方へ連れて行つて了ふのであるから、吾々は宗教的の方面の問題よりも寧ろ社會學的方面の問題を取り扱ふことにし、宗教よりも觀念學に就いて語るようにしなければならないのである。若しも社會主義がブルジュアージャ制度の下の奴隷の爲めの宗教であり、社會主義がインティリゲンツィヤの觀念であるとするなら、そもそもマハーエフシュチナは何人の宗教であり、何人の觀念であらうか？

マハーエフシュチナがこの問題に對して何う答へてゐるかは、既に吾々の知るところである。マハーエフシュチナは自らを眞のプロレタリアートの觀念であると考へてゐるのであ

る。吾々は吾々の見地からこの問題に對して多少異つた答へをしなければならないのである。現在の有樣に於いては、マハーエフシュチナは單なる襤褸プロレタリアートの觀念、下等勞働者の觀念、非質的勞働者の觀念、無職業者の觀念である。自らのことを眞の勞働者の觀念と呼んだマハーエフシュチナの言葉よりも、この方の呼び方が一層信ずるに足りると言つていい。マハーエフシュチナは襤褸プロレタリアートに對して、マハーエフシュチナの謂はゆる『浮浪人、怠け者、無賴漢』に對して、特別に同情を持つてゐる。マハーエフシュチナの持つてゐる感情が同感を呼ばずにはゐないこと、又襤褸プロレタリアートの間にあつてマハーエフシュチナが廣く喧傳されるに相違ないことは、少しの疑ひも起こさない。浮浪人、怠け者、無賴漢などがマハーエフシュチナに對して抱いてゐる同感は、マハーエフシュチナの煽動的要求の上に基くことであらうし、浮浪人、怠け者、無賴漢などに對してマハーエフシュチナの持つてゐる同情は、マハーエフシュチナの根本的思想から直接に流出してゐるのであらう。この二つの點に就いて暫く論ずることにしよう。

實際襤褸プロレタリアートに對してマハーエフシュチナの持つてゐる同感は、一方から

見れば意識的の勞働者に對する、他方から見れば優秀なる勞働に對する、マハーエフシュチナの反感の避くべからざる結果である。勞働者が意識的になり、發達して來れば來る程、通常益々彼等は黨派的な社會主義的勞働者になつて來るのである。勞働者がこのやうに一層意識的になるといふことは、マハーエフシュチナによれば、この發達した勞働者がインティェリゲンツィヤによつて欺瞞にかゝり、眼を覆はれるといふことになるのである。マハーエフシュチナの理論を擴めるのに最も適當な人々は、つまり最も意識的でない、最も暗迷な勞働者の集團である。こゝからマハーエフシュチナの後者に對する同情が湧いて來るのである。ア・ヨーリスキーは憤激してかう言つてゐる。――『社會主義は規律正しい、文化を重んずる勞働者のみをプロレタリアートとして認め、浮浪人のことを輕蔑的に蝨襤とか寄生蟲とか言つてゐる。』（『智力的勞働者』第三部、第一章、一七頁。）『組織された働勞者の集團はブルジュアージヤと共に浮浪人、怠け者、無賴漢などに反對するのである。』（『ブルジュアージヤ的革命と勞働問題』一七頁。）『社會主義的な饒舌の中に如何に多くの嘘があるかを、現代に於いて無意識的なりとも感じてゐるのは、實に彼等浮浪人、怠け者、

無賴漢などである。』（同書、九頁。）『勞働者の中で知識のある者達が支配者階級によつて擴げられた網の中へ這ひ込むときに、又は知識のある社會主義的な勞働者が餓えたるあらゆる勞働者の群れの苦痛を忘れて、支配者側の利益を擁護してゐるときに、この餓えたる群れに殘されたものは、最も早く好機會を攫んで呪はしい富をすべて破壞し破滅し去ることより外に何ものもないのである。勞働者が常に作るところの、然も支配階級の誰も彼もが一體となつて常に掠奪し去つて、無職の奴隸に對しては黑パンの屑さへも殘さうとしないところの富を、根本的に破壞して了ふことより外には、何ものも殘つてゐないのである。』（同書、一〇頁。）そしてかのチェルノソーチェンストヲ（英譯 Black Hundred）の破壞的行動の辯解の言葉は、こゝから實に一歩か二歩の手近の所にあるのであつた。マハーエフシュチナは勇敢にもこの二歩を踏み切つて、チェルノソーチェンストヲの全哲學を與へて、その破壞的行動には憎むべきインティェリゲンツィヤの階級に對する蝨襤プロレタリアートの反抗があると見て、その破壞的行動を是認したのである。（千九百五年の擾亂に政府は全く動搖して了つて、一般に漫曼した革命的精神に對して如何ともし難かつたので、反動革命

を起す爲めに私かに畫策するところがあつた。そしてその運動は革命家に對する愛國的なロシヤ人の僞らざる反抗であつた。この反抗の目的は當時の無法律狀態、混亂狀態に乘じて、革命家に危害を加へんとし、その方法によつて專制政治を擁護しようとするのにあつた。これがチェルノソーチェンストヲと呼ばれた反動革命家の團體であつた。—譯者註。）ア・ヲーリスキーは愉快さうにかう立論するのである。——『自己解放の爲めの闘爭の後に、ロシヤのインティェリゲンチィヤは、尙一人の憎むべき敵があると考へてゐたのである。インティェリゲンツィはその敵を浮浪人とか無賴漢とか名づけたのである。そして萬人の自由を徹底的に獲得した後で、インティェリゲンツィヤはロシヤのあらゆる牢獄をそのならず者によつて一杯にして了はうと考へたのである』?!……インティェリゲンツィヤの人々も社會主義的勞働者も『最早決して政府の銃彈に當つて死ぬことはあるまい。彼等は必ずやみすぼらしい浮浪人のナイフにかゝつて滅びるに相違ないのである。社會主義的理想、自由、萬人の幸福などの身なりのちゃんとした宣傳者は、必ずや襤褸をまとつた人間の手に依て毆打され、燒かれ、斬り裂かれるに相違ないのである！』これ等の言葉の中に包まれた惡を喜ぶ

心持は、充分明かに現されてゐるのであるが、それは次の言葉の中に尙一層明かになつて出てゐるのである。ア・ヲーリスキーは尙言葉を續けてかういふ。——『この理由によつてインティェリゲンツィヤは自らを萬人の自由の偉大なる殉道者と考へてゐるのである。全ロシヤのチェルノソーチェンストヲがあきめくらで、永い間の奴隷に慣れてゐて溫順であつて、彼等は自由を差出された時でさへ、自己の奴隷的狀態が廢止されるのを願つてゐないのである。……すべてのロシヤのインティェリゲンツィヤ、あらゆる革命家、あらゆる社會主義者はかう深く信じてゐるのである。又インティェリゲンツィヤは次のやうに信じてゐるのである。——インティェリゲンツィヤの人々を殺戮せんとする無賴漢達は、一つの首に對して幾らといふ褒美を貰つてゐるならずものや强盜であつて、政府の間諜、警察の廻し者と少しも違はないのである。彼等によつて殺されたインティェリゲント（インティェリゲンツィヤの人々）は、自由の祭壇の淸き犧牲者である。』（同書、七二—七三頁。）マハーエフシュチナの同情は殺す方の側にあつて、殺される方の側に向けられてゐない。何故なら『チェルノソーチェンストヲはインティェリゲンツィヤの人々を殺すことによつて支配的階級の人々を殺

すからである。その支配的階級の人々は勞働者を搾取して生活してゐること丈けで滿足せず、尙も勞働闘爭を利用して、自己の寄生蟲的生活を完全に强固にしようとしてゐるのである。』（同書、七四頁。）吾々はこのマハーエフシュチナのチェルノソーチェンストヲ辯護を觸れずに殘して置くことにしよう。只こゝではマハーエフシュチナが極度プロレタリアートに同情を有し、組織的な勞働者達には反感を持つてゐることを明記して置く。この後者の理由から、質的勞働の代表者に對するマハーエフシュチナの反感が流れ出て來たのである。勞働者の中でも低級なもの程質的勞働に於いては最も下手なことを特色としてゐるが、このことがマハーエフシュチナの同情を呼び起したのである。マハーエフシュチナの見るところによれば、前に述べたやうに、勞働力の質的價値は餘剩價値の一部を教育に費したことによつて得られたものである。然しながら、若し例外な場合があたつとする。そして餘剩價値がその場合の教育の上の最大の力とならずに、克己勉勵が、卽ち勞働者自身が自己の血と汗との代價を以つて或る程度の知識を得て、普通の勞働者の仕事よりも一層交換價値のある勞働力を得たとする。するとこの場合にもマハーエフシュチナは、この勞働者の

優秀な勞働に對する比較的高い支拂金に就いても、やはり否定的な態度を取るのである。何故なら彼の仕事に對する高い報酬そのものが、彼乃至は彼の子孫を、被搾取者階級より搾取者階級の方へ、プロレタリアートよりブルジュアージヤ乃至インティェリゲンツィヤの方へ、移動させるかも知れないからである。マハーエフシュチナはかう立論するのである。——よし又そのやうな移動が行はれないにしたところで、どうしても勞働者そのもの、間に、卽ち一方の多少とも優秀な性質の勞働力を有するものと他方のプロレタリアートの一層みじめな、一層下層な群との間に、必然的な相違が生じて來るのである云々。そしてマハーエフシュチナのすべての同情は後者の方に向けられてゐるのである。マハーエフシュチナは云ふ。——社會主義は何時でも勞働者の中の優秀な、上層の側の方に味方してゐるので、從つて勞働者の間に於ける社會主義者の活動があるときには、何時でも高い給料を支拂はれる勞働者とみじめな下層の勞働者、浮浪人、怠け者、無賴漢との間に、相互の敵愾心が湧いて來、それが大きくなつて來るのであると。（同書、七七頁。）然しマハーエフシュチナとても自己の活動の範圍を勞働者の中のこの下層な位置の人々のみに限ることを願つ

てゐた譯ではなかつた。それどころではなく、マハーエフシュチナは眞のプロレタリアートの觀念、唯一の眞の勞働黨とは自分の事であると言ひがかりをした程である。マハーエフシュチナは自分のことを眞のプロレタリアート的の社會主義と名づけさへもしたのである。今迄に吾々はいろいろのことを述べて來た。マハーエフシュチナが襤褸プロレタリアート、下等プロレタリアートに對して同情を持つてゐたことをも述べた。また優秀なる勞働力を有する勞働者に對するマハーエフシュチナの反感に就いても述べて來た。さうして今や吾々はより一層大きな根據の下に、マハーエフシュチナの空想や言ひがかりなどに對して、次のやうな斷案を下すことが出來ると思ふのである。――卽ちマハーエフシュチナは襤褸プロレタリアートの觀念であると。

然しこれは一方面からのみ見た問題であつて、これによつて說明されるのは、浮浪人、怠け者、無賴漢などに對するマハーエフシュチナの同情丈けである。そこで今はかう質問して見ることにする。――果してマハーエフシュチナは贊成者を得ることが出來るであらうかと。この問に對する肯定的な解答には疑問の餘地がない。何故ならマハーエフシュチナ

の中にある煽動的な傾向及び反文化的傾向などは、疑ひなくすべての勞働者の中の『最も意識的ならざる』者達を、卽ちあらゆる襤褸プロレタリアート、あらゆる浮浪人、怠け者、無賴漢達を歡ばせるに相違ないからである。文化に對するマハーエフシュチナの態度を多少なりとも論ずることは、非常に興味のあることである。何故なら實にこの點に於いて最もよくマハーエフシュチナの心理が現れてゐるからである。その心理は非常な厭世的のものであつて、文明、文化、進步、歷史に對するマハーエフシュチナの態度もそのやうに厭世的のものである。マハーエフシュチナに取つては、『將來は何の灯もない暗と霧の中に包まれて居り、過去のすべては暴行と欺瞞この無限な、絕間のない一つの鎖に過ぎない』のである（エ・ロジーンスキー著『代議制度の總決算』三頁及び五頁。）これによつて見ても、マハーエフシュチナが文化及び進步に對して如何なる態度を取つてゐるかが察せられよう。文化に對するこの態度に於いて、マハーエフシュチナはロシヤのインティェリゲンツィヤの持つた代表的な傾向と同一なものを持つてゐるのである。その點に於いてマハーエフシュチナは一直線に、驀地にピーサリェフやトルストイの方へ走つて行つたのである。エ・ロ

ジーンスキーは、インティェリゲンツィヤに關する自己の著述の中で、ロシヤのインティェリゲンツィヤのこの思想の傾向に就いて全く默してはゐるけれども、然し彼等インティェリゲンツィヤとマハーエフシュチナとの關係には看過し難いものがある。文化文明に對する關係に於いては、マハーエフシュチナは爪の先きまでマルクシーズムで武裝をと、のへたピーサリュフ的傾向、トルストイ的傾向である。文化は、マハーエフシュチナに取つては、丁度トルストイ主義者に取つてのやうに、全く價値の小さなものである。ピーサリェフ主義者に取つてのやうにマハーエフシュチナに取つても、すべて文化などといふものは『餓えたる人々と凍えたる人々』とに就いての問題を覆ひ匿してゐるのである。社會主義は文化の程度を低下せしめることなく、社會的正義を獲得しようとしてゐるのである。吾々がこのやうな社會主義の運動に加はるのは、社會的正義と文化の程度とが相互に反比例的な關係にあるとは何人によつても、當のマハーエフシュチナによつても、未だ示されないからである。若し兩者が相反するものだといふことが示されたならば、その時には吾々もピーサリェフ主義者、トルストイ主義者、マハーエフ主義者になつて、正義の爲めにあらゆる

文化を犧牲にしても惜しまぬであらう。然しそれが示されない限りは、吾々はこの文化と正義との矛盾といふ問題の成立を否定するのである。然し、若しもそのやうな兩者の矛盾の問題が成立し得るとすれば、その時には答へは一つしか在り得ないであらう。即ち文化をやっつけて了へ、社會的正義が支配せよである！マハーエフシュチナはその代表者たるア・ヲーリスキーの口を借りて、實にこのやうに問題を立て、このやうに答へたのである。ア・ヲーリスキーは、あらゆる文化が連續した暴虐であり、文化の社會が今日まで人間を奴隷にする爲めに生まれ又存在してゐるのであり、歴史の運行が少數者の支配者階級の意志の表現であると、深く深く信じてゐるのである。（『社會主義の破産』二一頁。即ち少數者の支配者が歴史を作るといふのである。）ア・ヲーリスキーは社會主義の頭上に攻撃の言葉を浴びせてかう言つてゐる。――社會主義は半世紀も老いぼれたやうな、昔のまゝの見地を捨てようとはしないで、文化そのものでなく、ブルジュアージャ社會に於けるこの文化の墮落に對して戰つてゐるのである。當の社會そのものと戰はずに、單にこの社會の墮落に對して戰つてゐるのであると。（同書、二三頁。）又かうも言つてゐる。――社會主義が

激しく敵對してゐるのは、現代の奴隷的の階級制度に對してではなく、又ブルジュアージャ的階級全體に對してではなく、單にこの文明の社會の墮落してゐるところの一つの形式に對してであると。又社會主義は單に現代社會の病的な變體性に對して反抗してゐるので、一般の文明社會そのものに對して反抗してゐるのではないと。（『智力的勞働者』第三部、第二分冊、六頁。）然るに餓えたる群衆に取つての第一の敵は卽ちこの文明社會であつて、この文明社會こそ掠奪の爲めに、又勞働者達の奴隷制度の爲めに、生まれて來たものであり、現に成長しつゝあるものであると。（『ブルジュアージャ的革命と勞働問題』一〇二頁。）ア・ヲーリスキーのすべての攻擊の言葉は、社會的革命に對する社會主義の要求がマハーエフシュチナに取つては極度に憎むべきものであることを、充分明瞭に示してゐるのである。マハーエフシュチナは社會主義の生ぬるいことを責め、過去の革命的激情を裏切つたことを非難してゐるのである。又マハーエフシュチナは、社會主義が單に改造しようと望んでゐるところの文明社會そのものを、地上から掃き捨てゝ了はんこと望んでゐるのである。然しこれ等マハーエフシュチナの言つたことの中で眞實とすることの出來るのは、實際社

會主義が『文明社會』に對しては革命的態度を取つたが、文化進歩の問題に對しては進化說を採つたといふ說明である。マハーエフシュチナはこの點に裏切りこ欺瞞こを見たのである。といふのもマハーエフシュチナに取つては、進歩そのものが欺瞞であり、嘘僞であるからである。『文化の進歩』といふ光り燦然たる金箔附きの嘘僞の下に、現代のあらゆる文明社會の中に手のつけられようもない野蠻や野獸性が日に日に多くなり深くなつて行くからであるこ。（『潮流に反して』第一號、四頁。）從つてこのやうに考へてゐるマハーエフシュチナに取つては、文化や進歩に對して社會主義が進化論的態度を取つたことは、社會主義がブルジュアージャ的文明社會と妥協したのこ同一だといふことになつて來るのである。ア・ヲーリスキーは云ふ。――『信じ切つてゐる社會主義者になつた者、社會主義者こ共に現代の社會の運行を信じ、現代の制度の發達が自然と勞働者の解放、萬人の平等に導くこ信じてゐる人、――そのやうな人々にはもはや現代の制度を掠奪的制度として視ることは出來なくなる。そのやうな人々はこの掠奪的制度を、勞働者の幸福解放の爲めの準備こし、價ひあるものとして、それを愛するやうになるのである。そのやうな人々はこの制

度の發達の爲めに奔走しなければならなくならうし、この掠奪的制度の完成の爲めに戰ふやうになるであらう。そして勞働者解放の最も近い唯一の道を選んだのだと信ずるに至るであらう。』(『ブルジュアージャ的革命と勞働問題』八五頁。)このア・ヲーリスキーの言葉によつても、マハーエフシュチナに取つては、現代の制度が掠奪に過ぎないといふことが分るのである。從つて文化か正義かといふ場合のディレンマを、マハーエフシュチナが如何に解決するかといふことも明かに分るのである。マハーエフシュチナに取つては、この問題を正義か掠奪かといふ問題に代へても、少しも變りがないのである。そしてこの問題に對しては二つの解答は在り得ないのである。こゝにマハーエフシュチナの反文化的傾向の根柢が横つてゐるのであり、こゝにマハーエフシュチナの煽動的要求の根據が横つてゐるのである。マハーエフシュチナ自身が希望してゐるのか否かは別としても、マハーエフシュチナは全くの煽動者となつて現れてゐるのであり、又このことがあらゆる浮浪人、怠け者、無賴漢など、マハーエフシュチナとの間に相互の同情を起さずには置かないのである。そして少くとも我々は上に述べたマハーエフシュチナの主張を――卽ち『これ等の無職業者、怠け者、

無賴漢』及び襤褸プロレタリアートに殘されたことは、『よい機會があり次第、君等(無職業、怠け者、無賴漢)が創造しながら何時でも支配者階級によつて掠奪されて了ふところの呪ふべき富を、滅茶苦茶に破壞し破滅することより外に何ものもないのである』といふ言葉を、――全く典型的な煽動の言葉であるといふ外に言ひ樣がないのである。このことは單に襤褸プロレタリアートの理想である許りでなく、何よりも支配者階級の財產を把握しようと願つてゐるマハーエフシュチナの理想でもある。生產の問題の如きはマハーエフシュチナにとつては全く重要ではなく、富の分配といふことのみがマハーエフシュチナに問題となつてゐるのである。その問題に就いては、マハーエフシュチナはまたもや昔のナロードニチェストヲの言つた言葉を繰返してゐるのである。――『プロレタリアートは、自己の陰謀及び獨裁政治の方法によつて國家的機能の支配權を獲得するに至るであらうが、その目的とするところは今迄の堅固な財產制度を繁榮せしめた生產力を存在せしめぬやうな經濟的制度をば、混亂や無政府的狀態、破產的な騷ぎから導き出すが爲めである。プロレタリアートは權力の支配權を得んと努めるであらうが、それは現在の有識支配者階級

の財産、有識世界の財産を把握しようが爲めである。』(ア・ヲーリスキー『智力的勞働者』ジェニェワ版、第二部、五五頁。)そしてヲーリスキーはこの文の先きに長い中絶の徽しに點々をつけてゐるのである。といふのは、つまりマハーエフシュチナは價値の生産の問題に關係しては全く答ふるところを知らないからである。或る一定の力を獲得して了へば、謂はゆる『把握する』といふことはさまで困難なことではないであらう。然し把握の後に、そもそもどうするのであるか? その時には如何にして生産を組織するのであるか? そもそも如何にして社會生活を建てるのであるか? 社會主義のこれ等の中心的問題に對しては、マハーエフシュチナは答へてゐないのである。そしてこの問題を押しつけて、マハーエフシュチナに返答を要求するこ、マハーエフシュチナはその代辯者たるエ・ロジーンスキーの口を借りて、これ等の問題は餘りに當を得てゐない、マハーエフシュチナはそれに對して答へようとは思はぬこ云ふのである。又そんなことをすることは、狼のやうなインティリゲンツィヤの前に己の手の中を暴露するやうなものだといふのである。(『潮流に反して』第二號、一六頁。)實にマハーエフシュチナの云ふところは要するに煽動に過ぎないのであるが、煽動は理論よりもたやすい仕事であり、單なる否定は建設よりも樂な仕事である。

然らばそもそもどの點にマハーエフシュチナの根本的誤謬が存在するのであるか? 吾々はそのことを前に述べた。その誤謬は、文化と社會的正義との間の反比例的な關係を獨斷的に認めたといふ點にあるのである。この點ではマハーエフシュチナは、かのミハイローフスキーの批評的ナロードニチェストヲの足跡を盲目的に踏んで行つたのである。ミハイローフスキーが誤つて、又獨斷的にも、人間の個性の深さと廣さとの間に反比例的關係を認めたことは他のところで吾々の示したことであるが、ミハイローフスキーの理想は個性の最大の廣さといふことであつた。眞理—正義の現れであるところの萬人の平等へ導く最大の廣さであつた。この眞理—正義の爲めに、ミハイローフスキーは個性の深さを、經濟的に言へば、勞働の文化の中に、即ち勞働の質の中に表現された個性の深さ、文化の程度を高揚せしめる個性の深さを犧牲にしたのであつた。マハーエフシュチナの見方がこれと全く同一であることは直ぐに分らう。進歩に對する關係もこれと同じである。ミハイローフスキ

ーに取つては『進歩』は眞實には退歩であつた。ラウロフもさう思つてゐた。何故なら、人類は益々個性の廣さを去つて、個性の深さの方へ行つたからである。正義が謂はゆる萬人の平等を要求してゐる間にも、人類は萬人の平等といふことから遠ざかつて、仕事の文化卽ち專門化といふ方へ近づいたからと云ふのである。マハーエフシュチナはこの斷案を全く借用したのであつた。そして『あらゆる精神的の進歩は、今迄人類の大多數者に反對する進歩であつた』といふカ・マルクス（『神聖家庭』時代）の說に全く贊成したのである。

マルクスの『神聖なる家庭』を譯したマハーエフ主義者はかう書いてゐる。――『眞實に勞働者の團體の階級的位置を獲得する爲めには、勞働的の奴隷制度を顚覆するまでは歷史の發達が人類の大多數者に矛盾するものであるといふ條件を所有する必要がある。』（『神聖なる家庭』ノーウイ・ゴーロス出版、第一冊分、四六―四七頁。）他の言葉でいふならば、マハーエフシュチナは昔のナロードニチェストヲの主張を繰返して、歷史の進歩は退歩であるといふのである。ミハイローフスキーの言說が現在マハーエフシュチナの搾取するところとなつたといふことに關しては、當のミハイローフスキーには全く少しの罪もないので

ある。然し一方マハーエフシュチナはこの點にも何の障りをも感ずることなく、昔のナロードニチェストヲの誤りの上に根據を置いて、文化の廣さの爲めに深さを否定し、正義の爲めに文化と進歩とを否定しようとしたのであつた。マハーエフシュチナは文化と正義との融合が可能であるとは思はなかつたのである。資本主義的社會に對する社會主義の態度が革命的であり得ること、然し同時に資本主義的の社會によつて作られた文化に對する社會主義の態度が進化論的であり得ること――このことをマハーエフシュチナは理解しなかつたのである。マハーエフシュチナは單に正義の爲めに戰ふのであつて、文化の爲めに戰ふのではない。周圍の一切に對して只革命的態度を認めるのみである。進化論的な態度を認めないのである。進化を認めるといふことが必ずしも革命を否定することではないこと、又進化論的見地が必ずしも『漸進主義的傾向』といふ譯ではないこと――これがマハーエフシュチナには分らないのである。從つて進化論的な發達といふことがマハーエフシュチナには不可解なのである。この點に於いてマハーエフシュチナに對するリェフ・トルストイの影響を看過することが出來ない。然もア・ヲーリスキーはトルストイを僞善的な老人

と呼んでゐるのである。ダルツェンの言つた『「漸進性」とか「突發的ならざること」とかは理性のあらゆる進歩には缺くべからざるものである』ことが、マハーエフシュチナには不可解なのである。マハーエフシュチナはリェフ・トルストイに從つて社會の發達の道程に於いて、單に鐵の足械が黄金の足械に代つたことを認めるのみである。徐々に進歩するといふことをマハーエフシュチナは否定するのである。然し面白いことには、マハーエフシュチナはこの漸進性といふことを勞働階級の爲めにのみ否定してゐるのである。例へば智力的勞働者の爲めにはこれを充分に認めてゐるのである。インティェリゲンツィヤは憲法政治の爲めに君主專制政治と鬪爭をする、それから民主的共和政治の爲めに立憲君主政治と鬪爭し、次に社會主義的制度卽ちインティェリゲンツィヤの社會的理想の爲めに民主的共和政治と戰ふのであると言つてゐるのである。そしてマハーエフシュチナはインティェリゲンツィヤの惡魔的に狡猾な、又惡魔的に智巧な戰術に憤慨して、筋肉勞働者に對しては單に唯一の道しか認めないのである。卽ち必然といふ束縛の世界から自由の世界へと一擧に跳躍するといふ只一つの道しか認めないのである。

このマハーエフシュチナの戰術は旣に吾々の述べたところである。そしてこの跳躍の中に、マハーエフシュチナは自己の眞の革命的本質、卽ち他のすべての社會主義的傾向から自己を違つたものとするところの本質を見るのである。勞働者の生活の人間的條件を一歩一歩に獲得するように努めること、群衆に準備を與へ、組織を與へるようにすること、額を壁にぶつけて破壞しないようにすること、然しブルジュアージヤ的の讓歩などに決して滿足しないこと、敵對者に打擊を與ふる爲めにあらゆる機會及び敵對者のあらゆる弱點を利用すること、謂はゆる『健全なる判斷』によつて命ぜられたのであらうとも、決して如何なる制限によつても鬪爭を拘束しないこと――これ等すべてのことを、マハーエフシュチナは社會主義の側の裏切りであり、欺瞞であると考へたのである。マハーエフシュチナは一擧にして一切を得んと望んでゐるのである。卽ちその方法は旣に吾々の知るところである。卽ちその方法とは、プロレタリアートの世界的の組織、各國の民衆の間のプロレタリアートの陰謀及び同一精神の行動である。組織、陰謀及び行動、――この三つはマハーエフシュチナの中に於いては一つに統合されてゐる。世界的の組織――これは

特別に新しいといふ程のものではない。それは何時ぞやのインターナショナルの觀念の中にも現はれてゐた。各國民の間の陰謀といふものも、これ等すべての陰謀に加はつたプロレタリアートの同一精神の行動といふことも、インターナショナルの中から持ち來たされたものである。然し全部のプロレタリアートを陰謀に入らしめ得るといふ信念が、マハーエフシュチナの特色を作つてゐるのであり、最後の論理的終局點まで到達するところのマハーエフシュチナの典型的な虛無主義を作つてゐるのである。社會主義は秘密結社といふことを息苦しく思つたので、其處から急いで機會があり次第飛び出さうとしたのである。それといふのも、社會主義は苦しい經驗によつて、小さい團體とかサークルとかを作るには秘密結社よりい、ところはないと知つたのであつたが、又この小さい團體とかサークルとか云ふものは、言はば非常な重病のやうなもので、その爲めに屢々いろいろの團體が滅びなければならないと知つたからである。然しマハーエフシュチナは謂はゆる地理を信じない方の組で、自分に取つては、法則などはないと考へてゐるのであつた。從つて、マハーエフシュチナは非常な信念を以つて秘密結社の中に生活し、其處に於いて成長しようと

欲したのである。それのみではなく、マハーエフシュチナは秘密結社の中へプロレタリアート全體を引きづり込まうと欲してゐるのであるが、そのやうなことは丁度解の水を一輪さしの花瓶の中へ入れ、鐵の帽子を被せて成長させようとするに等しいのである。インティェリゲンツィヤの團體のやうに、マハーエフシュチナは秘密結社的の生活をなし得るであらうが、その場合には、秘密結社の通常齎らすところの影響を避けることは出來ないのである。マハーエフ主義者がたつた二人しかゐない現在に於いてさへ、その中の一人であるア・ヲーリスキーは、他の一人であるエ・ロジーンスキーを眞のマハーエフ主義者として認めてゐないのである。然らば將來一體何うなることであらう？　この小さい團體とかサークルとかの成長と共に――それは秘密結社の中では成長せざるを得ないから――この二人のマハーエフ主義者が三つ四つの團體なり黨派なりに分裂して行くことになつたら何うだらう！　吾々の生きてゐる間にマハーエフシュチナがこのやうに分裂して行くかどうかは分らないが、勞働者がマハーエフシュチナの例に倣はないことは丈けは、疑ひのないことである。然し假りに若しマハーエフシュチナが今迄不可能であつたことをなし得るとしても、そして

マハーエフシュチナが世界的のプロレタリアートの組織を實現し各國の民衆の間の陰謀を作り得たとしても、然しやはりあらゆるプロレタリアートの同一精神の行動といふことは不可能であらう。マハーエフシュチナの見地からしても不可能であらう。何故ならその行動といふものは虛無の境に生れるのではなくて、政治的經濟的の土壤の上に起らなければならないからである。假りにロシヤ、イギリス、イスパニヤに同時に經濟的のストライキを起さうとしても、それは不可能であらう。その理由の一つを比喩的に言つて見れば、イスパニヤ及びロシヤには雨が降つてゐるといふのに、イギリスには太陽が照つてゐるといふ譯だからである。卽ちこれ等の三國に於けるプロレタリアートの經濟的政治的の生活事情が非常に異つてゐるので（將來もこの通りであらう）、よしどのやうな各國の民衆間の陰謀を作り得たとしても、同一精神の行動といふものは不可能である。それを考へることさへ不可能である。同一の條件といふことは只禿禿プロレタリアートに取つてのみあり得ることである。其處でマハーエフシュチナが世界的組織に結合すべきプロレタリアートの群衆を考へたとすれば、この禿禿プロレタリアートの外には何者もあり得ないのである。

このことを考へて見ても、マハーエフシュチナが只禿禿プロレタリアートのみの觀念であり、又あり得るといふことが肯かれるであらう。それのみならず、經濟的のストライキを勞働革命に移す爲めの虛無主義的なタイプの小團體乃至小サークルの役目と意義とに對するマハーエフシュチナそのものゝ觀察點も、批評に堪へることが出來ないであらう。この觀察點は個性の全能に對する信念、及び全世界の歷史は少數の人々の意志によつて左右し得るといふ信念――この二つのマハーエフシュチナの信念から必然的に生じて來たものである。若しもさうとするならば、リェフ・トルストイが言つたやうに『只かくあれと望みさへすれば』それでいゝ譯である。忽ちにして經濟的ストライキを勞働革命にすることが出來る譯である。そして、一切の害惡の根本は、社會主義者がそれを故意に望まないといふことになる譯である。從つて、若し千九百三年頃にマハーエフシュチナの組織が存在さへしてゐたなら、南ロシヤに於ける大ストライキはやすやすと全ロシヤ的の勞働革命になり得たといふ譯である。ア・ヲーリスキーは、『その當時に革命を叫ぶべき理由が社會主義者に取つては一つもなかつたのである』と言つてゐる。（『智力的勞働者』第一部、二一

頁。）彼の書物を讀んで見ると、この理由といふことの中に、一切の問題があるかのやうに思はれるのである。恰も社會主義者が只革命を望みさへして、全體の蜂起を呼ばはりさへしたなら、忽ちにしてそれが出來上るのだと思つてゐるやうである。然し社會主義者は革命を呼ばはるべき理由がなくつて呼ばはらなかつたのではない。（理由などは何時でもある。）そのやうな革命の呼び聲からは依然として何ものをも生じないであらうが故に、革命を呼ばはるべき理由が社會主義者にはなかつたのである。マハーエフシュチナにはこれが理解出來ないのである。マハーエフシュチナは自己の虚無主義的な眩惑に罹つてゐるので、革命を呼ばはりさへすれば（卽ち望みさへすれば！）一揆は出來上がると考へこんでゐるのである。このことを思ふと、ハンブルグで月は造られるものだと信じてゐたイスパニヤの王のフェルヂナンド七世のことが思はず胸に浮んで來るではないか。

全體の經濟的ストライキから全體的の勞働一揆に至るまでの道は非常に長いのであつて、如何なるマハーエフシュチナとてもその距離を一飛びに飛び超えることは到底出來難いのである。この場合問題は、その理論に於いて幼稚なマハーエフシュチナがいふやうに、

『理由』の中にあるのではない。問題はマハーエフシュチナの大嫌ひな客觀的條件の複雜な結合の中にあるのである。社會の經濟的構造の中にあるのである。社會の政治的組織の中にあるのである。この場合には社會的科學の否定といふことも、政治に對する無視といふことも、マハーエフシュチナにとつて何の助けともならないのである。陰謀に對するマハーエフシュチナの信念も、秘密結社に對するマハーエフシュチナの希望も、これ等すべてはマハーエフシュチナのユートピヤから出て來たものに外ならないのであるが、然もマハーエフシュチナはすべての社會主義のユートピヤを頻りに攻擊してゐるのである。その上にマハーエフシュチナのこのユートピヤに尙マハーエフシュチナの政治學に對する憎惡が加はり、經濟學に對する反抗心が加はるのである。これは、吾々に七十年代の初めのバクーニン主義時代を偲ばさせる樣な古い歌の一つに過ぎないのである。マハーエフシュチナは、人々が經濟的鬪爭許りでなく政治的の鬪爭をも勞働階級に結び附けると言つて、憤慨してゐる。そしてこのことを、インティリゲンツィヤが自己の利益の爲めの鬪爭の方へプロレタリアートを誘惑したのだと言つてゐる。社會主義はいふ。――プロレタリアートと資本家

との衝突が起ると、當の資本家の手中にあるところの國家的權力が何時でも資本家援助の爲めに出て來る。從つてすべての純經濟的鬪爭も必然的に又不可抗的に政治的鬪爭の中へ移動して行くのである。資本に對する鬪爭は權力に對する鬪爭となつて行く云々。この點から、すべて社會的の問題に行くには政治的の問題を通らなければならず、又あらゆる階級的鬪爭は政治的鬪爭ならざるを得ないといふ根本的な結論が導き出されて來るのである。この結論はマハー！エフシュチナを非常に惱ましたのである。ア・ヲーリスキーはかう質問する。――『抑も何人が國家的權力の姿を被つて資本家を助けに來たのか？』そして彼はかう答へるのである。――『それは工場又は土地の所有主だけから出來上つてゐるところの、所有階級のすべての連合ではないか？ 筋肉勞働者の上に位してゐる階級であり、資本家によつて搾取された國家的の餘剩價値の消費者ではないか？ それはあらゆるブルジュアージャ的の階級ではないか？ そして彼等にとつては資本家のみが絶對權力者である。又勞働者の資本主義的搾り取りといふことが、このブルジュアージャ的階級の寄生蟲的存在の基金を構成するのである。又資本家を助けにやつて來るのは、國家の富の所有者の、何世紀かを費さ

れて出來上つたところの全組織ではないか？』（『社會主義の破產』、一七頁。）こゝから次のやうな結論が出て來るのである。――『掠奪といふことが、そもそもの分れ路である。文明社會の根柢である。それが掠奪者に物質的の富と文化との所有を與へ、その物質的富と文化との所有といふことによつて、掠奪者は被掠奪者に對する支配力、國家を組織してゐるところの支配力を得るのである。そして國家の滅亡といふことが、何世紀間の掠奪の滅亡といふことになるのである。』（同書、二九頁。）そしてマハーエフシュチナの反政治的傾向の根柢とは次の如くである。――『すべての政治といふものは、國家との妥協である。勞働革命となり行くところの純經濟的の鬪爭によつて根本的に滅ぼさるべき國家との妥協である。從つて政治と經濟との間には如何なる分界線もあり得ないのである。只唯一の勞働問題があるのみである。卽ちあらゆる有識階級を沒收するといふことだけである。』ヲーリスキーのいふところの勞働問題、卽ち有識階級の沒收といふことは、非常に美しいことである。然しどうしてマハーエフシュチナは、他の場合に於いて社會主義の文句をマハーエフシュチナ自身が繰返して言つてゐるのに氣がつかないのであらうか？ 單に一つの鬪爭

しかない、階級的闘爭しかないといふのは、全くマルクシーズムと同説である。經濟的闘爭と政治的闘爭とがあるのではない。經濟的闘爭が同時に政治的闘爭であるといふのは、全くマルクシーズムと同説である。（カール・マルクスは云ふ。――すべての經濟的闘爭は政治的闘爭であると。自分がこんな分り切つたことを云ふのを許して欲しい。然しこのことを云ふのはマハーエフシュチナに對して言はざるを得ないことである。）五カベーク丈けの爲めの經濟的闘爭にせよ、やはりそれは同時に必然的に政治的闘爭である。マハーエフシュチナはその『經濟主義』にもか、はらず、自分でも知らずに、丁度モリエールの描いた『ブルジュアー紳士』が一生散文で話してゐながら、自分ではそれに氣がつきもしなかつたのと同じやうに、政治的口調を以つて語つてゐるのである。……（C'est de la prose, monsier Jourdain!）そしてこのやうに無智なるが故に、マハーエフシュチナは屢々實に思ひ切つた言説を提出するのである。例へば、マハーエフシュチナはすべての政治的なことを否定しながら、全體の經濟的ストライキをプロレタリアートが獨裁政治權を獲得する爲めに宣傳したりするのである。從つてつまり政治を入口から追ひ拂へば、それは窓から逆戻りして來るといふ譯である。このプロレタリアートの獨裁權は如何なる範圍に屬するか、經濟方面にか、政治方面にか――マハーエフシュチナから返事を求めたなら、さぞ面白いことであらう。他の例を擧げるなら、マハーエフシュチナは、プロレタリアートに現實的な經濟的な利益を與へるであらう樣な法則を、階級的制度の範圍の中に持ち來たす爲めに、闘爭せんことを主張してゐる。（『潮流に反して』第三號、一一頁。）それは非常に結構なことである。闘爭するなら闘爭するがよい。然しどういふ風に闘爭するのか？　法律を政治上の力で實行せしむる爲めの經濟的ストライキによつてであるか？　マハーエフシュチナはこのやうな經路によつて、尙代議制度の方へ行つたのである。然しこの點にまで事柄が到達しない間は、マハーエフシュチナは如何なる根柢の上に法律の法理的解釋を立てようとするのか、經濟的の根柢の上にか、若しくは政治的の根柢の上にか？――マハーエフシュチナにかう質問したなら、さぞ面白いことであらう。ところがマハーエフシュチナは全然そのやうな自己の矛盾撞着には氣がつかないやうな風をして、政治は虛僞であり欺瞞である、いろいろな自由などといふものは勞働階級にとつては何にもならない、すべての人身保護命令

などといふものは單にインティリゲンツィヤにとつてのみ必要であると言つて、勞働階級を說服する爲めに全力を擧げてゐるのである。そしてこのことは、あらゆる階級、あらゆる身分のロシヤの市民をすべて、一樣に兇惡にも虐殺、銃刑に處した時代の戰時裁判や陸軍軍監區裁判などの行はれた時のやうな、激烈な調子で書かれてゐるのである。又このことは、無職業者が職業を有する勞働者を狂ひじみた、何とも言ひやうのない『沒收』の破目に會はそうとしてゐる時代に際して言はれてゐるのである。そしてその沒收の終極には絞刑の吏の繩が見えてゐるのである！　實際このやうなときに於いてロシヤに於けるよりも西歐の方が一層惡いとか、少くとも吾々のところに於けると全く同じだとか言つて(tout comme chez nous.)それを勞働者に信じさせる爲めには、非常な大膽さが必要であらう。實際よし人身保護令に如何なる缺點があるにせよ、又はブルジュアージャ的民主的の制度の腫物が如何なるものであるにせよ、この樣なときに於いてマハーエフシュチナ的偉大さの見地の高さから人身保護令を見下すには、非常な冒險が必要である。襤褸プロレタリアートの階級的理想は、マハーエフシュチナであると言つてゐるが、その襤褸プロレタリアートにとつてさへ、純物質的幸福の見地から見てさへ、民主的治下に生活するのと戰時裁判式の治下に生活するのとは、決して同一だとは言へないのである。

今迄のところで吾々は、マハーエフシュチナが眞のプロレタリアート的な觀念であると主張した部分に當たる、マハーエフシュチナ式の觀察の前半に對して、答へて來たのである。吾々には、マハーエフシュチナのそのやうな主張をもつと一層控へ目な形のものとなし得ることが分つたのである。そこで今度はマハーエフシュチナの後半の見解のことにする。社會主義はインティリゲンツィヤの觀念である、生產の資力及び手段の共有化は、智力的勞働者の階級的理想である――と主張するマハーエフシュチナの後半の見解を次に取扱ふことにする。マハーエフシュチナが全く無條件的にこの理想を採用して、それを他の不思議な社會主義的な理想と、卽ちマハーエフシュチナの言葉で言へば『知識の共有化』といふこと、結びつけた點を、先づ最初に述べるのは興味がある。ア・ヨーリスキーは社會主義を皮肉つたこともあつた。又現代の社會主義が二つの簡單に結ばれた、明かに不充分な不適當な眞理(共有化と民主主義のこと)の道によつて、自己の絕對無謬を擁護

しようとして、骨を折つてゐるとも言つて、彼は度々笑つた。（『社會主義の破産』二六頁。）それ等のことを考へて見ると、今吾々が取扱はうとする問題は益々面白くなつて來るのである。ア・ラーリスキーは上に述べたことを言ひながら、そのことが直ちに自らのことであるのに少しも氣がつかなかつたのである。何故といふに、マハーエフシュチナこそ、二つの明かに不充分な不適當な、マハーエフシュチナの謂はゆる現代の社會主義の眞理の簡單に結合されたものに外ならないからである。ア・ヲーリスキーは、『社會主義の云ふ萬能藥などは無效力だ』とか、又社會主義は單に問題の一部分しか實現することが出來ないと主張してゐる。ところがその後で、彼はその社會主義の全體（共有化）を自己のマハーエフシュチナの中に取り入れて、彼一流の判斷に從つてそれを補つてゐるのである。搾取者のインティェリゲンツィヤの階級的理想がそのまゝ、被搾取者のプロレタリアートの階級的理想の中へはいり込んでゐるのだから、實に面白いといふ外はない。『このことは說明し得ない、說き難い』といふ言葉は、マハーエフシュチナの中にざらにある。例へば、インティェリゲンツィヤの階級的理想をその階級の首要部の人々が宣傳しはしなかつたといふ

事實の如きがそれである。實際社會主義は智力的勞働者の觀念であらうか、インティェリゲンツィヤの階級的理想であらうか？ そして又實際子供じみた、近眼的な、徹底しないインティェリゲンツィヤの人々だけが、彼等にとつて非常に有利な階級的理想卽ち社會主義に到達しなかつたのであらうか？ 然らばそこに到達した人々は、自己の階級的觀念の確實性の中に確然として立つてゐたのであらうか？ （但しマハーエフ主義者は例外である。彼等は社會主義を征服したといふのであるから。）若しさうだとするなら、正統派から別れたマルクシスト達をそもそも如何なる蠅が刺したといふのか？ ストルーウェとかブルガーコフとかベルデャーエフとかの代表的のインティェリゲンツィヤの人々の、マルクシーズムからイデアリーズムへの移動は、そもそも何と解釋すべきであるか？ マハーエフシュチナは、『これは說明し得ない、說き難い』とでもいふのであらう。

然しこれ等はすべて通りがかりに言及した問題に過ぎない。最も興味のあるのは、マハーエフシュチナの云ふところの、インティェリゲンツィヤ自身の、又インティェリゲンツィヤによつて宣傳された階級的觀念卽ち社會主義の、搾取的性質に就いての證明である。それに

就いてマハーエフシュチナが擧げた證明は既に吾々の知るところである。マハーエフシュチナの理論によれば、社會的の歳入は三つの不均等な部分に分けられ、その中の最初のもの、卽ち總歳入の六分の一を資本家が消費し、次の六分の一を勞働者が、第三番目の、總歳入の三分の二をインティェリゲンツィヤが消費するといふのである。勿論この公式は、マルクシーズムが搾取の規範を百に等しいものとし、あらゆる社會的生産に於ける不動資本に對する流動資本の關係を四分の一に等しいものとした例に從つて、マハーエフシュチナが作り出したものである。然し、マハーエフシュチナはあらゆる制限なしにこの原則を使用して、例へば社會的總歳入の三分の二がインティェリゲンツィヤによつて要求されるのであると、斷乎として主張するのである。この要求された金額の中にインティェリゲンツィヤの搾取的意味が現れてゐる。然し社會主義が資本家によつて所有された六分の一の社會的歳入しかプロレタリアートに與へようとしないとすれば、そのことはインティェリゲンツィヤの階級的理想としての社會主義の搾取的性質を示してゐるものと言はなければならない。然しこのマハーエフシュチナの原則の中には、マハーエフシュチナ自身が氣にしながら默してゐるところの多くの自家撞着があるのである。先づ第一にマハーエフシュチナの理論によれば、資本家は社會的歳入の六分の一ではなく、總歳入の六分の五を受取る筈である。何故といふに、前述の通り、インティェリゲンツィヤが富の第二種の分配によつて得るところの歳入の三分の二といふものも、實に當の資本家から受取るのだからである。然し若しも吾々がマハーエフシュチナの原則に贊成するとならば、吾々はどうしてもこの原則から生ずる混亂狀態から出られないことになつて了ふ。資本家は餘剩價値の大部分を自己のものとして了ひ、その中からほんの少しだけをインティェリゲンツィヤに分け與へるのである、それ故にインティェリゲンツィヤは社會主義の理想の爲めにブルジュアージャと戰ふのである。——實際マハーエフシュチナがかう言つたのを吾々は聞いたのであつた。然らば一體どうしてかうなのか？　毎年毎年分配される社會的の總收入の中から、勞働者は六分の一を受け、資本家も六分の一を受ける、然るに、インティェリゲンツィヤは殘りの三分の二を取る——マハーエフシュチナはたつた今かう言つた許りである。すると、若しも資本家が、歳入の六分の五を受取るとすれば、その場合には資本家は社會的歳入の三分の二、自己の歳